

一般県道大川原小村線道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）

まえはらわだ
前原和田遺跡
(霧島市福山町)

2014年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター





序 文

この報告書は、一般県道大川原小村線道路改築事業に伴って、平成23年度から平成24年度にかけて実施した霧島市福山町佳例川に所在する前原和田遺跡の発掘調査の記録です。

前原和田遺跡では旧石器時代の石器や縄文時代、古墳時代の遺構・遺物、中世の畝状遺構が発見されました。大隅半島と薩摩半島の境界に位置する当遺跡から出土した縄文時代中期後半から後期の遺物は、在地土器と北部九州からの土器との関係を解明する上で貴重な資料となることと思います。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたり御協力をいただいた始良・伊佐地域振興局、霧島市教育委員会、関係各機関及び発掘調査・整理事業に従事された方々に厚くお礼を申し上げます。

平成26年3月

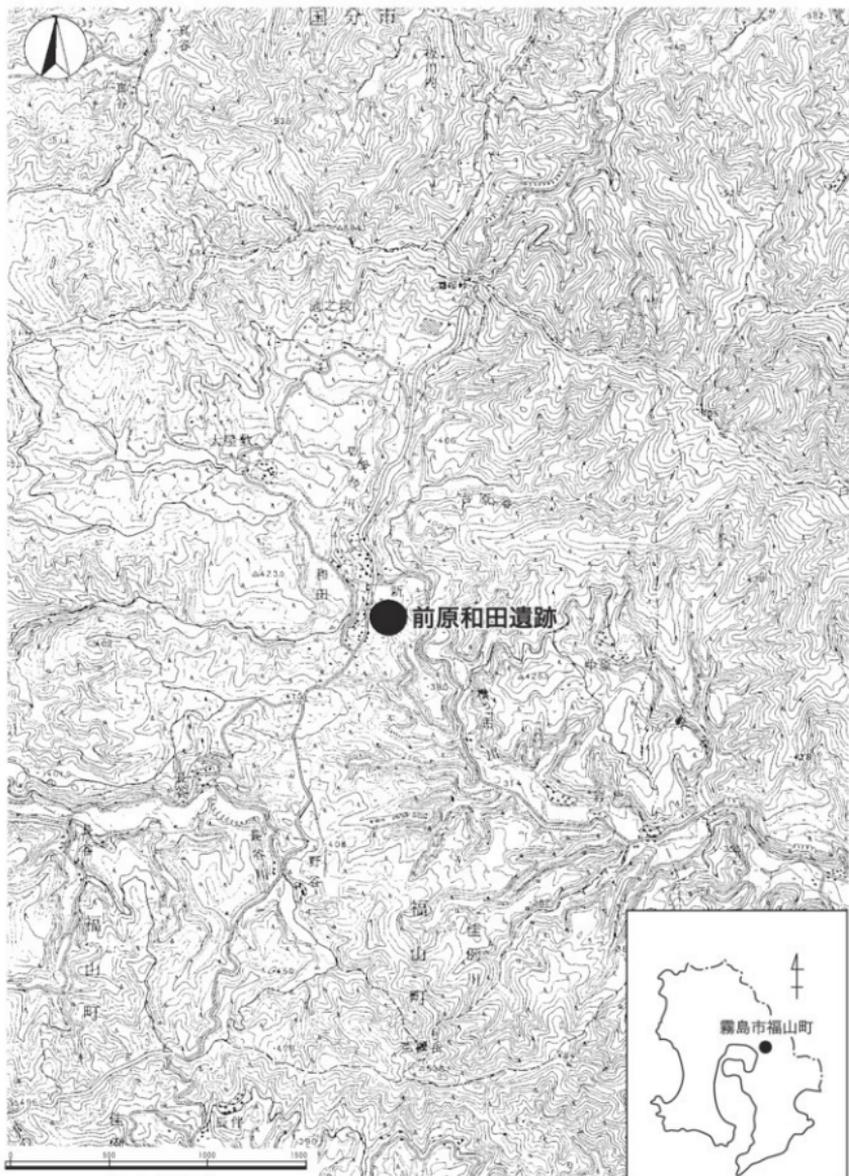
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 井ノ上 秀文

報 告 書 抄 録

ふりがな	まえはらわだ
書名	前原和田遺跡
副書名	一般県道大川原小村線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	(I)
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	181
編著者名	有馬 孝一 吉元 輝幸
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒 899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811
発行年月日	西暦 2014年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡 番号					
まえはらわだ 前原和田遺跡	かごしまけん 鹿児島県 きりしまし 霧島市 ふくやまちょう 福山町 かいがわびらき 佳例川比曾木 の 野	462187	62-9	31° 42' 54"	130° 53' 05"	試掘調査 20120126 本調査 20120801 ～ 20121026	3,800	一般県道大川原小村線道路改築事業に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前原和田遺跡	散布地 散布地	旧石器時代 縄文時代早期 中期末～後期 晩期	竪穴住居跡 土坑 黒曜石ブロック	石核、剥片 前平式土器、押形文土器 並木式土器、大平式土器、阿高系土器、南福寺式土器 入佐式土器、黒川式土器、干河原式土器、石斧、磨石、石皿 成川式土器	
	集落跡 散布地	古墳時代 中世以降	竪穴住居跡 畝状遺構 帯状硬化面		
遺跡の概要	古くは旧石器時代の石器から、新しいところでは中世以降の帯状硬化面まで幅広い時代の遺構、遺物を出土する遺跡である。中でも縄文時代中期末から後期初頭にかけての遺物が多量に出土し、薩摩半島、大隅半島の境界に位置する当遺跡は北部九州の土器と在地土器との関係性を考えていく上で重要な役割を占める。				



(S=1 : 25,000)

遺跡位置図

例 言

- 1 本書は、一般県道大川原小村線道路改築事業に伴う前原和田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県霧島市福山町佳例川に所在する。
- 3 発掘調査は、始良・伊佐地域振興局建設部道路建設課（事業主体）から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査は、平成23年度から平成24年度に実施し、整理・報告書作成作業は平成25年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 掲載遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 遺物注記等で用いた遺跡記号は「マワ」である。
- 7 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した方位は、すべて磁北である。
- 10 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。
- 11 遺構図及び遺物分布図の作成及びトレースは有馬、吉元が整理事業員の協力を得て行った。
- 12 出土遺物の実測・トレースは、有馬、吉元が整理事業員の協力を得て行った。
- 13 出土遺物の写真撮影は、吉岡、辻、今村が行った。
- 14 本報告書に係る自然科学分析は、株式会社 加速器分析研究所が行った。
- 15 本書の編集は、有馬が担当し、執筆の分担は次のとおりである。

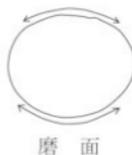
第1章	有馬孝一
第2章	吉元輝幸
第3章 第1節	有馬孝一
第2節	吉元輝幸
第3節 1	堂込秀人
2	有馬孝一
3	吉元輝幸
4	吉元輝幸
- 16 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

凡 例

1. 土器の法量の計測にあたり、観察表内の（ ）の表記は、残存状況の良好なものについて図面上で反転復元を行い口径・底径が推測できたもの、器高については口縁からと底部からの残存高である。
2. 土器実測図調整痕表示について

調整痕種		実測図表示例	留意点
ナ	工具ナデ		・工具幅を明瞭に
	ナ デ		・ナデ幅を明瞭に
ハケメ			・工具幅を明瞭に ・始点終点の表示 ・切り合い関係の重視
ミガキ			・ミガキ痕の重なり
指頭圧痕			・指幅の明示

3. 石器実測図表示について



4. 実測図スケール

○ 土器は、1/3で記載 ○ 石器は、1/1、1/2、1/4で記載

5. 縄文時代遺物出土状況のドット表示について

中期末～後期 III類：★ IV類：■ V類：▲ VI類：● VII類：◆

石器：○ フレーク：□ チップ：△ その他：●

晩期 VIII類：● IX類：▲ X類：■ XI類：◆ その他：●

目 次

巻頭図版

序文

報告書抄録

遺跡位置図

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 事前調査	1
第3節 本調査	1
第4節 整理・報告書作成	3
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 発掘調査の方法と成果	9
第1節 発掘調査の方法	9
1 調査の方法	9
2 遺構の認定と検出方法	9
第2節 層序	12
第3節 調査の成果	15
1 旧石器時代の調査	15
2 縄文時代の調査	18
3 古墳時代の調査	70
4 中世以降の調査	80
第4章 自然科学分析	85
第5章 総括	89

挿図目次

第1図	グリッド配置及び周辺地形	4	第34図	VI類土器(11)	40
第2図	周辺遺跡位置図	7	第35図	VI類土器(12)	41
第3図	グリッド配置図及びトレンチ配置図(1)	10	第36図	VI類土器(13)	42
第4図	グリッド配置図及びトレンチ配置図(2)	11	第37図	VI類土器(14)	43
第5図	基本層序	12	第38図	VI類土器(15)	44
第6図	土層断面図(1)	13	第39図	VI類土器(16)	45
第7図	土層断面図(2)	14	第40図	VI類土器(17)	46
第8図	旧石器時代(XII層)遺物出土状況	15	第41図	VI類土器(18)	47
第9図	旧石器時代石器(1)	16	第42図	VI類土器(19)	48
第10図	旧石器時代石器(2)	17	第43図	VI類土器(20)	49
第11図	旧石器時代(XI層)遺物出土状況	17	第44図	VII類土器	50
第12図	縄文時代遺構配置図	18	第45図	底部(1)	51
第13図	縄文時代(V層上面)竪穴住居跡検出状況及び遺物出土状況	19	第46図	底部(2)	52
第14図	縄文時代竪穴住居跡内出土遺物(1)	20	第47図	底部(3)	53
第15図	縄文時代竪穴住居跡内出土遺物(2)	21	第48図	底部(4)	54
第16図	縄文時代土坑2, 3号検出状況	21	第49図	底部(5)	55
第17図	縄文時代土坑2, 3号内出土遺物	22	第50図	円盤状土製品	56
第18図	縄文時代土坑3号内出土遺物	23	第51図	VIII, IX, X, XI類土器	57
第19図	土器類別	24	第52図	縄文時代石器(1)	64
第20図	縄文時代遺物出土状況	25	第53図	縄文時代石器(2)	65
第21図	I, II類土器	26	第54図	縄文時代石器(3)	66
第22図	III, IV, V類土器	27	第55図	縄文時代石器(4)	67
第23図	V類土器	28	第56図	縄文時代石器(5)	68
第24図	VI類土器(1)	29	第57図	縄文時代石器(6)	69
第25図	VI類土器(2)	30	第58図	古墳時代遺構配置図及び遺物出土状況	70
第26図	VI類土器(3)	31	第59図	古墳時代竪穴住居跡1号検出状況	71
第27図	VI類土器(4)	32	第60図	古墳時代竪穴住居跡1号遺物出土状況	72
第28図	VI類土器(5)	33	第61図	古墳時代竪穴住居跡1号内出土遺物(1)	72
第29図	VI類土器(6)	34	第62図	古墳時代竪穴住居跡1号内出土遺物(2)	73
第30図	VI類土器(7)	35	第63図	古墳時代竪穴住居跡2号検出状況	74
第31図	VI類土器(8)	36	第64図	古墳時代竪穴住居跡2号遺物出土状況	75
第32図	VI類土器(9)	38			
第33図	VI類土器(10)	39			

第65図 古墳時代竪穴住居跡 2号内出土遺物(1)75	第70図 古墳時代竪穴住居跡 3号内出土遺物(2)79
第66図 古墳時代竪穴住居跡 2号内出土遺物(2)76	第71図 畝状遺構配置図80
第67図 古墳時代竪穴住居跡 3号検出状況77	第72図 畝状遺構検出状況81
第68図 古墳時代竪穴住居跡 3号遺物出土状況78	第73図 带状硬化面配置図82
第69図 古墳時代竪穴住居跡 3号内出土遺物(1)78	第74図 III層上面検出带状硬化面検出状況・断面83
	第75図 IVa層上面検出带状硬化面検出状況・断面84

表目次・図版目次

表目次

表1 周辺遺跡一覧表 8
表2 旧石器時代石器観察表16
表3 縄文時代遺構内石器観察表53
表4 縄文時代遺構内石器観察表55
表5 縄文時代土器観察表(1)56
表6 縄文時代土器観察表(2)58
表7 縄文時代土器観察表(3)59
表8 縄文時代土器観察表(4)60
表9 縄文時代土器観察表(5)61
表10 縄文時代土器観察表(6)62
表11 縄文時代土器観察表(7)63
表12 縄文時代石器観察表69
表13 古墳時代遺構内石器観察表79
表14 古墳時代遺構内石器観察表79
表15 古墳時代土器観察表79

図版目次

図版1 遺跡遠景93
図版2 発掘調査(1)94
図版3 発掘調査(2)95
図版4 発掘調査(3)96
図版5 発掘調査(4)97
図版6 発掘調査(5)98

図版7 発掘調査(6)99
図版8 発掘調査(7)100
図版9 旧石器時代石器, 縄文時代Ⅰ・Ⅱ類土器101
図版10 縄文時代竪穴住居跡出土土器, Ⅲ・Ⅳ・ Ⅴ類土器102
図版11 縄文時代Ⅴ・Ⅵ類土器103
図版12 縄文時代Ⅵ類土器(1)104
図版13 縄文時代Ⅵ類土器(2)105
図版14 縄文時代Ⅵ類土器(3)106
図版15 縄文時代Ⅵ類土器(4)107
図版16 縄文時代Ⅵ類土器(5)108
図版17 縄文時代Ⅵ類土器(6)109
図版18 縄文時代Ⅵ・Ⅶ類土器110
図版19 縄文時代土器底部, 組織痕土器, 円盤状 土製品111
図版20 縄文時代Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ類土器112
図版21 縄文時代石器(1)113
図版22 縄文時代石器・土坑3号出土石器114
図版23 古墳時代竪穴住居跡1号・2号内出土遺 物115
図版24 古墳時代竪穴住居跡3号内出土遺物, 古墳時代出土土器116

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路建設課（始良・伊佐地域振興局 建設部道路建設課・以下道路建設課）は、一般県道大川原小村線道路改築事業を計画し、事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）に照会した。

この計画に伴い文化財課は、事業地が周知の遺跡である前原和田遺跡の範囲内にあることを確認した。この結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて、道路建設課・文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の三者で協議を行い、埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため、事業着手前に試掘調査を実施することになった。

試掘調査は、文化財課及び埋文センターが担当することとし、平成24年1月26日に実施された。その結果、遺構・遺物の存在が確認された。

そこで、再度三者で協議を行い、前原和田遺跡について本調査を実施することとなった。調査は埋文センターが担当し、平成24年8月1日～平成24年10月26日（実働49日間）にかけて実施した。

第2節 事前調査

1 試掘調査

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 始良・伊佐地域振興局建設部土木建築課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県教育庁文化財課 課 長 前原 浩一
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課 課 長 補 佐 平嶺 浩 主任文化財主事兼 埋 蔵 文 化 財 係 長 前 迫 亮 一
調査担当	鹿児島県教育庁文化財課 文 化 財 主 事 川 口 雅 之 鹿児島県立埋蔵文化財センター 調査第一課第二調査係長 大久保浩二 文 化 財 主 事 有 馬 孝 一

第3節 本調査

本遺跡の本調査を、平成24年8月1日～平成24年10月26日の49日間にわたり実施した。

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 始良・伊佐地域振興局建設部道路建設課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 寺 田 仁 志
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次 長 兼 総 務 課 長 新 小 田 穰 次長兼南の隴文調査室長 井ノ上秀文 調 査 第 一 課 長 堂 込 秀 人 調査第一課第二調査係長 大久保浩二
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文 化 財 主 事 有 馬 孝 一 文 化 財 主 事 吉 元 輝 幸
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 主 幹 兼 総 務 係 長 大 園 祥 子

調査の過程(日誌抄)

発掘調査の過程を日誌抄をもってかえる。

平成24年度 本調査 (H24.8.1～H24.10.26)

・H24.8.1～H 24.8.3

オリエンテーション、グリッド杭打設
環境整備

E・F-4～11区 表土剥ぎ

C-E-21～27区 掘り下げ

寺田所長、大久保係長 現場視察(3日)

・H24.8.6～H 24.8.10

A・B-33・34区 グリッド杭打設

E・F-4～11区 表土剥ぎ

B-D-21～27区 III、IV層掘り下げ、遺物取り上げ

B-34区 III層掘り下げ

B-33区 III層上面で畝畝状遺構検出、精査、写真撮影

影、実測、完掘

B-26・27区 帯状硬化面検出、精査、写真撮影

A・B-31～34区、B・C-26区、B-33区、D-21区 III層上面

まで掘り下げ

C-23区 III層上面で土坑2検出、精査、写真撮影。

- 実測
C-24区 III層上面で土坑1検出、精査、写真撮影、
実測、レベル移動
- ・H24.8.16～H24.8.17
A・B-32～34区 III層掘り下げ
B・C-23区 IVa層上面精査
B・C-24～26区 III、IV層遺物取り上げ
C-23区 土坑2平面図実測
B-25～27区 帯状硬化面実掘、精査、写真撮影、実測
E・F-6～8区 トレンチ設定、掘り下げ
- ・H24.8.20～H24.8.24
E・F-3～10区 表土剥ぎ、III層上面精査
A・B-34区 IV層掘り下げ、遺物取り上げ
A・B-32・33区 IV層上面にてビット検出、実測
E・F-6～9区 III層上面にて帯状硬化面検出、精査、写真撮影、断面実測、実測位置記録(平板)
A・B-32・34区 IVa、IVb層掘り下げ
B-26・27区 IV層掘り下げ
- ・H24.8.27～H24.8.28
両日とも雨のため、作業員による作業中止
グリッド杭打設、レベル移動、養生
- ・H24.9.3～H24.9.7
A・B-32～34区、B-27区、B・C-25～27区 IVa層掘り下げ
B-34区 IVa層上面で土坑5,6検出、精査、写真撮影
E・F-6～9区 IVa層上面にて道跡検出。断面実測、完掘状況写真撮影、実測
B-32～34区 下層確認トレンチ設定、V層掘り下げ
B・C-25～27区 IVa層上面遺物出土状況写真撮影
B-28区 III層まで掘り下げ
- ・H24.9.10～H24.9.14
B-32～34区 先行トレンチVI～VIII層掘り下げ
B・C-25～27区 IVa層遺物取り上げ
B-28・29区 表土剥ぎ、IVa層まで掘り下げ、遺物取り上げ
B-28・29区 III層上面にて畝状遺構検出、実測、精査、写真撮影
B-34区 土坑5,6掘り下げ、実測、精査、写真撮影
- ・H24.9.18～H24.9.21
A・B-32～34区 IVa層掘り下げ
B-28・29区 V層上面精査
B-32～34区 下層確認トレンチVIIb層まで掘り下げ
- B-25～29区 IVa層掘り下げ、遺物取り上げ
A・B-32～34区 黒曜石ブロック出土、取り上げ
安全パトロール(21日)
- ・H24.9.24～H24.9.26
B・C-24～26区 下層確認トレンチ掘り下げ、VIIb層遺物出土状況写真撮影、VIII層まで掘り下げ
C-22・23区 住居跡1号、住居跡2号掘り下げ、遺物取り上げ、埋土断面写真撮影
A・B-33・34区 B-25・26区V層上面コンタ図作成
- ・H24.10.1～H24.10.5
A・B-31・32区 表土剥ぎ、III層まで掘り下げ
E・F-4～9区 トレンチ掘り下げ、土層断面写真撮影
C-22・23区 住居跡1号 ベルト外し、床面精査、炉跡掘り下げ、ビット半裁、炉内遺物取り上げ、完掘、完掘状況写真撮影、炉跡断面実測
C-22・23区 住居跡2号掘り下げ、遺物出土状況写真撮影、遺物取り上げ、実測、ベルト外し
B・C-25～27区 IX層以下掘り下げ、旧石器時代遺物出土、壁面清掃、土層断面写真撮影
- ・H24.10.9～H24.10.12
B・C-24～25区 X～XIII層掘り下げ、土層断面実測、写真撮影
A・B-30～31区 表土剥ぎ、V層まで掘り下げ
C-22・23区 住居跡1号 完掘状況写真撮影、実測
C-22・23区 住居跡2号 炉跡掘り下げ、実測、住居内遺物取り上げ、完掘状況写真撮影
A・B-31・32区 III層上面畝状遺構検出、写真撮影、実測、ボラ抜き、完掘状況写真撮影
A・B-29・30区 IVa層上面にて住居跡3号検出、写真撮影、掘り下げ、遺物取り上げ、遺物出土状況写真撮影
E・F-5～8区 下層確認トレンチ設定、表土剥ぎ、IX層まで掘り下げ
E・F-5～8区 IV層上面コンタ図作成
D-16区 重機にて下層確認トレンチ掘り下げ、土層断面写真撮影
- ・H24.10.16～H24.10.19
A・B-31～32区 IVa層まで掘り下げ、遺物出土状況写真撮影、遺物取り上げ
B・C-23・24区 IX層上面まで重機で掘り下げ
A・B-27・28区 表土剥ぎ、III層上面にて畝状遺構検出、検出状況写真撮影、ボラ抜き、実測、精査、完掘状況写真撮影
F-2～4区 下層確認トレンチ IX層まで掘り下げ、

土層断面実測、完掘状況写真撮影
 E-2～4区 下層確認トレンチ IX層まで掘り下げ、
 土層断面実測、完掘状況写真撮影
 A・B-31区 住居跡3号掘り下げ、精査、遺物取り上げ、
 遺物出土状況写真撮影、平面、断面実測、跡
 断面実測、跡完掘、完掘状況写真撮影
 B・C-23・24区 XIII層まで掘り下げ

・H24.10.22～H24.10.26

A・B-27-28区 VIb層掘り下げ、遺物出土状況写真
 撮影、遺物取り上げ
 B・C-23・24区 XIV層まで掘り下げ
 A・B-30・31区 VIb層まで掘り下げ、遺物出土状況
 写真撮影
 A・B-31区 住居跡3号 張り床除去、完掘状況写真撮
 影
 B・C-23・24区 旧石器時代遺物出土状況写真撮影
 B-28区 IVb層上面にて、住居跡4号検出、検出状況
 写真撮影、掘り下げ、遺物取り上げ、遺物出土状況
 写真撮影、断面・平面実測
 調査事務所片付け、リース物品点検、返却
 寺田所長、大久保係長終了挨拶(26日)

・H24.10.29

始良伊佐地域振興局に引き渡し

第4節 整理・報告書作成

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、平成25年4月15日～平成26年3月7日にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

出土遺物の水洗い、注記、遺構内遺物と包含層遺物の仕分け、遺物の実測・拓本、図面のトレース・レイアウトや原稿執筆等の編集作業を行った。整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおり。

作成体制(平成25年度)

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
 始良・伊佐地域振興局建設部道路建設課
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 井ノ上秀文
 調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 次長兼総務課長 新小田 穰
 調査課長兼
 南の縄文調査室長 堂込 秀人
 第二調査係長 大久保浩二

調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財主事 有馬 孝一

文化財主事 吉元 輝幸

事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

主幹兼総務係長 有馬 博文

報告書作成指導委員会 平成25年11月27日

堂込 課長ほか5名

報告書作成検討委員会 平成25年11月28日

井ノ上 所長ほか7名

※遺跡名称について

発掘調査の開始にあたっては、周知の遺跡分布図により「前原和田遺跡」と「和田遺跡」を対象に調査に入ったが、2つの遺跡は同じ台地上に位置する一連の遺跡であると判断され、県文化財課と霧島市教委が協議の上、「前原和田遺跡」に統一して遺跡範囲を拡大し遺跡登録することとなった。



第1図 グリッド配置及び周辺地形

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

前原和田遺跡(以下、本遺跡と略記)は、鹿児島県霧島市福山町佳例川比曾木野地区に存在する。霧島市は、鹿児島県本土のほぼ中央部に位置し、平成17年11月に旧国分市とその周辺の5町(隼人町・溝辺町・霧島町・牧園町・福山町)とが合併して誕生した。

そのうち本遺跡が存在するのは、旧福山町である。

その旧福山町は、霧島市の東端に位置し、北は霧島市国分(旧国分市)、南は曾於市輝北町・垂水市、東は曾於市財部町、末吉町、大隅町、西は鹿児島湾に隣接する。

旧福山町が始良カルデラの東北壁に位置するため、その地勢は、海拔300mから400mの急峻な断崖が海岸部に迫る下場地区と崖上に展開する丘陵性火山灰台地の上場地区の2つに大別できる。

下場地区は、始良カルデラの東岸壁にあたるため、急峻な崖が海に迫り、平地があまり見られない。

それに対し、上場地区は、入戸火砕流、いわゆるシラスによって広大な台地が形成され、旧国分市方面から曾於市方面にかけて緩やかな傾斜をなし、大平野が形成される。

この上場地区と下場地区の高低差は、気候に影響を与える。下場は寒暖の差が比較的小さい海洋性気候であるのに対し、上場は寒暖の差が大きい高原性の気候であり、冬場は氷点下を記録することもある。

それらの地形や気候などの自然条件は、これまで人々の生産基盤や経済活動等に大きな影響を与えてきた。

たとえば、下場地区では温暖な気候を利用し、急峻な斜面上の段々畑で、柑橘類の栽培が行われてきた。

一方、台地上にあたる上場地区では、高原性の気候を利用した野菜を中心とした農業と畜産業が盛んである。

そこで、本遺跡のある佳例川地区の地形に目を移してみると、同地区は北に黒石岳、東に白鹿岳、南に荒磯岳といった山々に囲まれた細長い台地上にある。

その台地上には、浸食によって形成された小規模な台地や丘陵が点在し、複雑な地形を形成している。台地や丘陵を取り囲む谷部分には小規模な川が流れている場所が多く見受けられる。

本遺跡をはじめ、周辺に存在する遺跡の多くは、そういった小規模な台地や丘陵上に存在している。

遺跡周辺には、国有林、私有林からなる山地が広がっており、ここでは、林業が行われている。それらの山々はかつて藩政時代、荒磯岳から比曾木野一帯にかけて原野が広がり、藩の牧場や狩猟地として利用されていた場所である。それが、藩政体制の終了後に、国有地や県有地になり、杉や檜が植林されたものである。

また、本遺跡の北方に前田川の起点となる分水嶺がある。そこから鹿児島湾、志布志湾、そして日向灘・太平洋へと枝分かれしながら流れている。

前田川は西へと流下し、校枝川と合流し鹿児島湾に注ぐ。また、前田川から東に向かって流れる横市川は大淀川と合流し日向灘・太平洋へと注いでいる。南東方向に流れる佳例川は菱田川となり、志布志湾へと注いでいる。このように、遺跡周辺は、前田川の起点付近から鹿児島湾斜面と志布志湾斜面、そして大淀川斜面とに分かれる分水嶺にあたる。

その周辺では、小規模な台地上で農業が行われ、水田は谷間に、畑は台地上に形成されている。

遺跡内には、明治6年に開校した比曾木野小学校跡がある。集落の中心に位置し、一時は児童数が180名を数える時期もあった。

しかしながら、集落の過疎化とともに、その数は減少していった。昭和47年に創立100周年を迎えるも、児童数の減少は止まらず、昭和51年には閉校となった。現在、その地は比曾木野野営センターとして使用されている。

第2節 歴史的環境

本遺跡の周辺は、東九州自動車道の建設に伴う永磯遺跡(1997, 1998:鹿児島県立埋蔵文化財センター、以下「県埋文セ」と略記)、城ヶ尾遺跡(1998, 1999県埋文セ)、供養之元遺跡(1998, 1999県埋文セ)前原和田遺跡(1998, 2000県埋文セ)の発掘調査及び、一般県道大川原小村線改築事業に伴う前原和田遺跡の発掘調査(2003福山町教育委員会)等により、旧石器時代から縄文時代にかけての考古学的にも貴重な資料が多く出土した。

それらの成果から、当地域での人々の生活の様子が次第に明らかになりつつある。

(1) 旧石器時代

城ヶ尾遺跡の発掘調査(1998, 1999県埋文セ)では、約12,800年前の桜島起源の薩摩火山灰層直下のX層(いわゆるチョコ層)からXV層で、約16,000点の石器群と土坑1基、そして礫群31基が検出された。遺物は、ナイフ形石器、三稜尖頭器、錐状石器、スクレイパー、細石刀、磨石、石皿などである。それらがブロック状にまとまって出土した。

東九州道関連の前原和田遺跡の発掘調査(1998, 2000県埋文セ)では、礫群遺構と795点の石器がXI層(黄褐色軟質ローム層)からXVII層(二次シラス堆積層)の間から出土している。遺物はナイフ形石器、台形石器、ハンマーストーン、三稜尖頭器などである。それらが6つの

ブロックを形成して出土した。

また、県道関連の前原和田遺跡の発掘調査(2003福山町教育委員会)では、礫群遺構1基と細石刃、細石核、スクレイパー、ナイフ形石器等が出土した。

また、本遺跡から南東方向に離れた場所に位置する永磯遺跡(1997, 1998県埋文セ)の発掘調査では、礫群遺構5基、土坑3基と、三稜尖頭器、台形石器、ナイフ形石器などの石器がXV層を中心に、14点出土した。

いずれの遺跡も本遺跡の近くにあることから、本遺跡周辺では旧石器時代には、すでに人々の生活が営まれていたことが窺える。

(2) 縄文時代

東九州道関連の前原和田遺跡の発掘調査(1998, 2000県埋文セ)では、III層の黒褐色土からX層の黒褐色粘質土(いわゆるチョコ層)において草創期から晩期に至る遺構や遺物が出土した。遺構は、落とし穴状遺構3基、集石遺構2基が検出された。遺物は吉田式、塞ノ神式、春日式、撫糸文、押型文の土器と、石鏃、石斧、磨石などの石器が出土した。

県道関連の前原和田遺跡の発掘調査(2003福山町教育委員会)では、III層の黒色土からIX層の薩摩火灰層において、手向山式土器、大平式土器、指宿式土器、西平式土器、入佐式土器などの土器と楔形石器、石鏃、磨石、打製石斧、石皿などの石器、合わせて350点が出土した。

供養之元遺跡の調査(1998, 1999県埋文セ)では、集石遺構20基、落とし穴状遺構5基の遺構と、手向山式、平枋式、塞ノ神式などの土器と、石鏃、石匙、異形石器、スクレイパーなどの石器が出土した。

永磯遺跡の調査(1997, 1998県埋文セ)では、草創期から晩期にかけての遺物や遺構が出土した。遺構は、集石遺構18基(早期)、落とし穴状遺構40基(早期26基、前・中期12基、後・晩期2基)が、遺物は押型文、下刺峯式、塞ノ神式などの土器と、石鏃、細石刃、石皿、磨石、スクレイパーなどの石器が出土した。

城ヶ尾遺跡の発掘調査(1998, 1999県埋文セ)では、集石遺構28基、土坑19基、土器埋設遺構4基の遺構と、塞ノ神式、平枋式、手向山式、下刺峯式、押型文などの早期の土器、及び春日式、深浦式、入佐式などの後期・晩期の様々な型式の土器が出土した。特に塞ノ神式土器は、環状に七つのブロックを形成して出土したことが特筆される。

以上の調査結果から本遺跡周辺では、旧石器時代に引き続き、縄文時代にも草創期から晩期に至るまで連続と人々の生活が営まれていたことがわかる。

(3) 弥生・古墳時代から中世

弥生・古墳時代以降になると、調査が行われた遺跡に

おいて検出された遺物や遺構の数は極端に少なくなる。

城ヶ尾遺跡の発掘調査(1998, 1999県埋文セ)では、堅穴住居跡4基と成川式土器片が出土している。

同じく、前原和田遺跡の発掘調査(1998, 2000県埋文セ)では、文明ボラ(147年頃の桜島起源の軽石)にパックされた鳥の足跡が検出された。

また、同遺跡では、文明ボラの上位と下位から古道跡も数条検出されている。

供養之元遺跡(1998, 1999県埋文セ)では、ほぼ南北に走る溝状遺構が3条検出された。いずれも、浅い掘り込みがあり、その床面には硬化面も検出されたことから道跡と考えられる。またその周辺に成川式土器が出土したことから、この道跡は古墳時代のものと推測される。

周辺部分まで広げてみると、福沢地区の中尾立遺跡の調査(1992福山町教育委員会)で平安時代の掘立柱建物跡が5棟と、土師器、須恵器、内黒土師器、墨書土器等が出土している。

(4) 中世以降

本遺跡の近くには、かつて小村神社が鎮座していたが、寛永年間に移転したと思われる。

周辺の丘陵には、鳥津義久によって薩摩藩でも最大規模の福山野馬牧が置かれた。しかし、安永8年(1779)の桜島大噴火の降灰による影響で、一時壊滅状態になったとされている。

(参考文献)

- 福山町1979『福山町郷土誌』福山町郷土誌編集委員会。
- 福山町教育委員会1994『中尾立遺跡』福山町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)。
- 平凡社1998『鹿児島県の地名』日本歴史地名体系第47巻。
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2002『九日田遺跡・供養之元遺跡・前原和田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(36)。
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『高篠坂遺跡・永磯遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(61)。
- 福山町教育委員会2003『供養之元遺跡』福山町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)。
- 福山町教育委員会2003『前原和田遺跡』福山町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)。
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2004『九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(71)。



第2図 周辺遺跡位置図

表1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	池ノ段	鹿児島県霧島市福山町 佳例川高松ヶ尾・池ノ段	山腹緩 斜面	弥生・古墳	成川式	
2	イラク谷	鹿児島県霧島市福山町 佳例川イラク谷	台地	縄文・古墳	土器・土師器	
3	寺屋敷	鹿児島県霧島市福山町 佳例川寺屋敷	台地	縄文・古墳	土器・土師器	
4	上村	鹿児島県霧島市福山町 佳例川上村	台地	縄文	黒曜石・縄文(前)押型文・磨 石・石皿・塞ノ神式	
5	小坂本A	鹿児島県霧島市福山町 佳例川小坂本A	丘陵	縄文・弥生・古墳	縄文土器・土師器・成川式	
6	新村	鹿児島県霧島市福山町 佳例川新村	台地	縄文(中)	岩崎式	
7	前原和田 (本報告書)	鹿児島県霧島市福山町 佳例川前原	台地	旧石器・縄文・弥生・古墳	縄文土器・土師器・成川式	県埋せ(36)2002 福山町教委(6)2005
8	城ヶ尾	鹿児島県霧島市福山町 佳例川城ヶ尾A	丘陵	旧石器・縄文・古墳	ナイフ形石器・塞ノ神式・成 川式	県埋せ(60)2003
9	供養之元	鹿児島県霧島市福山町 佳例川供養之元A	台地	縄文(早)	縄文土器	県埋せ(36)2002
10	長谷	鹿児島県霧島市福山町 佳例川長谷	台地	弥生	弥生土器・石斧	
11	野谷下	鹿児島県霧島市福山町 佳例川野谷下	丘陵	古墳	土師器・成川式	
12	永磯	鹿児島県霧島市福山町 佳例川永磯	台地	旧石器・縄文(草・早・中・ 後・晩)、奈良、平安、中世	ナイフ形石器・縄文土器・石 鏃・石斧	県埋せ(61)2003
13	花平陣跡	鹿児島県曾於市財部町 南俣	丘陵	中世		
14	辰伴	鹿児島県霧島市福山町 佳例川辰伴	台地	弥生	弥生土器	
15	栗ノ脇	鹿児島県霧島市福山町 佳例川脇ノ栗	台地	縄文	縄文土器	
16	芹牟田	鹿児島県霧島市福山町 佳例川芹牟田	台地	縄文	縄文土器	

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 調査の方法

今回発掘調査を行った前原和田遺跡は、県中央部の霧島市福山町荊川に所在する。牧之原のシラス台地から山間部を抜け、大川原をつなぐ県道上に所在し、地形は山間部に散在する小台地である。

調査区のグリッドは、遺跡全体をカバーできるよう工事用杭T.3（世界測地系X=-142339.519, Y=-10817.155）と杭T-3（X=-142388.377, Y=-10837.331）を結んだ線及びその延長線を主軸とし、T.3で主軸と直交する線を中心に設定した。

具体的には北側から南側に向かって1, 2, 3…、東から西へA, B…と調査区割りを設定した。

発掘調査は平成24年8月1日から平成24年10月26日まで、作業員実働49日間で実施した。調査対象面積は約3,800㎡である。

調査の方法は、重機（バックホウ）によって表土を除去した後、遺物包含層は山鉾やジョレン、ねじり鎌などを使用して人力で掘り下げを行った。包含層出土の遺物は出土状況の写真撮影を行ったのち、残存状況良好なものについては取り上げ番号を付し、トータルステーションにて座標及び標高を記録し、その他については、層位ごとのグリッド一括で取り上げを行った。また、層の堆積状況を確認しながらⅢ層上面、Ⅳa層上面、Ⅳb層上面、Ⅴ層上面において、遺構の有無確認の精査を実施し、遺構認定を行った。

各遺構は検出状況の写真撮影、図面作成作業を行った後、埋土観察用のバルトを残し掘り下げを行った。遺物出土状況の記録、遺物取り上げを行い、埋土状況を写真撮影、記録した後、完掘し、図面を完成し完掘状況の写真撮影を行った。遺構内遺物については床着のものは実測図面中に記入し、床面から浮き上がったものは、トータルステーションにて座標及び標高を記録し取り上げを行った。

アカホヤ下位の遺構、遺物包含層の確認については、調査区内に8か所、調査区外に1か所の下層確認トレンチを設定して行った。

1 Tから6 Tでは遺物、遺構ともに確認できなかったため、全面調査はⅢ層からⅣ層上面にかけて検出した中世以降と思われる帯状硬化面の調査のみを行った。

7 Tからは縄文早期、旧石器の遺物が出たため、トレンチを拡張して遺物の広がりや遺構の有無を確認したが、周辺への広がりや確認されなかった。8 Tからは遺構、遺物ともに検出されなかった。

C～E-15～21区の旧比曽木野小学校側（東側）調査区については事務手続きの遅れから調査期間中に構造

物の撤去が終わらないことが判明したため、急遽、隣接地掘削の承認を取った上で試掘トレンチ（9 T）を設定し、重機掘削と人力掘削を併用し、下層確認を行った。遺物、遺構ともに検出されず、当該調査予定地の調査は必要ないと判断した。

既設道路下については、隣接する調査区の遺物出土レベル、遺構の有無から、遺跡はすでに破壊されているか、もしくは、工事による掘削の及ばないレベルでの検出の可能性に留まると判断し調査は実施しなかった。

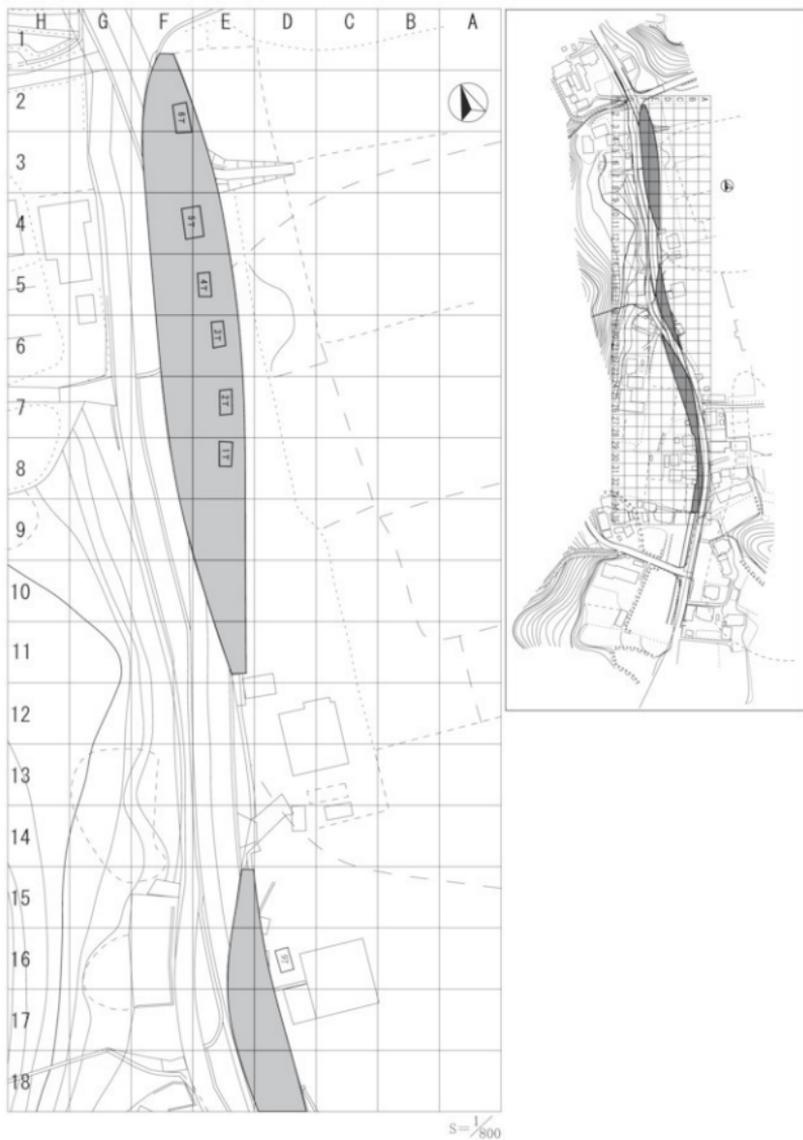
2 遺構の認定と検出方法

検出された主な遺構は、Ⅲ層、Ⅳa層、Ⅳb層上面にかけて見られた。

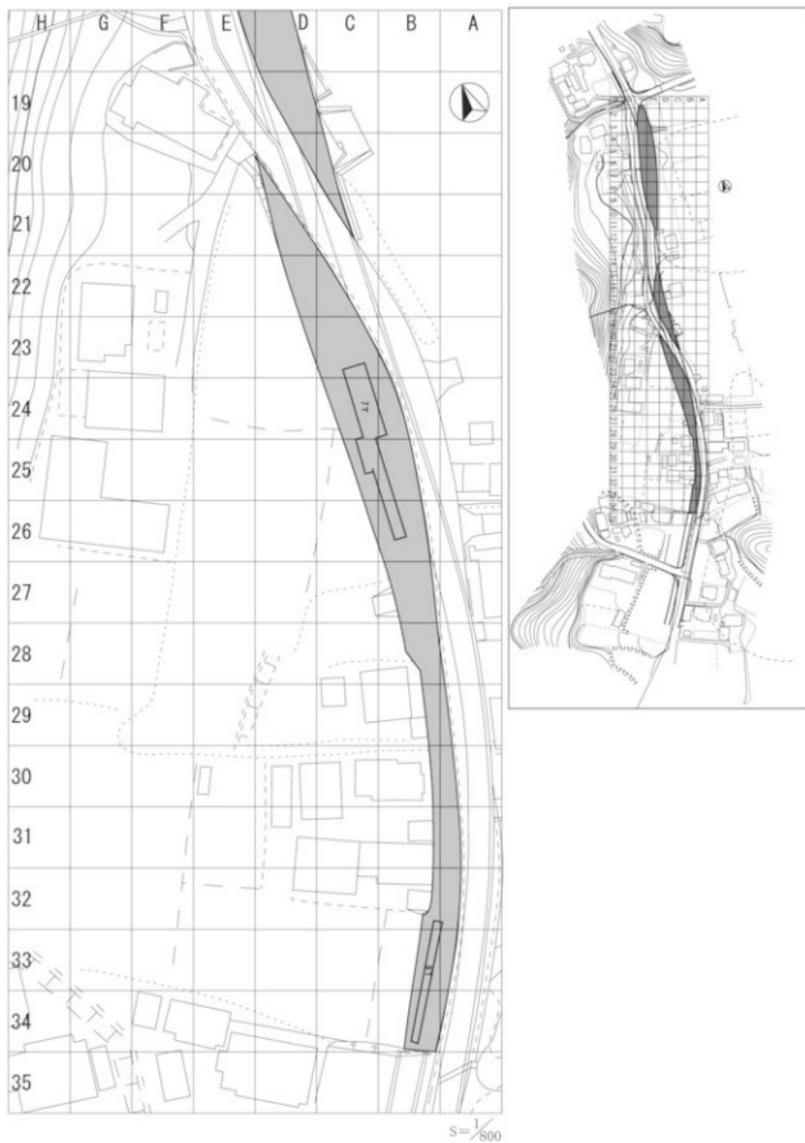
Ⅲ層上面では文明ボラを埋土とする幅40cm前後、長さ2m前後の筋状に連続する掘り込みを畝状遺構と認定した。

Ⅳa層上面では文明ボラが大量に混ざる黒褐色土を埋土とし、下位に硬化面を有する帯状硬化面を中世以降の道路と判断した。また黄色バミス混じり黒褐色土を埋土とする4～5m四方の掘り込みを古墳時代の竅穴住居跡と認定し、検出された順番でSH1～3号の名称を付した。

Ⅴ層上面では黄白色バミス（御池火山灰）が多く混じる暗茶褐色土を埋土とする、3m前後の円形を呈する掘り込みを竅穴住居跡、1m前後の円形を呈する掘り込みを土坑と認定した。



第3図 グリッド配置図及びトレンチ配置図(1)



第4図 グリッド配置図及びトレンチ配置図(2)

層序

前原和田遺跡の基本層序は次の通りである。

I	I 層	暗黒褐色土層 現耕作土
II	II 層	黄白色軽石層（文明ボラ 1471年の桜島起源の噴出物）
III	III 層	黒色土層
IVa	IVa 層	黄褐色土層
IVb	IVb 層	黄褐色細粒軽石混土層
Va	Va 層	暗褐色土層（アカホヤ腐 食土）
Vb	Vb 層	橙色火山灰層（アカホヤ火山灰 層）約7,300年前の鬼界カルデ ラ噴出物
VIa	VIa 層	軽石混淡茶褐色土
VIb	VIb 層	黄褐色軽石層 桜島起源の噴出物 P-11
VII	VII 層	明茶褐色土層
VIII	VIII 層	暗黒褐色土層
IX	IX 層	黄白色火山灰層 薩摩火山灰層 約12,800年前の 桜島噴出物 P-14
X	X 層	黒褐色土層
XI	XI 層	黄褐色軟質ローム層
XII	XII 層	軽石混暗茶褐色軟質土
XIII	XIII 層	暗褐色硬質土
XIV	XIV 層	暗褐色硬質土 赤色バミス点在 P-15
XV	XV 層	暗褐色軟質土
XVI	XVI 層	暗褐色硬質土 赤色バミス点在 P-17
XVII	XVII 層	濁黄白色砂質土 二次シラス
XVIII	XVIII 層	シラス 入戸火砕流堆積物 約29,000年前の始良カルデラ噴 出物

第5図 基本層序

基本層序はB・C-25・26区に設定したトレンチを基準土層とした。一部、攪乱を受けている箇所や、横転などにより不安定な堆積が見られる箇所もあったが、全体的に良好な堆積状況であった。

表土を取り除くと、II層に文明ボラと呼ばれる1471年の桜島の噴出物である軽石層がある。その下のIII層からは、中世のものと考えられる軟状遺構と道跡が、II層の文明ボラにバックされた状態で検出された。また、古墳時代の住居跡の検出面でもある。

IV層は縄文時代中期から晩期の遺物包含層である。そのうち、IVb層は約4,600年前の御池の噴火に伴う軽石を含んだ火山灰層であり、本遺跡で最も多くの遺物が出土した層である。

V層はアカホヤ火山灰層と呼ばれる橙色の層で、約7,300年前の鬼界カルデラ起源の火山灰層である。

VI層は黄褐色の軽石を含む層で、P-11と呼ばれる約8,000年前の桜島の噴出物である。なお、本遺跡においてはVIb層の堆積が不安定な場所もあった。

IX層は薩摩火山灰層と呼ばれる約12,800年前の桜島起源の黄白色の火山灰層である。本遺跡においては、ブロック状に堆積していた。

XI層は旧石器時代の細石器文化期相当の層であり、通称チョコ層と呼ばれる粘質土である。

XII層は旧石器時代のナイフ形石器文化期相当の層である。本遺跡においては、XI層、XII層のいずれも遺物・遺構は検出されなかった。

XIII層は、ナイフ型石器文化期の遺物包含層である。本遺跡で、ナイフ形石器、石核、フレークが出土した層で、今回の調査中に旧石器時代の遺物が出土したのはこの層のみである。なお、XIII層は前原和田遺跡の発掘調査(1998, 2000鹿兒島県立埋蔵文化財センター、以下「果埋セ」と略記)で、4基の縄群とナイフ形石器や三稜尖頭器等153点の石器が出土した層である。

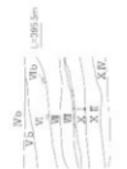
XIV層は、P-15と思われる桜島起源の赤色バミスが点在する層であり、本遺跡の近隣に位置する城ヶ尾遺跡の調査(1998, 1999果埋セ)において3基の縄群、前原和田遺跡の発掘調査(1998, 2000果埋セ)ではナイフ形石器や台形石器などの石器25点が出土した層である。

XV層は、暗褐色軟質土で前原和田遺跡の発掘調査(1998, 2000果埋セ)で台形石器、蔽石など80点が出土した層である。

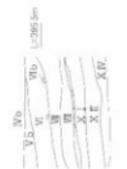
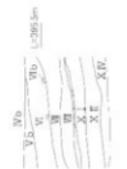
XVI層は暗褐色硬質土で、P-17と考えられる赤色バミスを含む層である。前原和田遺跡の発掘調査(1998, 2000果埋セ)では18基の炭化物を伴う縄群が検出された層である。

以下、XVII層は約29,000年前の始良カルデラ噴出物である入戸火砕流堆積物、いわゆるシラスの二次堆積層で、XVIII層はシラスである。

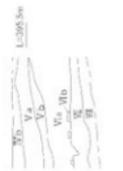
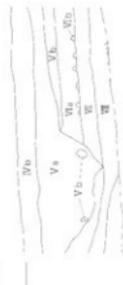
1T



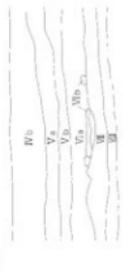
3T



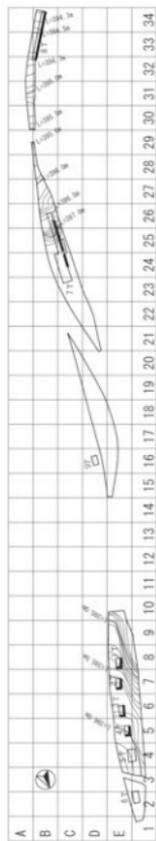
2T



4T

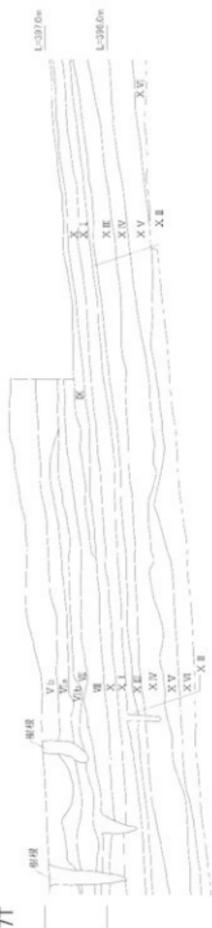


0 (1 : 80) 3m

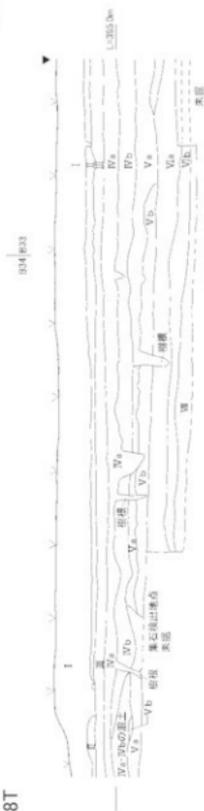


第6图 土层断面图(1)

7T



8T



0 (1:80) 3m

第7図 土層断面図(2)

第3節 調査の成果

1 旧石器時代の調査

(1) 調査の概要

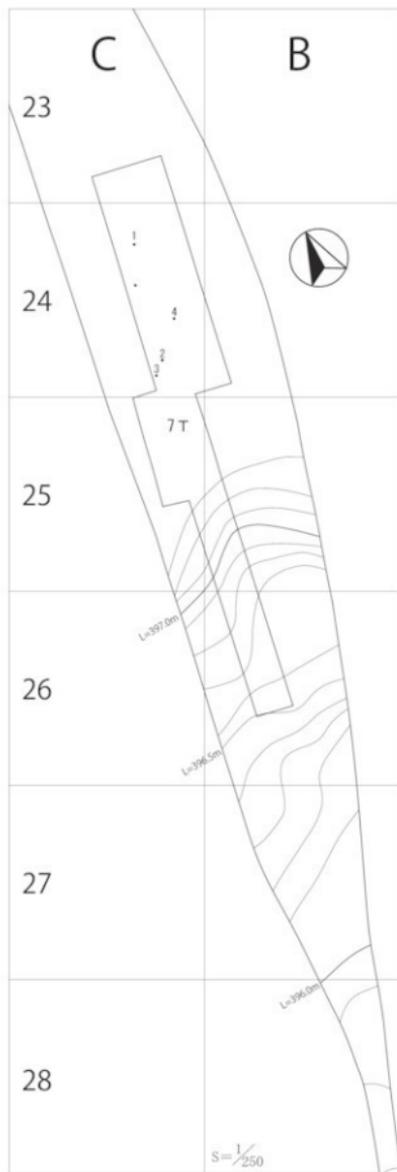
旧石器時代の調査は、まず遺構、遺物が存在するか確認を行う、下層確認トレンチ調査から始めた。トレンチ調査の結果、C-24区から数点の遺物が出土したため周辺部の拡張掘り下げとロングトレンチを設定しての範囲確認を行った。ところが、遺物の出土範囲に広がりはみられず、遺構も確認されなかったため、全面調査の必要性はないと判断した。遺物出土総点数は15点で、内9点を図化した。

(2) 遺物

石器

1～4はXII層出土の遺物である。1は、安山岩の縦長剥片である。2は、凝灰岩の円礫素材のハンマーストーンである。3は、黒色を基調とする半透明の黒曜石で、不純物を多く含む。ナイフ形石器の可能性がある。4は、石核である。黒色を基調とする半透明の黒曜石で、不純物を多く含む。縦長の剥片を剥出している。小型ナイフ形石器の素材を取った石核の可能性がある。

5～9はXI層出土の遺物である。5の細石刃は黒色を基調とした透明度の高い不純物をあまりふくまない黒曜石で、上部が折断されている。6の細石核は黒色を基調とする半透明で不純物が多く、円礫を素材としている。打面転移を繰り返しながら、細石刃を剥出している。作業面が打面を含めて3面観察される。7は、ナイフ形石器の基部の可能性が高いもので、素材は黒色を基調とする半透明で不純物の多い黒曜石で、剥片の片側にブランディングがなされている。8は、安山岩の柳葉状の縦長剥片を使ったナイフ形石器で、打面側の腹面からブランディングが入り、これを基部加工ととらえ、バルブが残っているがナイフ形石器とした。9は、黒曜石の縦長剥片である。黒曜石は、不純物を含まない不透明のもので、風化面は光沢のない暗灰色を呈す。



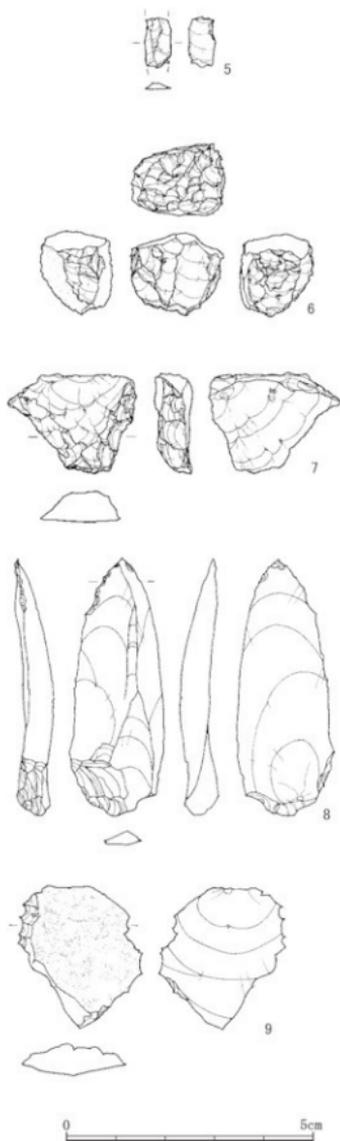
第8図 旧石器時代(XII層)遺物出土状況



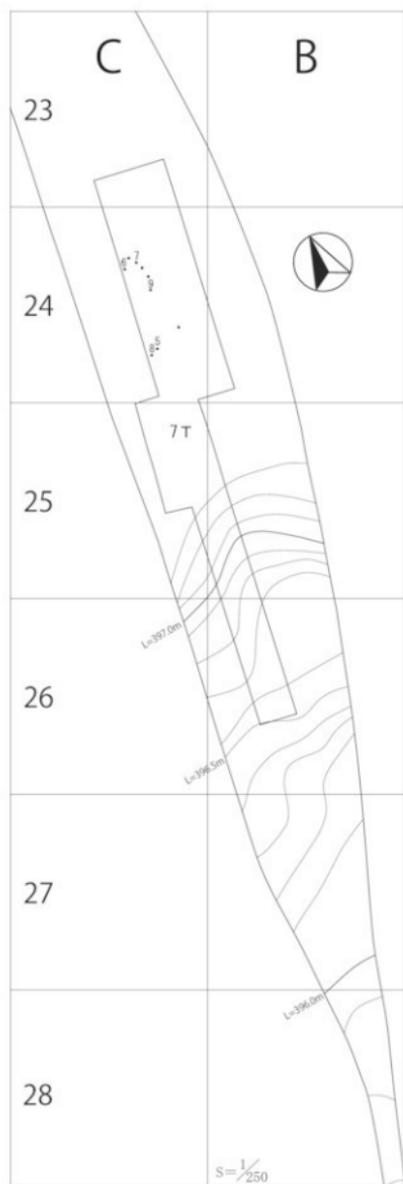
第9図 旧石器時代石器(1)

表2 旧石器時代石器観察表

標図 番号	掲載 番号	取上 番号	グリッド	層位	器種	石材	計測値				備考
							長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	
9	1	2632	C-24	XII	縦長削片	安山岩	34.0	19.5	6.5	3.65	-
	2	2617	C-24	XII	ハンマー	輝灰岩	66.5	61.0	41.5	200.00	-
	3	2616	C-24	XII	ナイフ形石器	黒曜石	33.0	28.5	13.0	10.70	-
	4	2621	C-24	XII	石核	黒曜石	47.0	47.5	17.0	28.06	-
10	5	2619	C-24	XI	マイクロブレード	黒曜石	10.5	5.5	1.5	0.09	-
	6	2629	C-24	XI	マイクロコア	黒曜石	17.5	19.0	14.8	5.19	-
	7	2631	C-24	XI	ナイフ形石器	黒曜石	20.5	26.5	7.5	3.94	-
	8	2618	C-24	XI	ナイフ形石器	安山岩	53.0	18.0	6.0	5.85	-
	9	2622	C-24	XI	縦長削片	黒曜石	27.5	20.5	5.0	3.89	-



第10図 旧石器時代石器(2)



第11図 旧石器時代(XI層)遺物出土状況

2 縄文時代の調査

(1) 調査の概要

縄文時代の調査は、Ⅲ層掘り下げ時点から、縄文時代晩期の遺物の出土がみられ、順次下層の掘り下げ、遺構精査などを繰り返して、Va層上面まで行った。

包含層の掘削は人力で行い、出土した遺物のうち小破片は、同一層、各グリッド毎の一括で取り上げを行った。大型の破片等については各遺物の種類、出土層を台帳に記録し、トータルステーションを用いて座標、レベルを記録した。

遺構は主軸方向に埋土観察用のベルトを設定し掘り下げ、もしくは半掘し、遺物出土状況、埋土断面の図を作成、写真撮影を行った上で完掘した。

遺構はVa層上面においてB-28区で竪穴住居跡が1基、B-34区で土坑3基を検出した。遺物は、Ⅲ層下位からⅣa層を中心にⅣb層上位まで出土し、B・C-25区～A・B-30区を分布の中心とする。E・F-1～10区では縄文時代に該当する遺構・遺物は確認されなかった。遺物総数は約10,000点で、内399点を掲載した。なお試掘調査ではV層より下位には遺物出土はみられなかったが、下層確認トレンチの調査によりC-25区、Ⅶ層で縄文時代早期の同一個体と思われる遺物が数点出土した。そのため周辺拡張掘り下げを行ったが、それ以上の遺物出土は確認できず、全面調査の必要はないと判断した。しかしながら、今回調査地点の西側には良好な平坦地が広がっており早期の遺跡が存在することも十分考えられる。

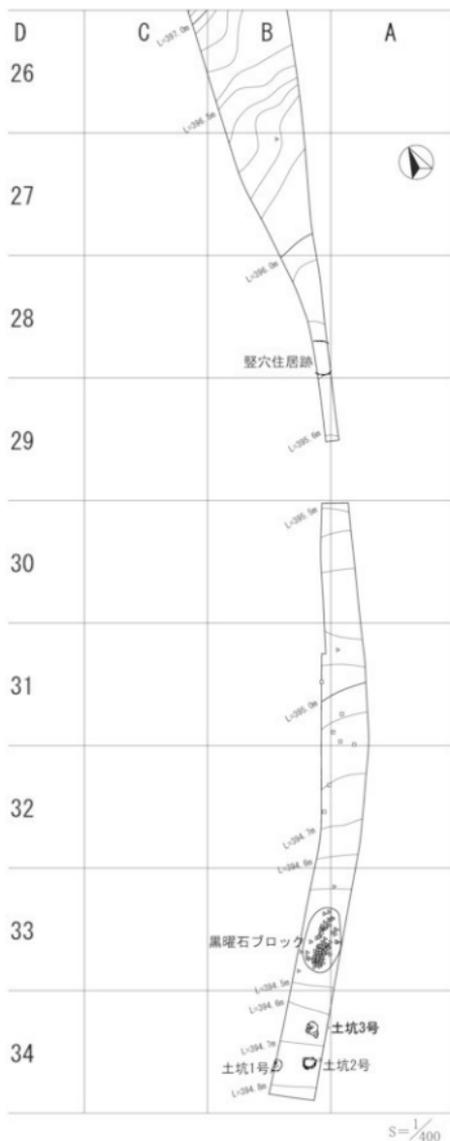
(2) 遺構

竪穴住居跡 (第13図)

竪穴住居跡はB-8区、V層上面で検出された1基のみであった。Ⅳb層掘り下げ時点から遺物が集中することから遺構の可能性を考えながら精査を試みたがⅣb層中で遺構の輪郭線を確認することはできなかった。V層の上面で黄白色パミス（御池火山灰）が大量に混入する暗茶褐色土の平面形態が円形を呈すると思われる掘り込みを確認できた。東側を県道、西側を調査区域で調査できなかったが直径2.8m前後の円形と考えられる。検出面からの深さは10cm程度である。遺構内にビットなどの付帯施設は確認できなかった。遺物は69点出土し、内21点を図化した。

竪穴住居内出土遺物 (第14, 15図)

10は二又状工具による平行する連続刺突文が施され、その間に指頭によると思われる凹線文を施す。胎土には滑石を混入する土器片である。11は口縁肥厚部の破片と思われる。肥厚部下端付近に横位の貝殻腹縁刺突文が施される。肥厚部下位には条痕が残る。12は口縁部で直線的な立ち上がりの器形である。口縁下位に低い突帯を巡らし、肥厚口縁風とする。突帯下端部に指頭状の凹点文



第12図 縄文時代遺構配置図

を施す。13は12と異なり口縁部を全体的に肥厚させ、肥厚部下端に指頭状の凹点文を施す。口唇部に粘土を貼り付け、3頂部をもつ突起を設ける。14は口縁部片で口唇直下から縦位に平行する波状文が施される。15は口唇部に押圧により刻みを施す、器面には回線による曲線文が施される。16は口唇部が平坦で、口唇直下にほぼ横位に細形の回線文が施される。17は胴部片で回線文と凹点文を組み合わせる。18は口唇部が平坦で、口縁に沿い1条の太形沈線が巡り、その下に斜位の太形沈線が施される。器面はナゲられるが貝殻条痕がわずかに残る。19は口唇部が平坦で、口縁に沿って2条の太形沈線が施され、その下は斜位と思われる沈線が施される。20～22は胴部片で20は横位の太形沈線文が施される。21は斜位と曲線の太形沈線が組み合わさり施される。22はやや外反し、内外面ともに粗いナゲ調整が施される。23、24は口縁部で、口唇部を平坦にし、胴部外面には貝殻条痕を残す。内面は粗いナゲ調整が行われる。24は口唇部に棒状工具による刻みを施し、口縁部に縦位の太形沈線が施される。25は鉢形土器で、胴部がわずかに張る。口唇部を平坦にし、口縁を肥厚させる。さらに口唇部には指押さえによる波状のアクセントを2か所に施している。口縁肥厚部には貝殻縁の押し引き文が施される。胴部内外面はナゲ調

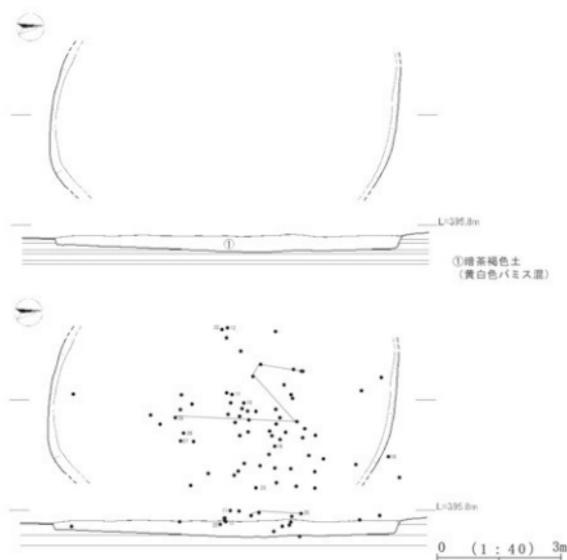
整を施すが、貝殻条痕が明瞭に残る。26～30は底部片で26は底面に組織痕が残る。30は底部が外に踏ん張るように張り出す。底径に比して、胴部器壁が薄い。

土坑

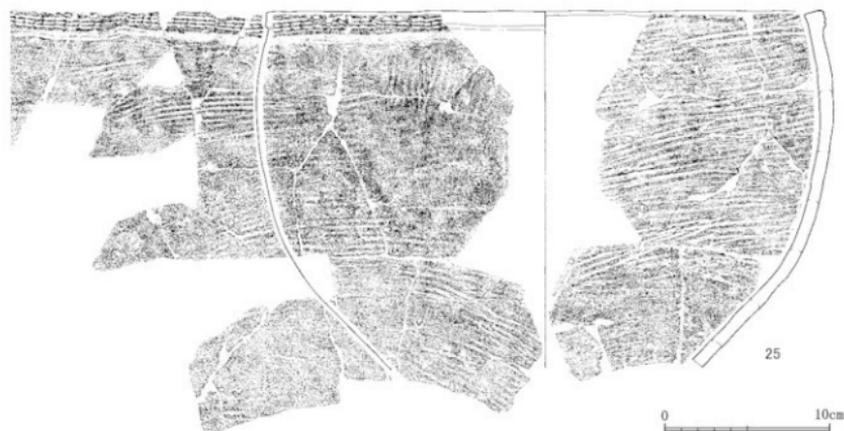
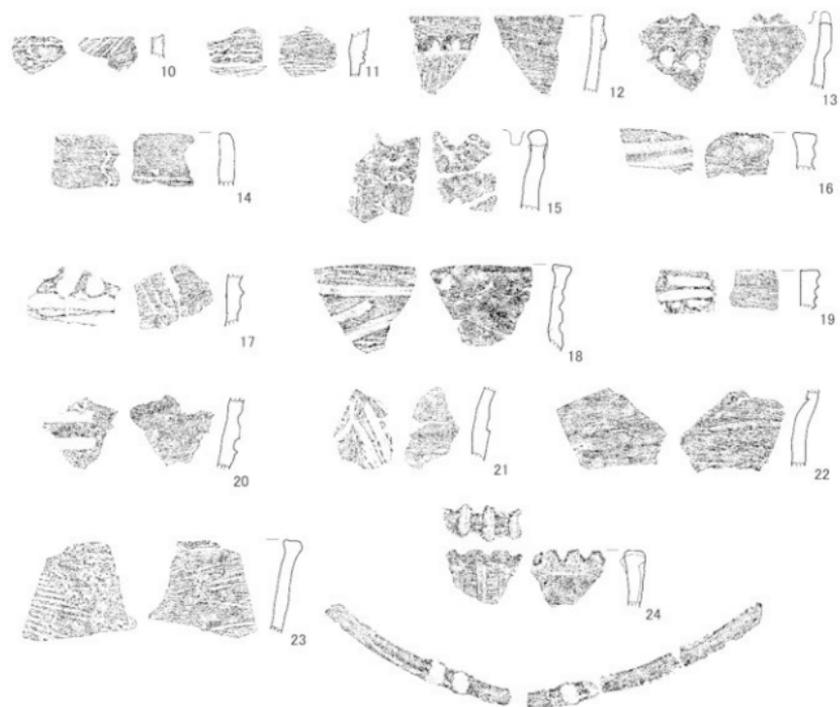
土坑はB-34区、Va層上面で3基検出された平面形態はいずれも円形を呈する。

土坑1号（第16図）

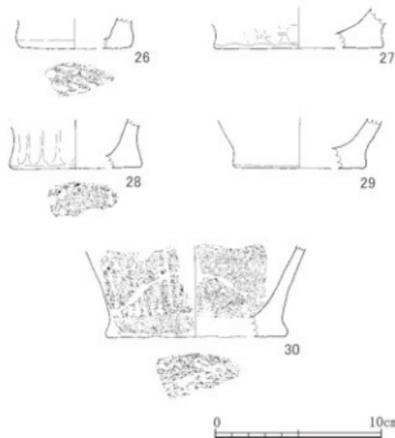
下層確認トレンチ部分で検出された、Va層上面で平面形態が不定形であったため樹痕と判断し掘り下げを進め、VI層上面相当のレベルで礫が検出され、平面形態が円形となったため、土坑と判断した。平面形態は直径90cm前後の略円形を呈する。認定時点での深さは20cm程度であるが、V層上面からの掘り込みと捉えたと深さ40cmとなる。床面は平坦であるが、壁面の立ち上がりはVb層からVI層にかけてはほぼ直に立ち上がるが、Va層から上でなだらかに傾斜し、遺構断面が崩壊していると思われる。遺構内から礫が10点出土しているが、いずれも安山岩で床面から20cm程度浮いた状態で出土していること、加工痕や使用痕跡がみられないことから土坑廃棄後、しばらく後に流れ込んだ自然礫と考えられる。



第13図 縄文時代(V層上面)竅穴住居跡検出状況



第14図 縄文時代竪穴住居跡内出土遺物(1)



第15図 縄文時代竪穴住居跡内出土遺物(2)

土坑2号 (第16図)

Va層上面で検出された。平面形態は長軸110cm、短軸90cmの略円形を呈し、検出面からの深さは65cmである。床面は平坦で、壁面立ち上がりはほぼ直である。遺構内から土器口縁部片が2点出土した。

土坑2号内出土遺物 (第17図)

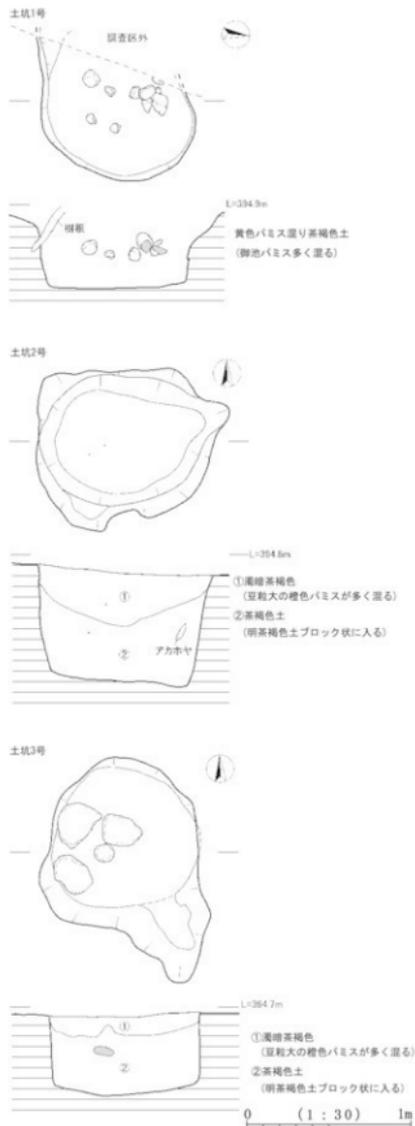
31は口唇部に粘土を盛ったうえで口唇部に棒状工具による刻みを施す。口縁部外面には縦位、楕円もしくは矩形の太形沈線が施される。32は山形飾り突起部である。突起頂部から胴部に向かい山形の沈線文が連続して施される。

土坑3号 (第16図)

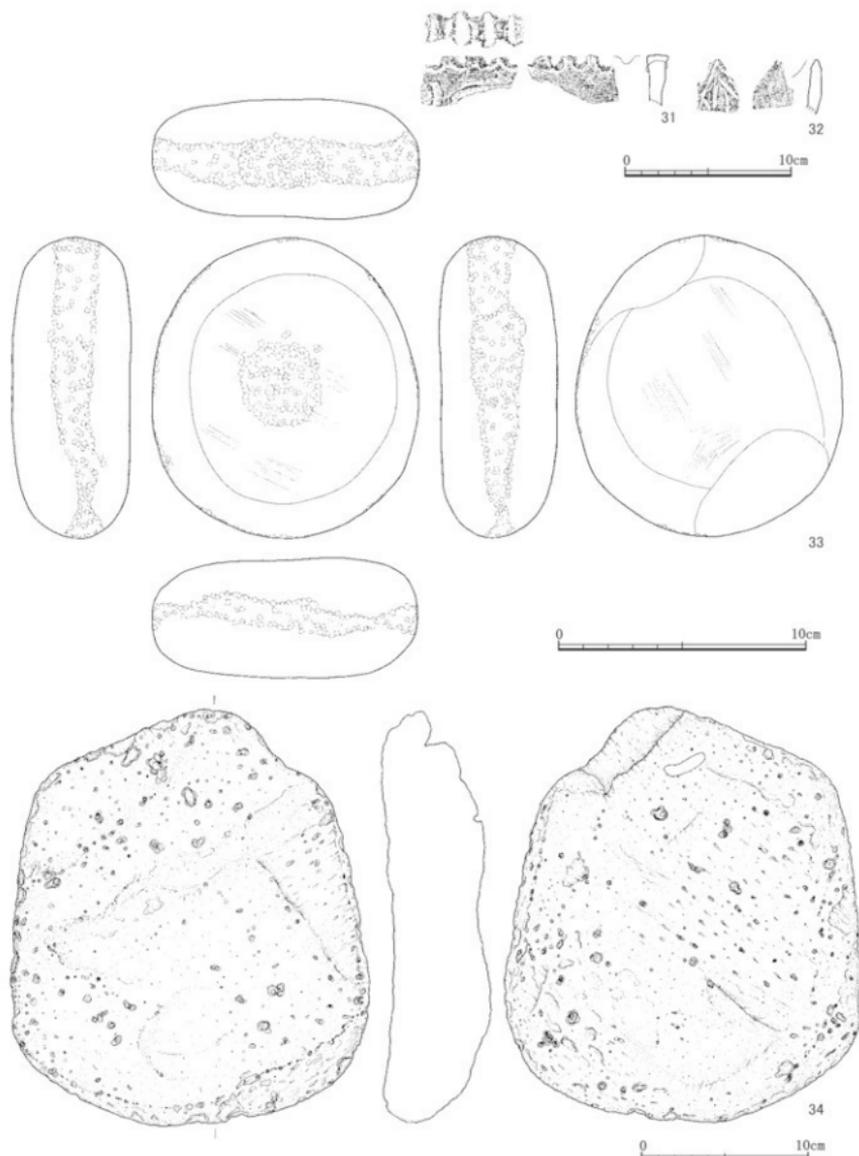
Va層上面で検出された。一部、樹根により崩れているが、平面形態は直径80cm~100cmの円形を呈し、検出面からの深さは50cmである。床面は平坦で、壁面はほぼ直に立ち上がる。遺構内から磨石と石皿片、軽石製品、自然礫の4点が出土した。軽石製品がほぼ床着の状態。その他の遺物は埋土中に浮いた状態であった。自然礫を除く3点を図化した

土坑3号内出土遺物 (第17, 18図)

33は砂岩製の磨・敲石で表裏両面とも明瞭な磨り面を有する。側縁及び表面中央部に敲打痕が確認できる34は軽石製品で形状は石皿状を呈するが、岩石の性質上石皿としての用途は考えられない。35は凝灰岩製の石皿片である。



第16図 縄文時代土坑1~3号検出状況



第17図 縄文時代土坑2, 3号内出土遺物

黒曜石ブロック (第12図)

A・B - 33区でIV b層下位からV層上面で総数335点の黒曜石のブロックが検出された。長軸4 m、短軸3 m程度に収まり、微細なチップが大半を占めた。未製品等は出土していないが、石器制作における最終調整的な場であったと想定される。

(3) 遺物

前原和田遺跡の縄文時代の調査ではB-D-23~34区にかけて中期末から後期初頭の遺物を中心に、早期、晩期の遺物が出土した。調査範囲は現県道沿いに幅2 m強から7 m、長さ120 mほどの細長い範囲で行った。出土遺物は、総数5517点で内375点の図化を行った。

出土遺物の分類概要を行った後、それぞれの詳細について記述する。

I類土器 (第21図36~38)

器形は、直線的にほぼ直に立ち上がり円筒形を呈する。胴部外面に斜位の貝殻条痕文を、口唇端部に貝殻腹縁で刻みを施す。口唇部内面に段を有する一群である。

II類土器 (第21図39)

胴部片1点のみの出土で器形は不明である。外面文様に豆粒状の押型文を施す。

III類土器 (第22図40~46)

口縁部片、胴部片のみで全体的な器形の把握は困難で

ある。文様は外面に凹線による文様を施し、その間に二又状工具による押し引き状の刺突や連続刺突を施す。胎土に滑石を混入することを特徴とする一群である。

IV類土器 (第22図47~50)

口唇部から口縁部にかけ粘土紐を貼り付け飾りとし、粘土紐上に貝殻腹縁、工具等により刺突を行う土器の一群である。

V類土器 (第22図51~73)

口縁部、胴部片のみ出土のため、全体的な器形は不明である。口縁部の器形はわずかに内湾するものから直立気味のものである。口縁部の文様帯をわずかに肥厚、もしくは段をもうけ肥厚帯風に成形する。下面に接合痕がみられるものとみられないものがある。また、文様帯有段部に指頭による連点を施すものもみられる。文様は貝殻腹縁による刺突文や鋸歯文、沈線による同様な文様などを施す一群である。

VI類土器 (第24~43図74~269)

当遺跡の主体となる土器で、バケツ状、胴の張る深鉢を中心とする。外面上位を中心に、凹線や沈線で直線文や曲線文が横位に展開する土器で、凹点を伴うものもある一群である。文様構成、調整手法等で、細分も可能と考えられるが大括りにVI類とした。詳細解説において、小さな区分での説明を行うこととする。

VII類土器 (第44図270~286)

口縁部、胴部片のみ出土のため、全体的な器形は不明である。口唇部に凹点や短沈線を施すものがみられる。口縁部を肥厚させ弧状、S字状の凹線、縦位、斜位の沈線を施す一群である。

VIII類土器 (第51図365)

胴部片1点のみの出土である。器形は胴部に屈曲部をもち屈曲部から上方へ外反しながら内傾する。無文で外面をミガキ調整する。

IX類土器 (第51図366・367)

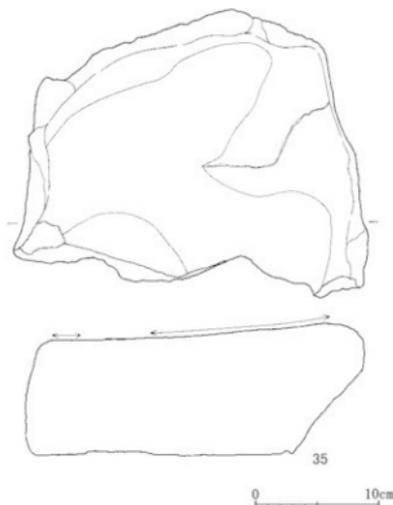
口縁部のみ出土のため全体的な器形は不明である。内外面ともに入念なミガキ調整が行われ口唇部が玉縁状をなす。

X類土器 (第51図368~373)

口縁は、やや外傾する。内面はミガキ調整が施され、外面は条痕の残る荒いナデ調整が施される。底面外部に組織痕が残るものもみられる一群である。

XI類土器 (第51図374・375)

胴部下半と思われるもので、内外面ともに入念なミガキ調整が施される。器形はやや外反気味に外傾する。



第18図 縄文時代土坑3号内出土遺物

土器

I類

C-29区で出土した26点の内口縁部片3点を図化した。36~38はわずかに外傾し直線的に立ち上がる円筒形の土器で、外面に斜位の貝殻条痕文を施す。口唇部内面に段を有し口唇端部に貝殻腹縁による刻みを施す。3点とも同一個体と考えられる。

II類

B-32区・IVb層で1点出土した。本来下層から出土する遺物であり、周辺からの流れ込みと考えられる。39は胴部片で外面に豆粒状の押し型文が施される。

III類

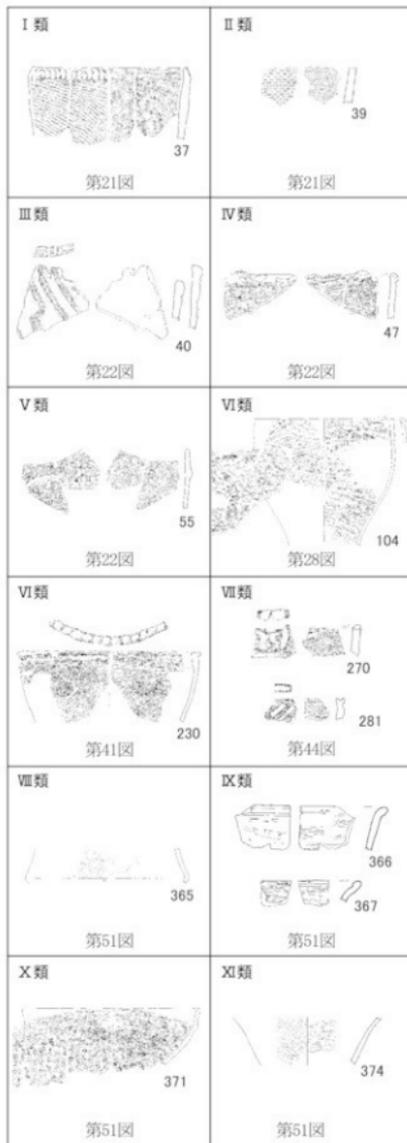
III類は24~34区にかけ点在する。7点を図化した。40~46の内41を除く全てが滑石を混入する。40、41は口唇部に突起を有す。40は口唇に2条の沈線が巡り、突起上端には内面から外面に向かい2条の沈線文が施され、そこから口縁外面では2又状工具による斜位の押し引き文となる。押し引き文は3条みられ、口唇部突起は3分割されているものと思われる。41は突起部が2分割され、さらに分割された頂部に刻みを施し2分割する。突起下位に凹点もしくは凹線が施され、その周辺には貝殻腹縁による刺突文が施される。42は深い凹線文で緩やかな曲線が描かれ凹線間に二又状工具による連続刺突が施される。43は横走するごく浅い凹線に2又状工具による連続刺突が平行する。器壁の薄い胴部片である。44は43同様の文様構成であるが連続刺突が密で器壁がやや厚い。45は二又状工具による押し引き文が施される。刺突時の力が弱いため沈線状になる。46も45同様の施文で、縦位・横位に組み合わせる。

IV類

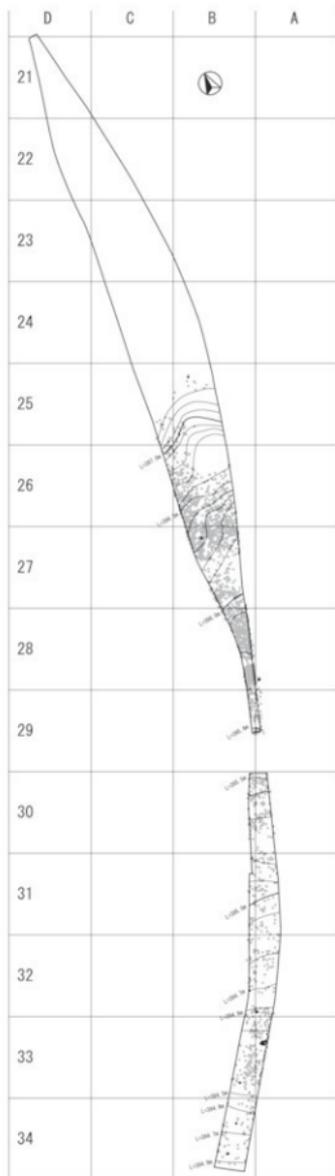
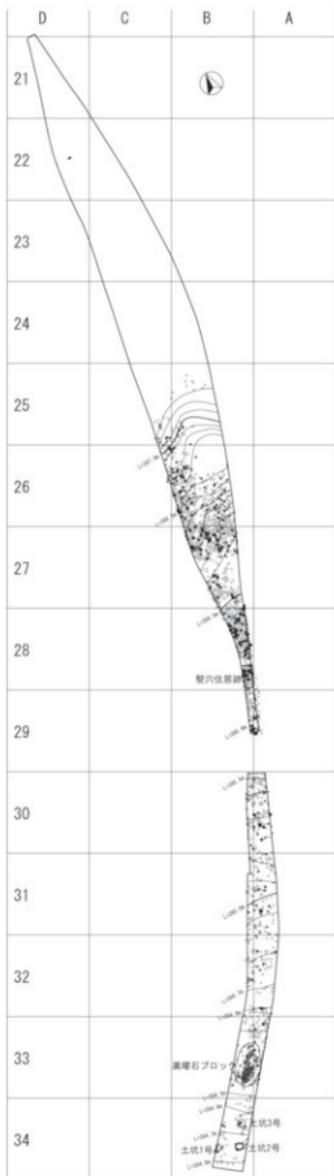
類別可能であった4点を図化した。47は口唇端部に突帯を巡らす。口唇から突帯にかけ粘土紐を弧状に貼り付け、そこに貝殻腹縁により刺突を施す。48は口唇を平坦に仕上げ、口縁部に渦巻き状に粘土紐を貼り付け、そこに貝殻腹縁による刺突を施す。器面には貝殻条痕文が施される。49は48同様の口縁部片である。器面はナデにより調整される。50は口縁部付近、もしくは胴部片と思われる。粘土紐が貼り付けられ、そこには貝殻腹縁による刺突文が施される。器面には貝殻条痕文が施される。

V類

類別可能であった23点を図化した。51は幅が狭く、厚手の口縁部肥厚帯で文様は施されず、内面に貝殻条痕を残す。52は51同様の肥厚帯を有し、肥厚帯下端に凹点状の刻みを施す。肥厚帯には斜位に貝殻腹縁刺突文、押し文が施される。53は口縁下位にわずかな段を有し肥厚帯とし、口唇部に向かい先細る。肥厚帯には横位の貝殻腹縁による刺突が連続する。54は53と同様の器形



第19図 土器類別



第20図 縄文時代遺物出土状況

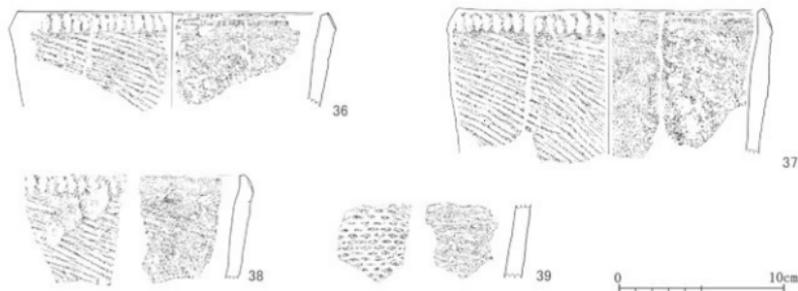
$S=1/600$

で肥厚帯に横位の沈線が数条施される。55 は口唇部を欠く口縁部片で口縁下に粘土を貼り付け肥厚帯とする。肥厚帯には斜格子状に貝殻腹縁による刺突文が施され、肥厚部下端には凹点状の刻みが施される。外面は調整の貝殻条痕がわずかにみられるがナデにより消される。内面の上位は丁寧なナデ調整が施されるが、下位には貝殻条痕が残る。56 は 53 同様の器形・文様で、口唇部に山形の突起が付く。57 は口唇部を欠く口縁～胴部片で口縁下に粘土を貼り付け肥厚帯とする。胴部は外傾気味に立ち上がり、口縁肥厚帯はやや直立する。肥厚部下端には刻みが施され、肥厚部には平行した縦位の鋸歯状沈線、斜位の沈線が施され、それぞれの沈線間は貝殻腹縁刺突文で充填される。58 は 54 同様の器形を呈するが、肥厚帯幅が広い。肥厚部下端に凹点状の刻みが施され、文様は施されず、器面調整の貝殻条痕をわずかに残すのみである。土器外面に付着した炭化物を年代測定にかけた結果、(2620calBC - 2562calBC) の年代を得ている。59 は 58 同様の器形でわずかに口縁部が外反する。肥厚部下端と口唇端部に棒状工具による刻みが施される。60 は口縁肥厚部がシャープな段差を有し、口唇やや下位から縦位の貝殻腹縁による押圧文が施される。61 は肥厚部に貝殻腹縁による斜位の刺突文、その下に横位の刺突文が施される。62 は口縁部がやや内湾する。口縁部にわずかに粘土を張り付け肥厚させ、先端の尖った工具で平行する連続刺突を波状に行い、交差させる。口唇部に突起をもち、刻みにより3つ山となる。肥厚部下位は調整の貝殻条痕が残る。63 ~ 66 は肥厚部に沈線による鋸歯状文を施す。67 は口唇部を平坦に仕上げ、篋状工具による刻みが施される。外面には斜位の浅い沈線が施される。68 は平坦な口唇部に先端の尖った工具で連続する刺突が施される。外面には2条の沈線による鋸歯状文が横位に展開すると思われる。3条の沈線での曲線文が組み合わさる。内面には格子状に貝殻条痕による調整痕が残される。69 は胴部片で2条1単位の沈線が鋸

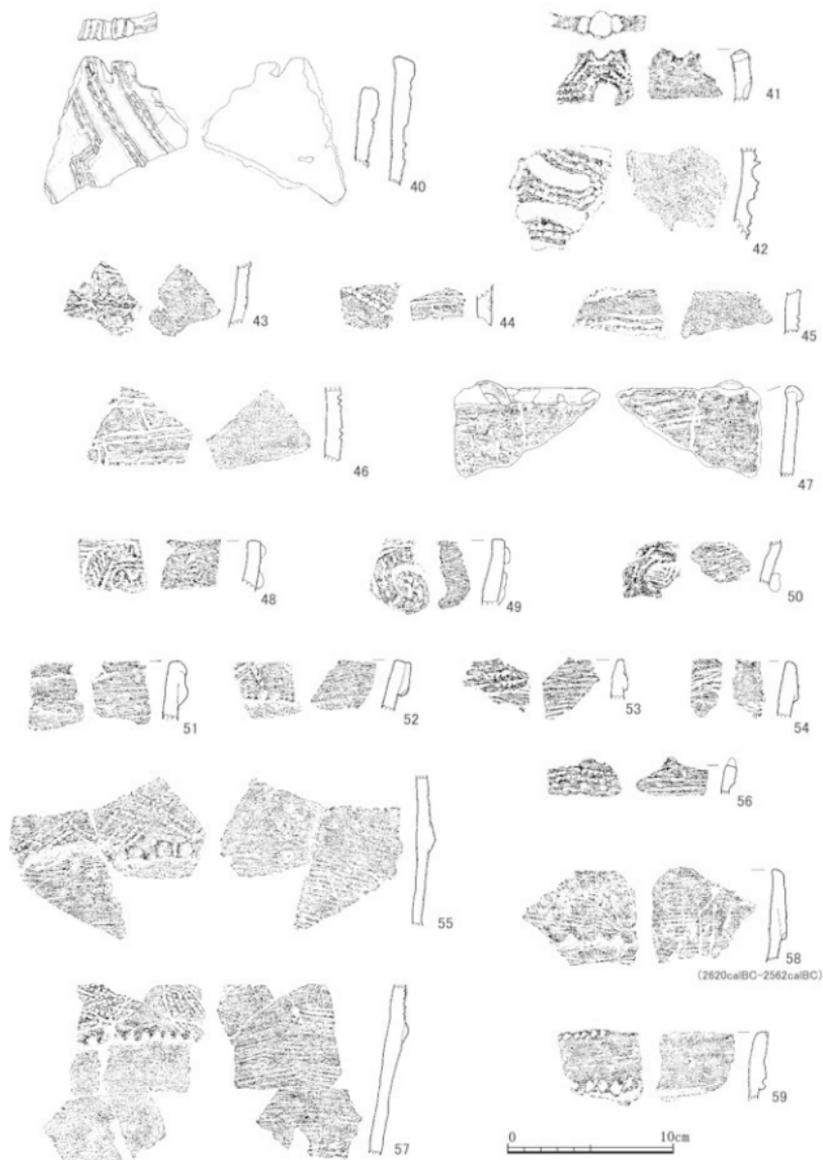
歯状に、縦横に施されると推測される。70, 71 は狭小な肥厚帯で、無文である。72 は口縁下に突帯を巡らし、突帯上に凹点状の刻みを施す。やや趣は異なるが口縁肥厚帯を意識したものと解して、ここに記載した。73 は狭小な肥厚帯に貝殻腹縁による縦位の押圧文で大胆な刻みを施す。その下位にはやや太めの沈線文が巡る。口唇部には、ねじり紐状の飾りが付く。

VI類

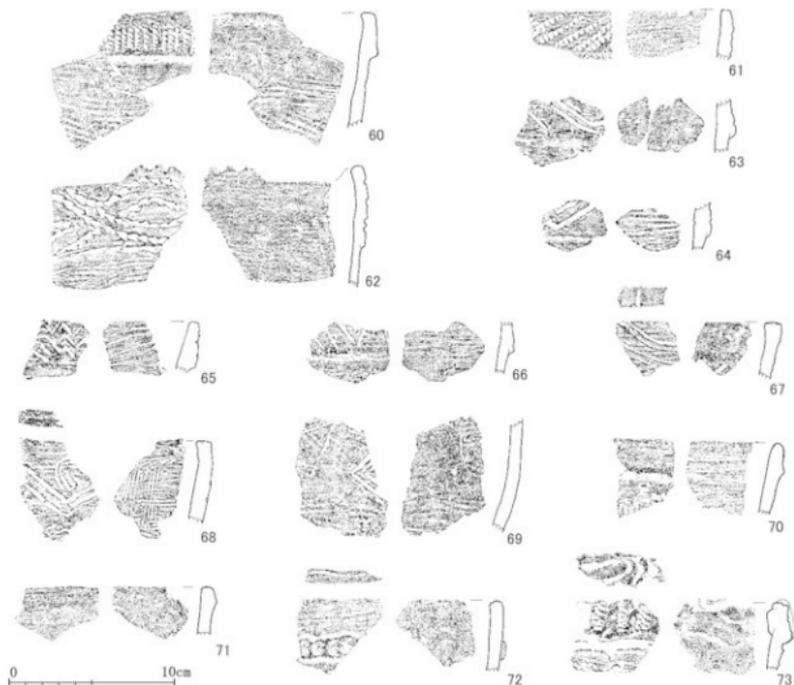
VI類は22~34区にかけ出土し、B・C - 25 ~ 29区に集中する傾向が伺えた。総点数780点を出土し、内196点を図化した。凹線、沈線の使い分けは、線の深さが深く、線両側の稜線がぼんやりしたものを凹線、線の深さが深く、線両側の稜線がくっきりしエッジのあるものを沈線と表現した。74 ~ 103 はやや太めの凹線で文様を構成するもので器形は内湾するものから口縁部で外反するものまで多様である。74 は口縁部で外反する器形で口唇部は平坦に仕上げ、口唇部に隆起部を作出し飾り突起とする4か所程度の突起を有すると考えられる。外面にはやや細形の凹線が鋸歯状もしくは波状に、横位に展開すると思われる。75 は74と同様な器形を呈し、胴部がわずかに張る。口唇部平坦面に棒状工具による刺突を連続して施し、外面には口唇端部直下に棒状工具による鋸歯状の沈線文、その下位に大中小からなる3重の菱形文が施され、その中間にシンメトリーに太形の凹線文が弧状に施される。施文は胴部中にまで及ぶ。76 は口縁部が内湾する。口唇部に深い凹点を施し、凹点のわりに細い凹線の横走線や曲線文が組み合わさる。77 はわずかに外傾し直線的に立ち上がる。口唇部に飾り突起剥落痕が観察される。外面には口唇直下に棒状工具による刺突文、2条1単位の凹線が曲線的に描かれる。78 は口唇部に凹線が施され、外面には曲線文、直線文、凹点文の組み合わせで施文される。79 は77同様の器形で、口唇部は平坦、口唇直下に爪痕を残す刻みが施され、その下位に曲線文が施される。80 は口唇端部に突帯を巡



第21図 I, II類土器



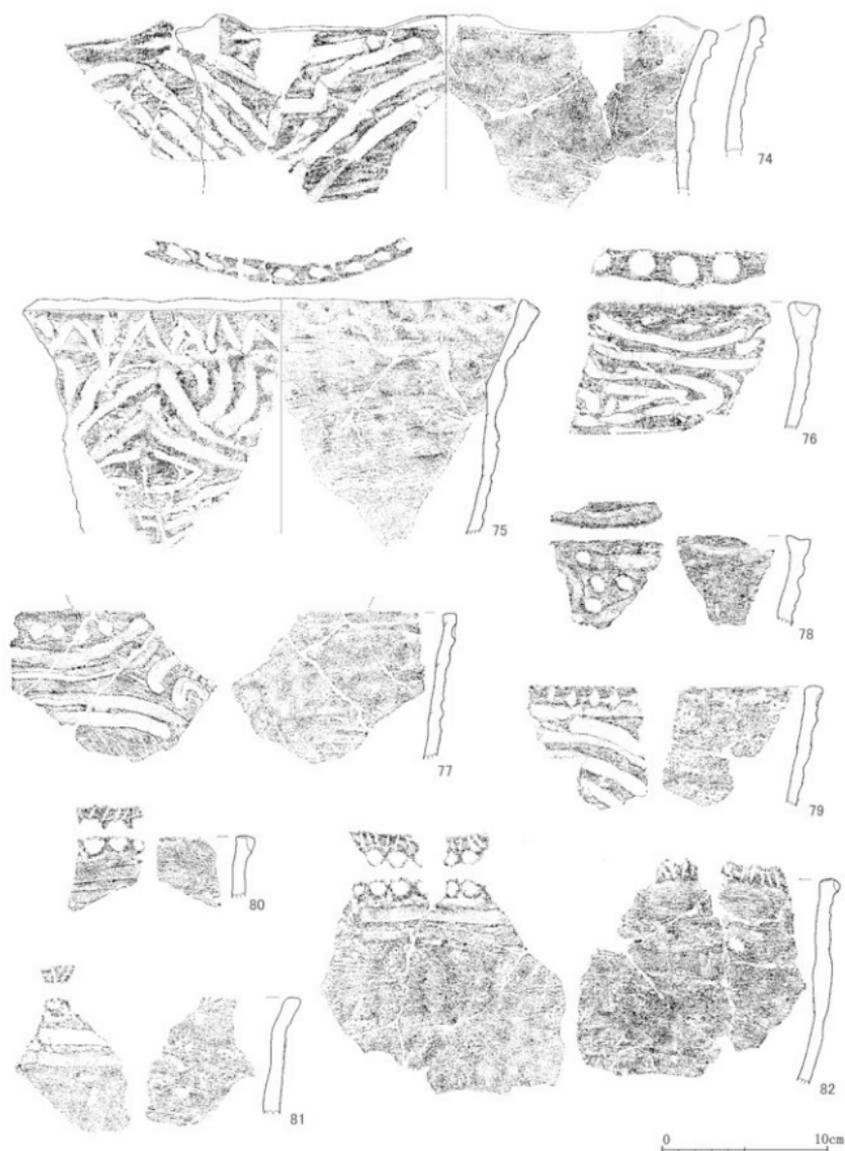
第22図 III, IV, V類土器



第23図 V類土器

らせ、そこに凹点状の刻みを施し、その下位には横走する浅い凹線が施される。口唇部には篋状工具による斜位の刻みを行う。81は口縁部で外反する器形で、80と同様の文様が施される。82も80同様である。83は口唇部が平坦で口唇直下に弧状の凹線、その下位に横走する凹線文が施される。口縁はやや外傾する器形を呈する。84は内湾する口縁部で外面、口唇直下に横走する凹線、そこから下位に斜位及び縦位の凹線文が施される。85は平坦口縁で口唇直下に併走する曲線文が2～3条施される。86～92は口唇部に刻みを施す口縁部片である。86は胴部上位でわずかに縮まり口縁部がわずかに外反する器形を呈する。口唇部に粘土を貼り付け、そこに棒状工具で刻みを施す。口唇直下から棒状工具による刺突文や斜位の凹線、鉤状組み合わせ文などが複合して施される。施文部位は胴部上半に限られる。87は、胴部片であるが、器面調整、胎土などからと86同一個体の可能性が高い。88は棒状工具による大ぶりの刻みが施される口唇部を

もつ。外面には浅い幅広の凹線が横位、斜位に施される。89は口唇平坦面にさらに粘土を盛りつけ、そこに棒状工具により刻みを施す。外面から貼り付けが観察できる程度の接合しか行われていない。外面には太形の凹線が横走する。90はやや肥厚する口唇部上面を棒状工具で内側から外側へ押さえ込むようにして大振りな刻みを施す。外面に2条の横走する太形凹線、その下位に棒状工具先端による刺突文が施される。91は89と同様の口唇部刻みを施す。外面に1条の横走する太形凹線文が施される。92は口唇部を粘土で包み込むようにして肥厚させ玉縁状にする。口唇部上面から棒状工具で押し刻みを施す。93～95は胴部片でいずれも太形凹線による曲線文が描かれる。94は胎土中に滑石を混入する。96～99は口縁部片である。96は口唇部に上から棒状工具を押しつけたような浅い刻みが施される。口縁下位に、横走するやや細めの凹線を横位に施し、その上位から口唇部にかけて斜位を基調とした凹線文を組み合わせた文様が施

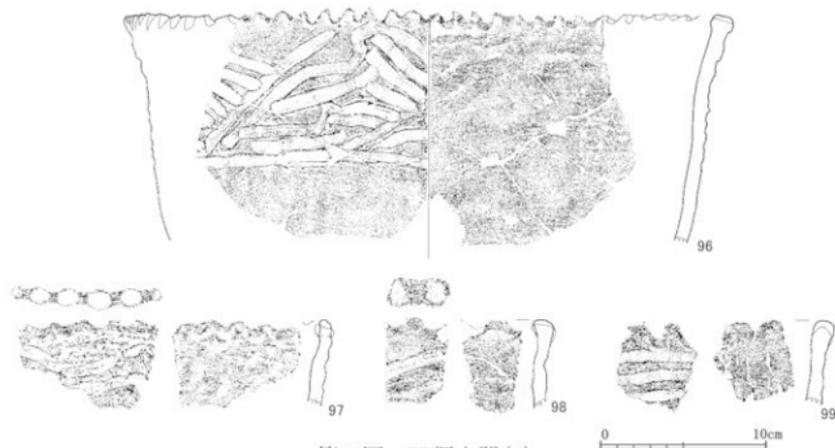


第24図 VI類土器(1)

0 10cm



第25図 VI類土器(2)



第26図 VI類土器(3)

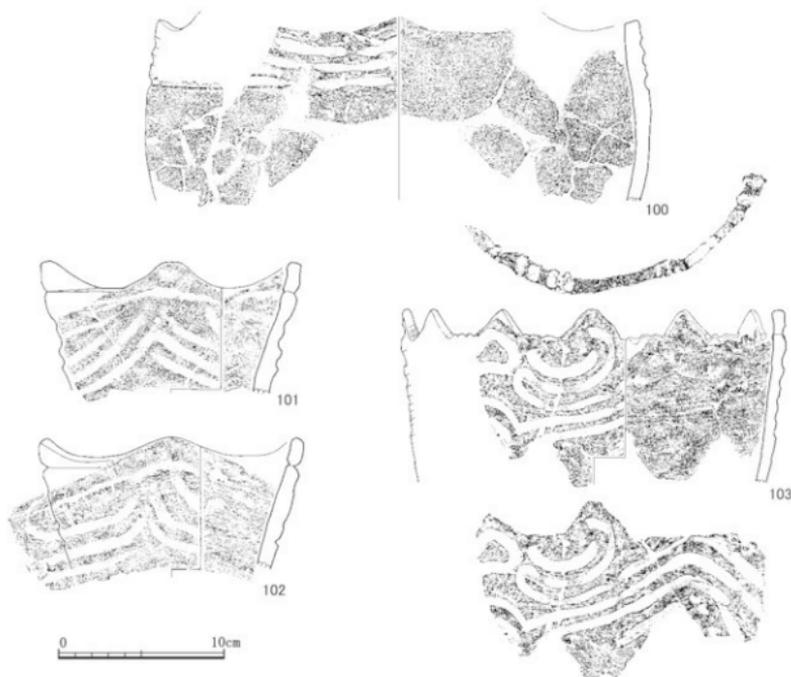
される。外面には煤が多量に付着する。97, 98は96と同様な手法で口唇部刻みが施される。97は曲線の回線文が施され、98は斜位の回線文が施される。99は97と同様な手法で口唇部刻みが施される。外面には3条の併走する横位の回線文が施される。

100～103はやや細めの回線文が施され、波状の口縁を呈するものである。100はやや内湾する。外面には口縁に沿う形で3条の併走する回線で波状文が展開すると思われる。波頂部は4～5か所程度と思われる。101, 102は口唇部に粘土を上積みし波頂部を作る。外面文様は波頂部を起点とする弧状文がシンメトリーに描かれる。101, 102は文様、胎土等から同一個体の可能性が高い。103は口唇部に間隔を開けた山状飾り突起が作られ、突起間には棒状工具による浅い刻みが施される。外面には曲線を主体とした細めの回線文が施される。

104～117はやや太めの沈線、細めの回線で横位に展開する文様に巻きひげ状の文様がみられ文様帯が口縁部に集約されるものである。104は胴部下半は外反しながら外傾し胴部からわずかに内傾気味に直口する。口唇部にはねじり紐状の飾りが付く。外面の文様はやや太めの沈線で菱形を形作る緩やかな波状文の組み合わせと巻きひげ状の曲線文が横位に展開する。文様は口縁部に集約される。105は接点が見つからなかったため別掲としたが104と同一個体の可能性の高い底部片である。わずかに上げ底となる。106はB-28区でまとまった状態で出土し、完形に復元できた資料である。平底の底部から

やや外反気味に立ち上がり、胴部から口縁にかけ直立する器形である。口唇部には飾り突起が施され、口唇全体に篋状工具による刻みが施される。剥落の状態から3か所の突起が存在したものと思われる。外面にはやや細めの回線で直線文や曲線文が横位に展開する。文様帯は口縁部付近に集約される。また底面には網状痕が残される。107は直口する口縁で細めの回線で巻きひげ状の文様が描かれる。外面には多量の煤が付着する。108は外面に棒状工具により細く浅い沈線の巻きひげ状の曲線文が施される。口唇には粘土貼り付けの一端が確認でき飾り突起を有するものと考えられる。109は外面にやや太めの沈線で曲線文が描かれる。110は口縁端部でわずかに外傾する。口唇部は平坦で、口唇下位に横走する沈線、その下位に曲線文が施される。111は110同様の器形、文様を呈する。112は直口する口縁で平坦な口唇で下位に横走する沈線、その下位に巻きひげ状曲線文、直線文が描かれる。113, 114は112と同様な器形、文様構成を呈する。115は胴部下位から口縁部へ内湾しながら立ち上がる器形で、文様は細めの回線で巻きひげ状曲線文を中心として曲線文で構成される。文様は口縁部に集約され、胴部外面上半に多量の煤が付着する。年代測定の結果(2494calBC - 2456calBC)の結果を得た。116は115同様の器形でやや深めの沈線で直線文、曲線文が描かれる。117はわずかに内湾する口縁で外面に竹管状工具による刺突、細めの回線で曲線文が施される。

118～124は口縁下がる器形を呈する深鉢、または

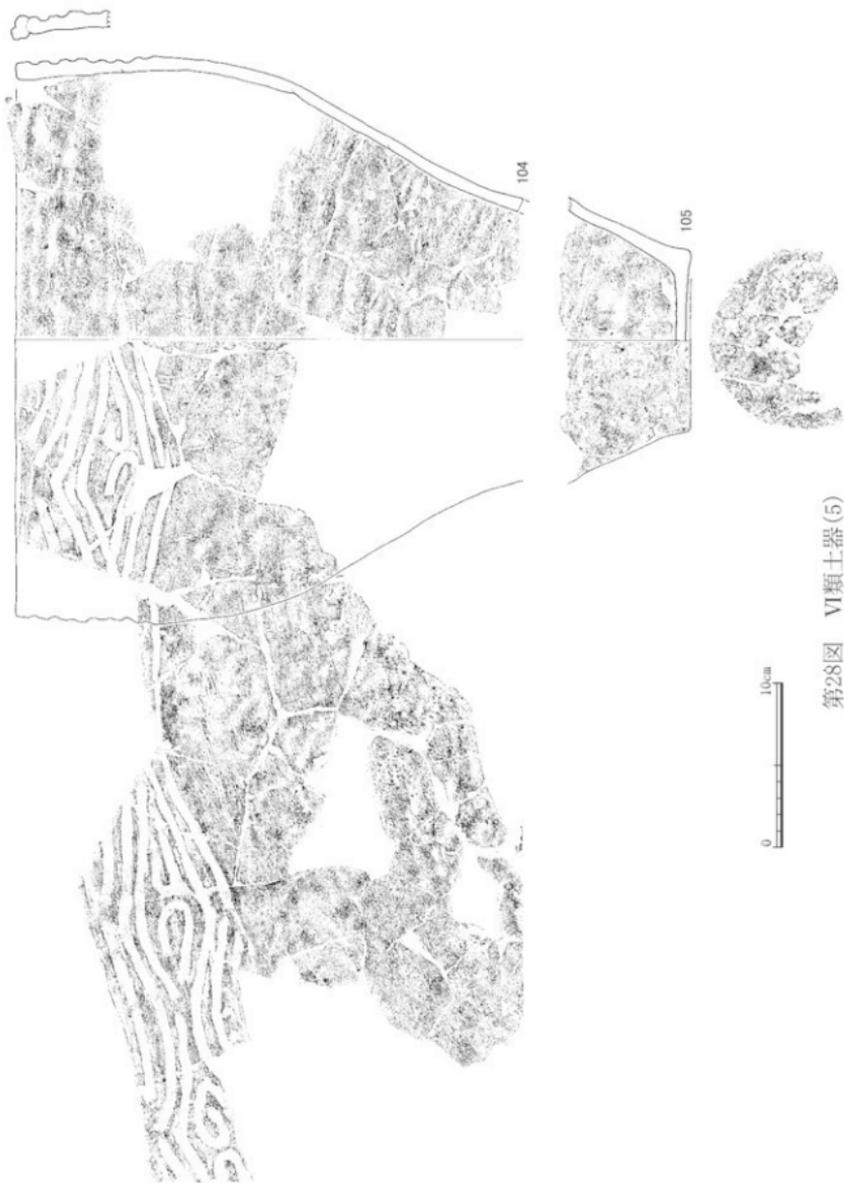


第27図 VI類土器(4)

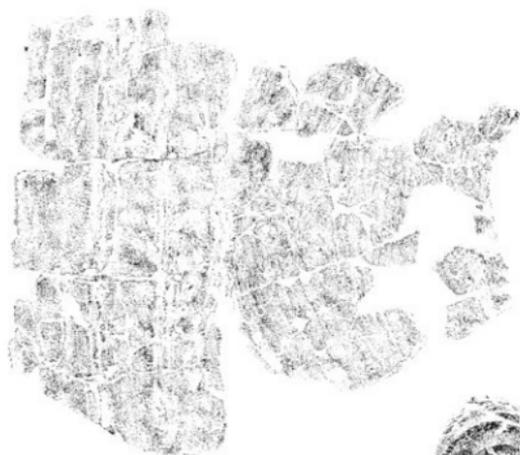
鉢である。118～122は胴部上位が張り口縁部へと内湾する器形で、118は胴部の指頭圧痕が顕著で器面が凸凹を呈する。太めの深い沈線が横位・斜位に施され、文様帯は口縁部に集約する。119は口唇部が平坦で、外面に棒状工具による曲線文が、太めで深い沈線で描かれる。120、121は口唇部に内面から外面に向かい棒状工具を押しつけ刻みを施し、その直下に凹点が施される。120は凹点に加え曲線から斜位への変化する太めの沈線文が組み合わさる。胴部下半は最終のナゲ調整が荒く、貝殻条痕がかなりの割合で残る。内面調整は比較的丁寧であるが粘土接合痕が明瞭に残っている。121は残存部位が小さく直立で図化した。120と同様の口唇・文様をもつことから内湾することも考えられる。122は口唇部が平坦で口唇直下から深めの沈線が横位・斜位に施される。123は胴部から口縁に向けわずかに内湾しながら外開きする鉢と考えられる。口唇部には篋状工具による密な刻みが施され、粘土貼り付けにより小さな波頂部が設けられる。外面には細めの3条1単位の凹線で波文状の

文様が描かれる。外面に煤が付着していたため年代測定をした結果(2489ca1BC - 2450ca1BC)の結果を得た。124は胴部片で器形・胎土・調整痕から120の同一個体と推定される。

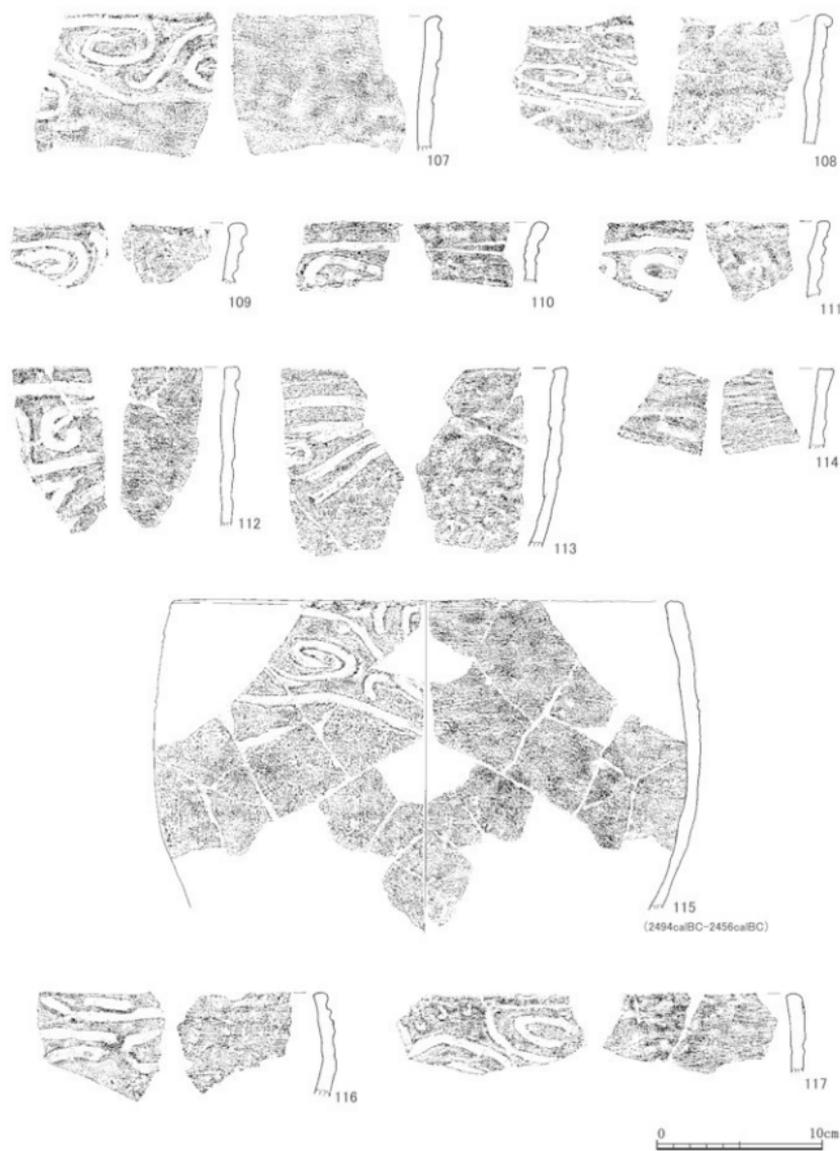
125～137は胴部中程から口縁にかけ複数単位の逆U字状の沈線が縦に伸び、それが横展開する。125は外傾する胴部が口縁から直口する器形で、口唇部に8の字状に粘土紐を貼り付け装飾する。口唇直下に突帯を巡らし、そこに凹点を施す。その下位に3条の併走する太めの沈線を横走させ、そこに交わるように3条1単位の逆U字状の沈線が描かれる。126、127は胴部片で胎土、焼成、文様の状況から125と同一個体の可能性が高い。両者には逆U字状の沈線の終端が描かれており、胴部中程まで伸びていたことがわかる。128は口唇部に波状の刻みを施す口唇下位に横走る沈線が施され、そこから胴部へと流れるU字状の一端が確認でき、その両側には、棒状工具による刺突文がみられる。129は口唇部に粘土紐が貼り付けられる。また口唇直下から3条1単位の縦



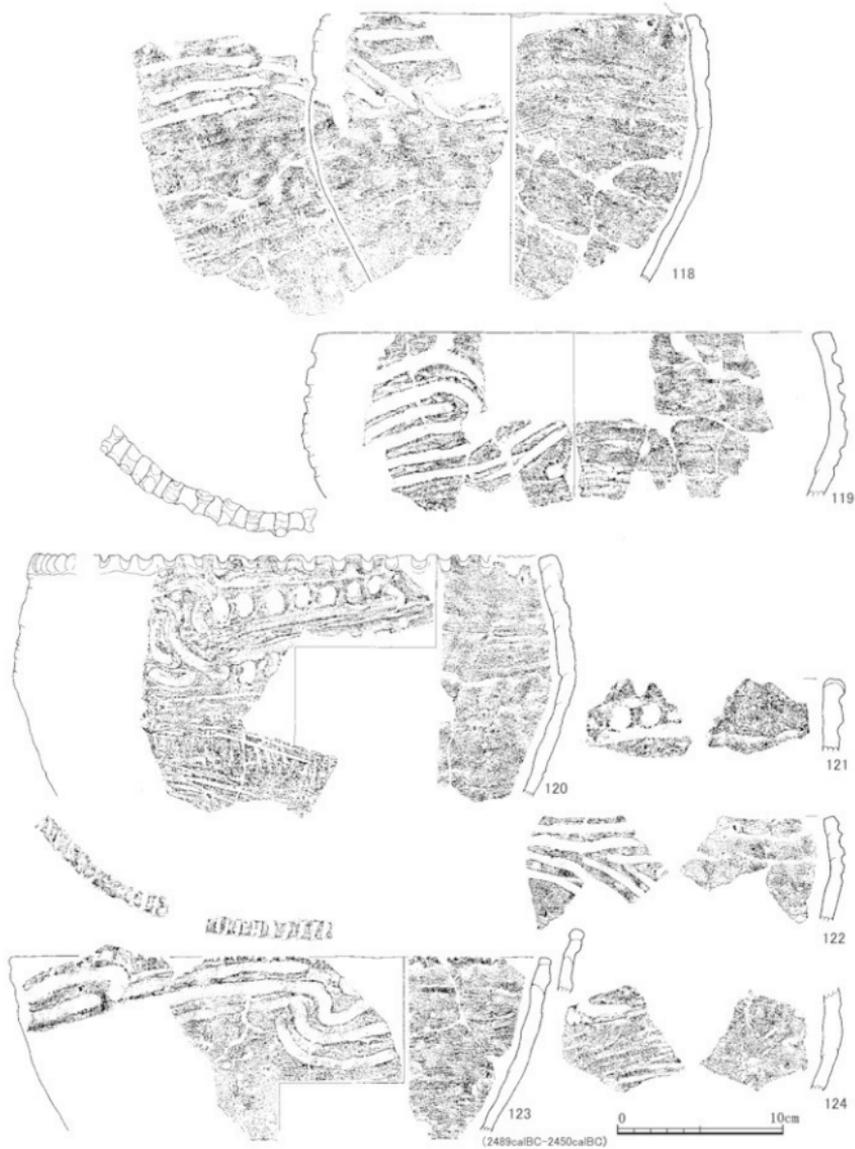
第28図 VI類土器(5)



第29図 VI類土器(6)



第30図 VI類土器(7)



第31図 VI類土器(8)

方向に流れるU字状沈線が施されると思われる。130は胴部片で、横位2条の平行沈線、2条1単位で縦方向に流れる曲線文、その間を埋める三角文が確認できる。

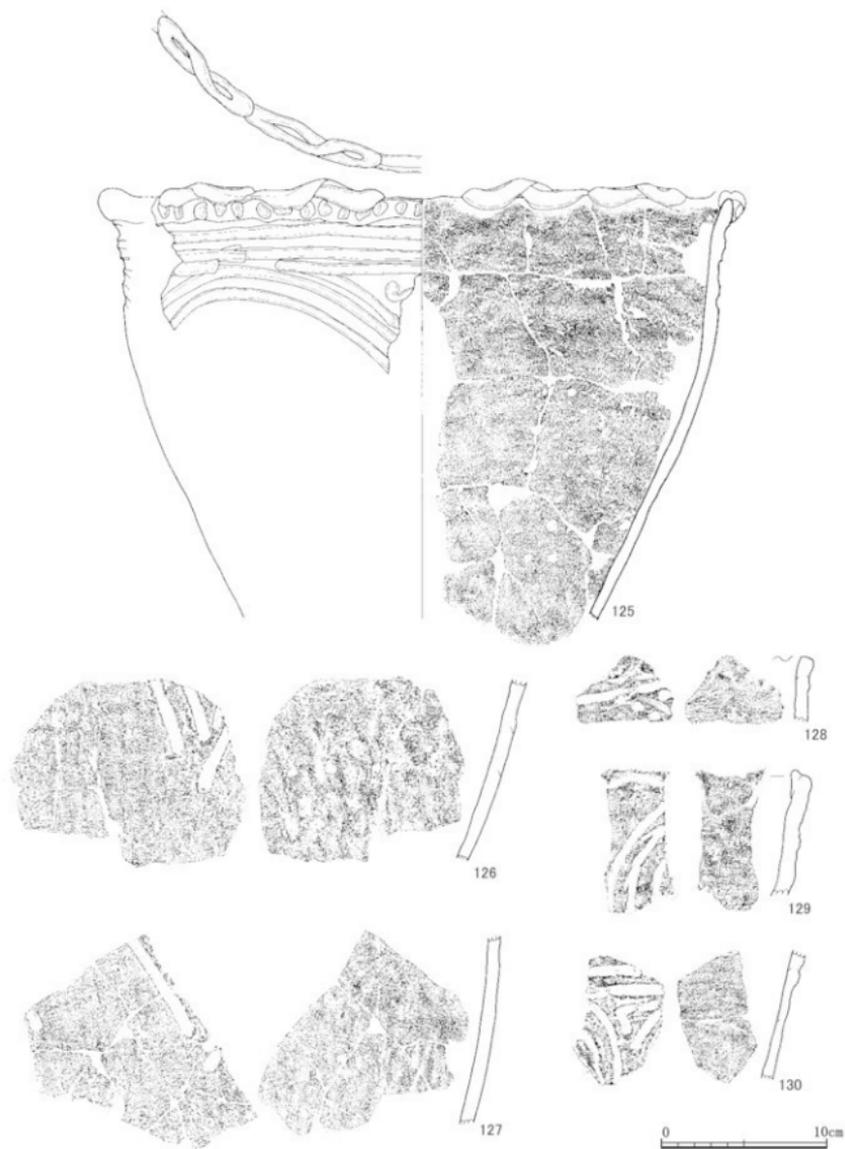
131は完形品で底部から外傾しそのま直口する。口唇部は棒状工具による刺突を巡らし、外面口唇直下に同様の刺突を施し、その下位から底部まで3条1単位の逆U字状の沈線が施され、その上位に弧状の沈線が加わる。弧状とU字状の沈線の間にも口唇同様の刺突文が施される。底面には網代圧痕が残存する。132、133は小片のため全体は把握できないが131同様の文様構成と思われる。132には口唇部の刺突がみられない。134は内湾する口縁で口唇直下に2条の併走する沈線が施され、その下位に逆U字状の沈線が施されると思われる。135は内傾し口縁部で直立する器形である文様構成は134と同様であるが、それに楕円文が加わる。136、137は胴部片で縦方向に伸びる沈線と竹管状工具による刺突文、縦位の連続する短沈線が構成される文様をもつ。

138～140は弧状の沈線が展開する胴部片である。138は口唇部が平坦で、口唇直下に2条の併走する沈線が巡り、その下位に下向きに広がる7条が併走する弧状の沈線が描かれる。139は胴部片で横走から曲線へと変化する沈線とその下位に、やや曲線的な短沈線が施される。140は平坦な口唇部に棒状工具を押圧して2条のやや大振りな刻みを施す。外面には上に広がる併走した4条の沈線が描かれる。

141～146は直線、曲線の沈線に三角形の連続刺突を基調とする文様が施される。胴張りの深鉢もしくは鉢である。141はやや肥厚する口唇部に半截竹管状の工具で単位の長い押しが施される。また口唇部を包み込むように粘土を貼り付けて飾りとし、それを串状工具刺突で満たす。外面は横位の弧状沈線その下位に横位の沈線、さらに半截竹管による三角形刺突が施される。142は内湾する口縁で口唇部に半截竹管により三角形の刺突を巡らす。口唇直下にも同様の刺突を巡らし、その下位に2条の併走する沈線、その下に曲線文と口唇同様の刺突を組み合わす。143は142と同様の器形・文様構成であるが三角形の刺突文が沈線間全体に施される。144は小破片で形状はほとんど伺い知れないが143と同様と考える。145、146は胴部片で沈線と、半截竹管による三角形の刺突が確認できることからここに掲載した。147～161は横位・斜位の沈線を基調とした文様が描かれる。147～149は口唇部が平坦で、147は内面に貝殻条痕が残る。148の横走沈線下の斜位の沈線は逆U字状の一部とも考えられるが、断片のためここで扱った。150は波状口縁になると思われる。波頂部の直下に楕円文が施され、そこを中心に横位・斜位の沈線が展開する。151は内傾する口縁で口唇部に凹線が巡る。外面には斜位の沈線が複雑に組み合わせられ施文される。152～160は胴部片で

外傾し直線的に立ち上がる器形である。152は横走するやや太めの沈線間に三角形文が組み合わせり展開すると考えられる。三角形文の中は弧状の短沈線で充填される。153は152とほぼ同様なモチーフで文様が描かれる。154は浅い沈線とやや長めの短沈線が組み合わせられる。155は横走沈線を2条の併走する斜位の沈線で分割し、横走沈線間に弧状、楕円の沈線文が施される。156、157は小片で文様モチーフの確定はできないが、横走する沈線と斜位の沈線が観察できることから、ここで扱った。158は沈線施文部に強く押さえたところが多くみられ、施文の開始点が集中する。159は直線と曲線で構成される文様である。160は口縁部屈曲付近と考えられる破片で、文様は横位の沈線とやや長めの短沈線で構成される。161は外傾する口縁で口縁部内面から外面に口唇部をくるむように粘土紐飾りが貼付されていたと考えられる。口唇直下に横位の2条の沈線、その下位にわずかに弧状を呈する短沈線が縦位に施される。

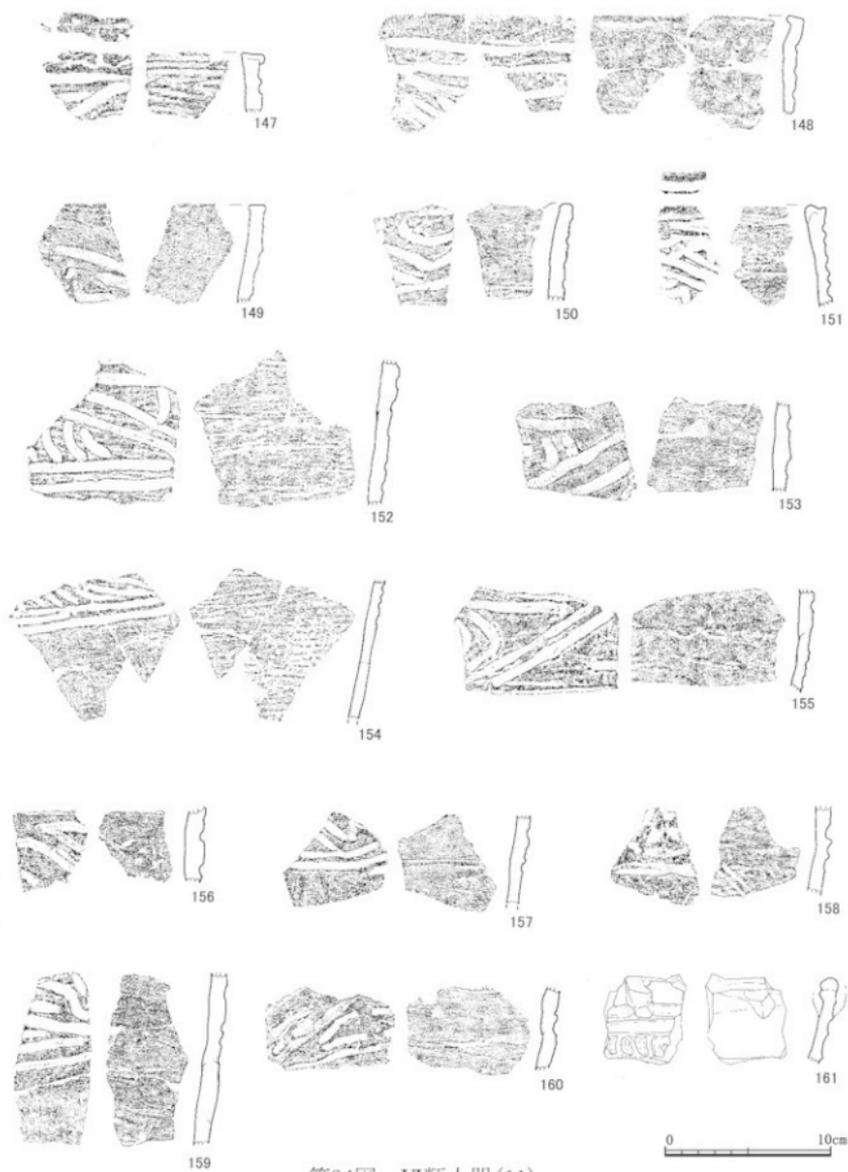
162～178はややシャープな沈線で文様を施す深鉢の口縁部、胴部片である。162は口唇部に棒状工具による刻みを施し、外面には横位、斜位曲線文を組み合わせた文様が横位に展開する。163は口唇部に棒状工具で内面から外面に力をかけ施したわずかな刻みを施す。外面には斜位の浅い沈線が描かれる。164は胴部片でエッジの鈍い沈線で、横位の沈線、2条の併走する沈線が入り組み鉤状文が描かれる。165は大型の深鉢で胴部片と推測される。浅い沈線で靴形文に類似した文様が描かれる。166は小片で渦巻き文が施される。167は肥厚した口縁部に棒状工具で内面から外面に向け力かけ刻みを施す。刻み時の器壁のつぶれで玉縁口縁部の断面を示す。内面に貝殻条痕が一部残る。168は口唇部に粘土紐を貼り付けそこに棒状工具による深い刻みを施す。口縁部の粘土接合痕が明瞭に残される。外面には曲線文が観察できる。169は口唇部が平坦で、外面は曲線文、直線文、弧状文が複雑に組み合わせられた文様が施される。170は胴部片で外面は169に類似した文様が施される。171は口唇部が平坦でそこに短沈線が施され、外面には2～3重の矩形文が描かれ、中心には棒状工具の刺突文が充填される。172～174は口唇部に沈線が巡る。172は口唇が厚くなり平坦で、口縁外面には横位の沈線が施される。173は沈線のためか口唇が内面側に飛び出し突帯状となっている。口縁外面には矩形の沈線文が施される。174は口縁部内面に指頭圧痕が著しく、そこでわずかに段を有する。口縁外面には横位、曲線の沈線が施される。175は口唇部に棒状工具で内面から外面に力を加え大きな刻みを施す。口唇部の粘土積み上げ痕が明瞭に残る。176は175と同様の手法で口唇部に刻みを施す。口縁外面文様は矩形の沈線と思われる。177、178は胴部片で矩形の沈線が施されている。



第32図 VI類土器(9)



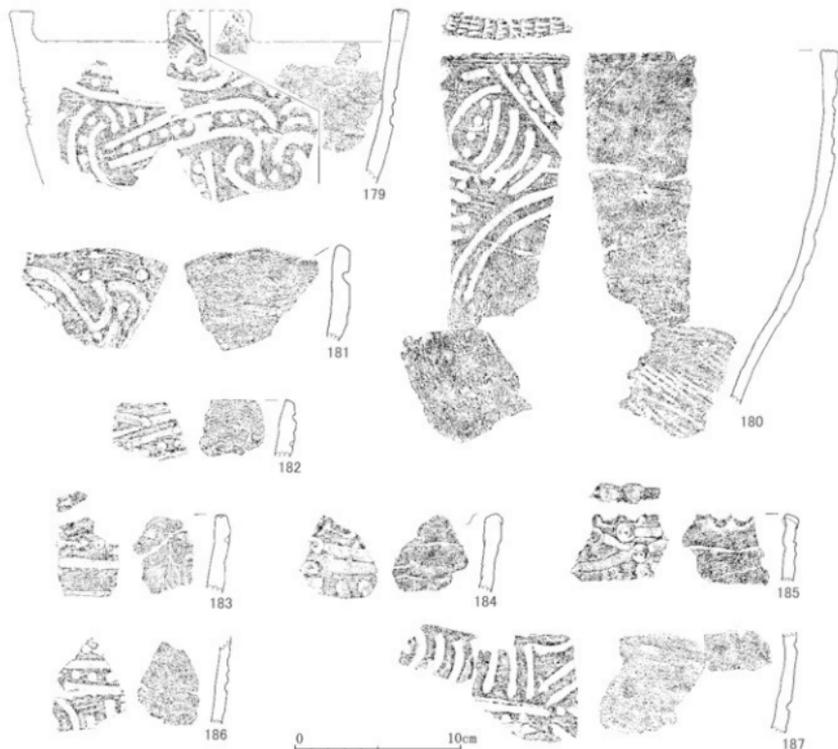
第33图 VI類土器(10)



第34図 VI類土器(11)



第35図 VI類土器(12)

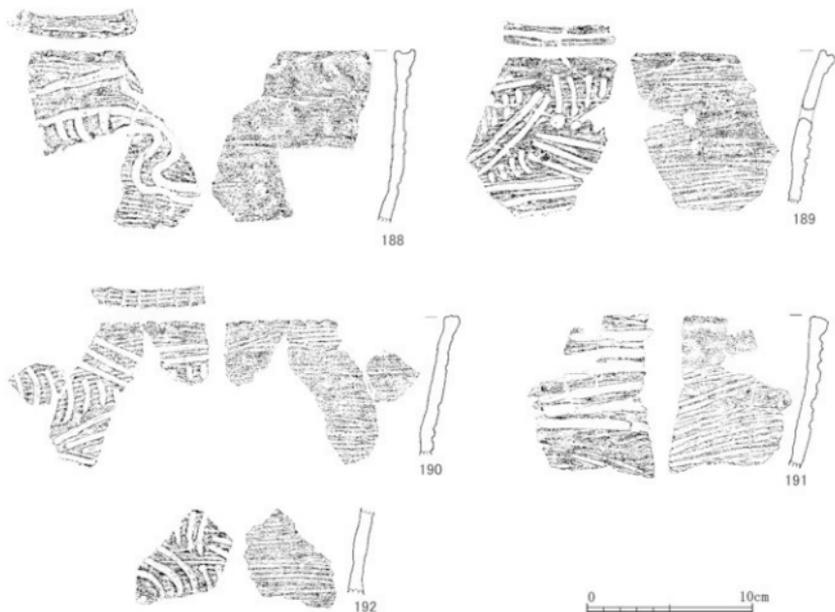


第36図 VI類土器(13)

179～187はシャープなエッジをもった深い沈線でご文様を施し、棒状工具先端で施した丸い刺突文を主要な文様とする深鉢である。179は口唇部に四角い突起飾りをもつ、胴部に曲線文と鈎状文を組み合わせた沈線が施され、その間を丸い刺突文で埋める。180は底部から外反気味に立ち上がり、胴部中位下半からやや内湾気味に口縁へと立ち上がる器形で、口唇部に貝殻腹縁による押し引きの刻みを施す。文様は弧状・斜位の沈線の組み合わせで一部の沈線間に丸い刺突文を施す。内面はナゲ調整されるが、底部付近は貝殻条痕が残される。施文範囲は胴部181～183は179と類似する文様が施文される。183は口唇部に刺突が1か所確認できる。184、185は口唇部に棒状工具による刻みが施される。184は大きな波状の刻みで全体に運ると推定される。185は平坦な口唇に

アクセントとして数か所の刻みが施されるものと想定される。186、187は胴部片で179、180と類似の文様と思われる。

188～192はシャープなエッジをもつ沈線で直線文・曲線文が施され、外面に器面調整の貝殻条痕を明瞭に残すものである。188は平坦な口唇に棒状工具による沈線を運らせ、口縁外面には併走する2条の沈線がS字状に屈曲する沈線文が描かれ、沈線文間に縦位の短沈線が施される。内面は丁寧なナゲ調整が施される。189は口縁部が外傾し、わずかに外反する器形で、口唇部にシャープな沈線が施される。口縁外面には縦位と斜位の沈線を主体にした組み合わせ文が施される。内外ともに貝殻条痕が明瞭である。補修孔と思われる穿孔が外面から内面に向かって穿たれる。190は180と同様な口唇部刻みが



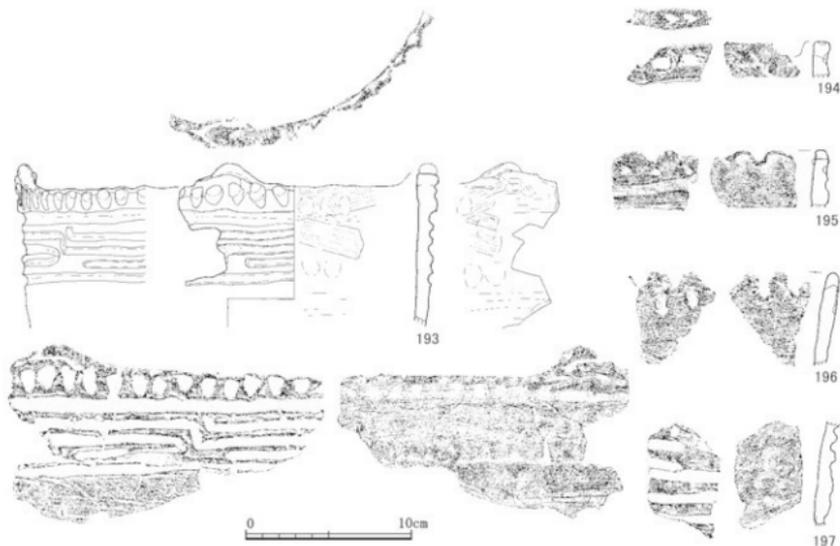
第37図 VI類土器(14)

施される。横位、斜位、縦位の弧状沈線が組み合わせられ施文される。180 と類似するが、沈線幅がより狭く、貝殻条痕の残し具合が異なるため別個体と判断した。191 は口唇部が平坦で口縁外面に横位の沈線が施される。口縁端部内面はナデ調整されるが、口縁下位には貝殻条痕がそのまま残される。192 は胴部片である。胎土・調整・施文などから190と同一個体と推測される。

193～207は深鉢で、文様が単純化された2条を1施文単位とする文様になる。193は口唇部にねじり紐状の飾り突起を施し口唇端部に棒状工具による指頭大の連点を巡らす。その下位に深めの沈線を横位に間隔をあけて施文しその間に2条1単位の平行沈線でクランク状の文様を描く。194～196は口唇端部に棒状工具による刺突連点文が巡る。194は口唇部にも同様の手法で刺突が行われる、飾り突起部である。195は口唇部に棒状工具により刻みを施し、口唇直下にも同様の工具で刺突を施す。刺突文の下位には横位の沈線が2条確認できる。196は口唇部に棒状工具で内面から外面に向け力を加え、刻みを施す。外面に短沈線状の凹点が施される。197は胴部片で施文単位が2条1単位であると判断してここに掲

載した。198は内湾気味に外傾する口縁で、口唇部に緩やかな山状突起が施され、口縁下位に2条の併走する沈線文が横位に巡る。口唇端部直下から沈線文間に2～3段の棒状突起による刺突が密に行われる。199は口縁部に巡る沈線から、枝分かれした沈線が平行し鉤状文となる。200は直線文と鉤状文の組み合わせである。口唇部に斜位の刻みが施される。201～204は鉤状文、もしくは横走沈線のみが確認できる資料のためにここに掲載した。いずれも平坦口唇である。204は口唇部に浅い刻みを施す。205は口唇部やや下位に併走する2条の沈線で弧状文、斜位の沈線文が施される。口唇部は玉縁状に肥厚させ棒状工具により内外面から力を加え刻みを施す。さらに口唇山部に口縁と平行な刻みを行う。206、207は胴部片で浅い沈線で鉤状文が描かれる。

208～277は小区分でいずれに属するか判断できなかったもので口唇に刻みを施すものや飾り突起、粘土紐貼り付けなどを行うものを一括した。208は口唇部粘土貼り付けにより飾り突起を作出し、そこを3分割以上にするものと考えられる。外面には細めの浅い凹線文が描かれる。209は口唇部にねじり紐状の飾り突起を貼付する。

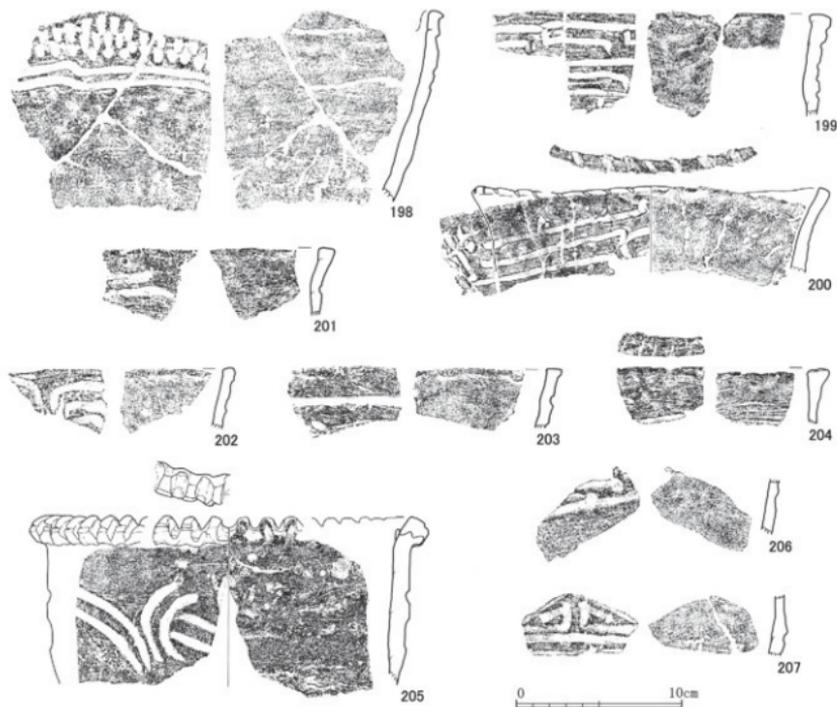


第38図 VI類土器(15)

外面には浅く細めの回線文が描かれる。210 はやや肥厚する口縁端部内外面にかけて広幅の粘土帯を〇形に貼付し飾りとする。211, 212 は口唇部に粘土紐を蛇行させ貼付し飾りとするか、もしくは巡らせるもので、いずれも粘土紐上に篋状工具先端で刺突を施す。外面には横走する沈線が施される。213 は口唇突起部分に両側含め4か所の刻みで3分割する。外面には曲線文、鈎形文などの沈線が描かれる。拓本からもわかるとおり口唇部が弧状を呈していることから皿、蓋の可能性も考えられる。214 はねじり紐状飾り突起が一部残る。外面には曲線文と斜位の直線文が確認できる。215 は角形の突起を分割したもの的一部分と思われる。突起状に浅い刻み、外面には横位の沈線が施される。216 は口唇部が肥厚し平坦面を有する。口唇部に楕円形に粘土紐を貼付し、そこに貝殻腹縁による刺突を施す。外面には横位の沈線が施される。217 は口縁端部内面から外面に向けU字に粘土紐を貼付する。218 は逆に外面から内面に向かってU字に粘土紐を貼付していたと推測される。外面にはともに横位の沈線文が施される。219 ~ 224 は口唇部に刻みを施すもので219, 220 は棒状工具により浅い刻みが施される。221 ~ 224 は口縁端部内面から外面に向けて力を加え刻みを施す。221 は刻みが緩く刻み部の断面形状が山形を呈する。222 は肥厚する口唇部に力を加え刻みを施すため口

唇が歪んでしまっている。223 は口唇を玉縁状にし、そこに内側から外側に向かって力を加え刻みを施す。224 は手指により刻みを施していると思われる非常に大振りで大胆な刻みとなっている。225 は口縁部を内側に肥厚させ、内面に稜を有する。口唇下位内面に竹管状工具による刺突と刺突から始まる沈線が施される。226 は口縁端部で逆L字状に折れ曲がる。内面に稜を有し、口唇と稜の間には沈線が巡り、貝殻腹縁刺突が施される。227 は口唇は平坦で外傾する口縁部で、口唇直下に細い沈線による区画が施され、区画内に細い工具による連続刺突が施される。

228 ~ 269 は無文の土器である228 ~ 248 は口唇部に刻み、刺突を施すものである。228 ~ 232 は口唇部が肥厚する器形で228 は口唇部に篋状工具により密な刻みが施される。229 ~ 232 は口唇部に指頭よる凹点を巡らす。230 は多量の煤が外面に付着しており年代測定の結果(2408caIBC - 2335caIBC)の年代を得た。233 は口唇に棒状工具による刺突を巡らす。234 は口唇に棒状工具によるごく浅い凹点が巡る。235 は口唇に貝殻腹縁による刺突が巡る。236 は口唇に棒状工具先端による丸い刺突が巡る。また外側からの衝撃による穿孔が口縁下位にみられるが、人為的なものかアクシデントによるものかは判然としない。237 は口唇を内側から外側に擴んだよ



第39図 VI類土器(16)

うな傾斜をもった緩い刻みが通る。238～240は口唇部に棒状工具を押しつけ刻みを施す。238、239は浅い刻み、240は深い刻みとなる。241～243は口唇部に内面から外面に向け力を加え刻みを行う。241は年代測定の結果(256calBC - 253calBC)の年代を得ている。244は内面側からと外面側からの2方向から力を加え刻みを行う。245～248は棒状工具を口唇上面から押しつけるようにして刻みを行う。

249～257は平縁口縁の深鉢である。258、259は器壁が薄手の波状口縁を呈する口縁部片である。258は口唇端部に凹点を施す。260は器壁の薄い小型の鉢形になると推測されるものである。261～266は厚手の器壁の波状口縁を呈する深鉢である。4か所程度の波頂部が想定される。264は口縁部に歪みがみられるため、波状口縁になると想定し、ここに掲載した。267～269は補修孔をもつ胴部片である。いずれも外面からの穿孔が行われ

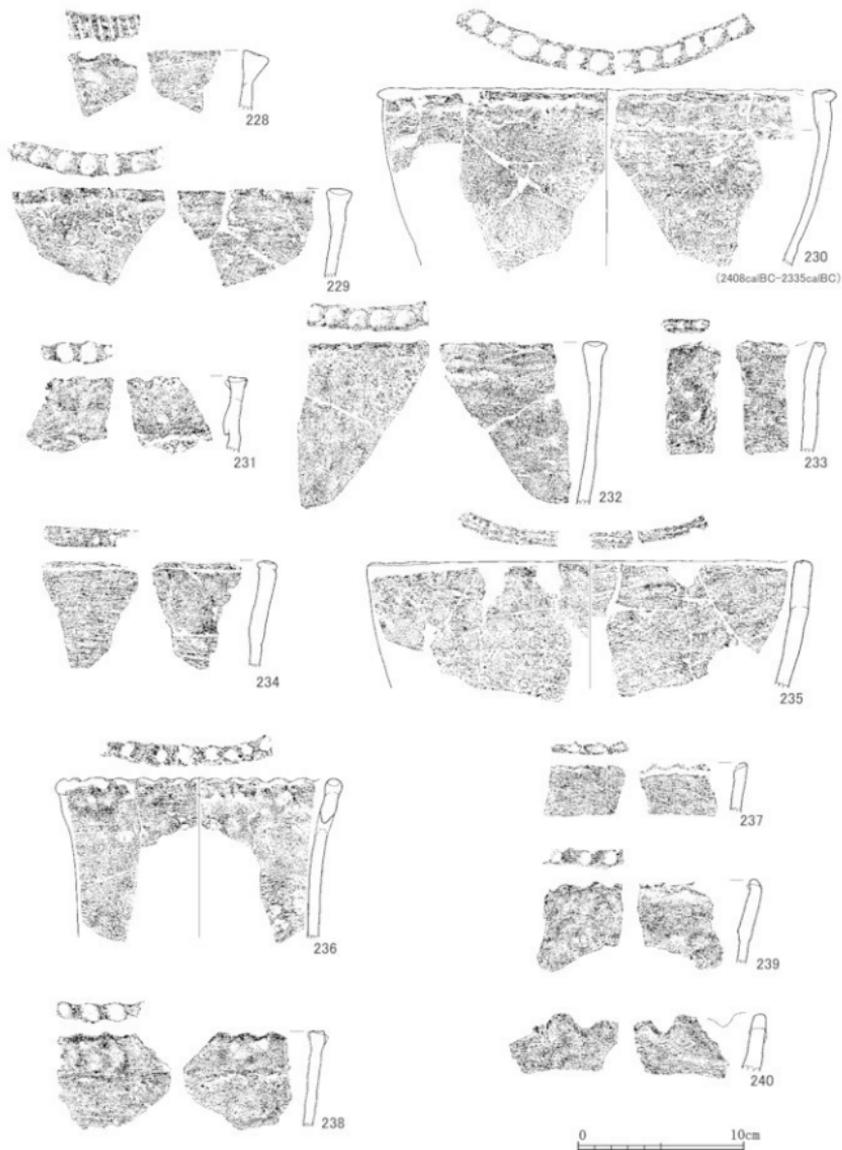
る。

VII類

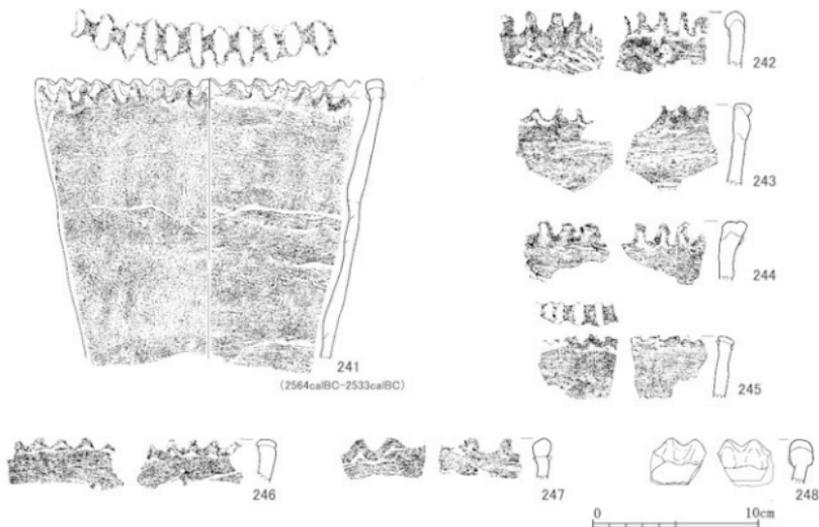
総点数19点出土し、17点を図化した。270～284、286は直口する口縁部片である。270は口縁部をわずかに肥厚させる。肥厚部に縦位の弧状、逆S字状、S字状の浅い凹線が施される。口唇部には棒状工具による刻みが施される。271は口縁部内側に粘土を貼り付け肥厚させる。肥厚部には円形の浅い凹線、その両側にシンメトリーに弧状の凹線が描かれると思われる。272は口縁部に浅い弧状の凹線が施される。273は口縁部をわずかに肥厚させ、肥厚部に縦位のやや太めの短沈線文を連続して施す。口唇部は棒状工具により刻みが施される。274は口唇部直下に接合痕が残りに、口唇は平坦に仕上げられる。口縁部には273同様、短沈線が連続して施される。276は口縁部が平坦で口縁肥厚部は認められない。口縁部に凹部に筋条痕が残る沈線が基本縦位に施される。277は口唇



第40図 VI類土器(17)



第41図 VI類土器(18)



第42図 VI類土器(19)

部は平坦で口縁外面は凹線か指頭圧痕が不明であるが斜位の凹みが観察できる。内面には貝殻条痕が残される。278, 279 は口唇部を欠く口縁部片で、278 は刻みの深いやや太形の沈線が縦位に施される。279 は口縁部をわずかに肥厚させ底にやや細めの凹線が縦位に施される。280 は口唇部が平坦で口縁部はわずかに肥厚する。肥厚部には斜位の沈線が組み合わさり、綾杉状に施されると思われる。281 は平坦な口唇部に棒状工具による刻みと、口唇に沿う短沈線が施される。外面には斜位の沈線が施され厚部に斜位の沈線を巡らす。285 は口縁端部で外反する器形で口唇部は平坦に仕上げられる。口縁やや下に粘土紐の貼り付けにより肥厚帯を作出し、そこに凹点状の刻みを施す。口縁外面には横位から斜位の沈線が施される。282 は口唇端部が突帯状に肥厚し、口唇には棒状工具による刻みが施される。口唇端部の肥厚部から下に縦位の短沈線が巡る。283 は平坦な口縁に棒状工具による刻みを施し、その下に斜位のための沈線文が施される。284 は口唇部を欠く口縁部片で口縁を肥厚させる。286 は、口縁部をわずかに肥厚させる。平坦な口縁に指頭による刻みを施し、外面には棒状工具による斜位の沈線、肥厚帯端部には同じく刻みが施される。

底部

総数 292 点出土した内 71 点を図化した。327, 330 ~ 356 は底面に組織痕が残る資料である。287 ~ 306 は底

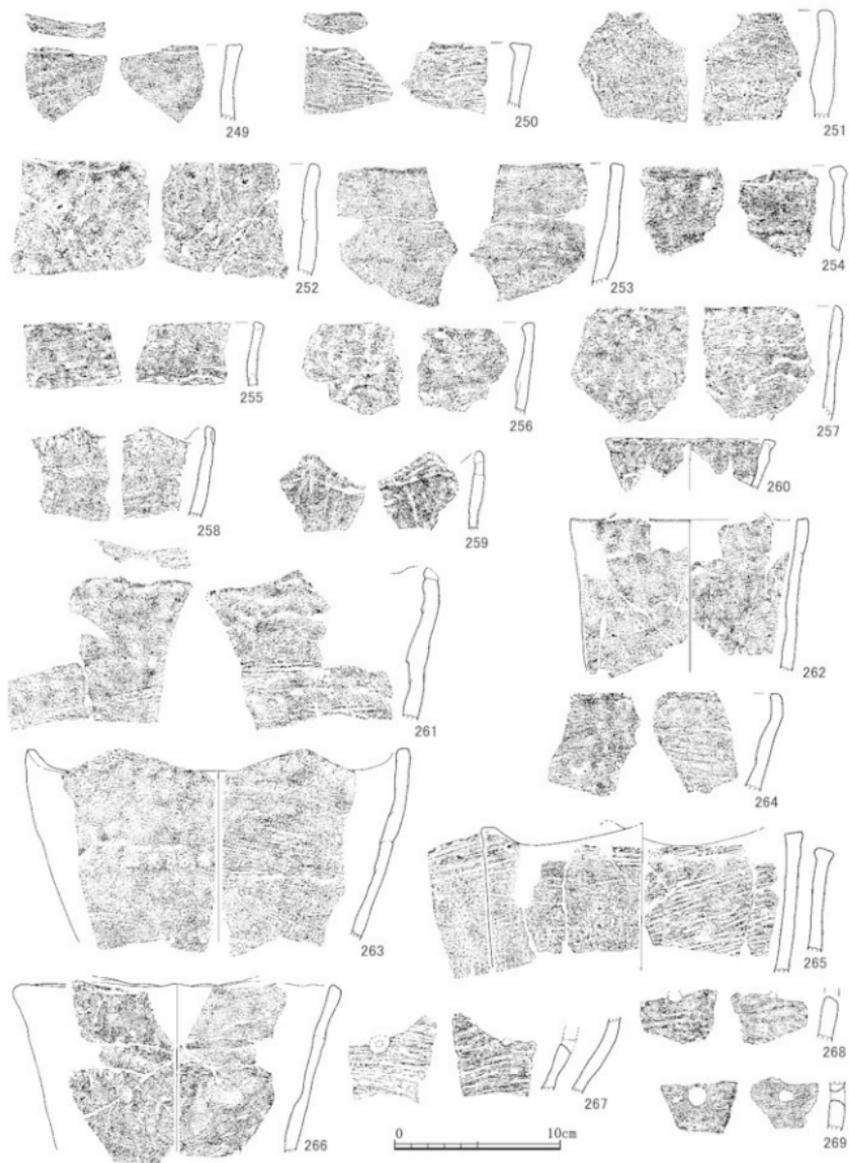
部底盤があまり張らず、そのまま胴部下位の張り出しへと移行する器形である。288 は内面に種子圧痕が残り、分析の結果豆科植物の種子と判明した。307 ~ 318 は底部底盤付近が外側に張り出し踏ん張るような断面形態を呈す。319 ~ 329 は外面に沈線や、貝殻条痕を残す資料である。319 ~ 321 は底部まで縦位の沈線が及んでいる。いずれも小型の鉢形土器と推定される。322 ~ 329 は内外面のナデ調整が不十分で貝殻条痕が残存するものである。

327, 330 ~ 341 は底部底盤があまり張らずそのまま胴部へと張り出していく器形で底面に組織痕を有する資料である。327, 330 ~ 333, 335, 337, 339, 340 は模様編みの網代底で、334, 336, 341 はスタンプが不明瞭で判別できなかった。338 は一部しか残存しないため、断定はできないが、綾編みの網代底と思われる。342 は底部端部に刻みが施され、340 と類似することからここに掲載した。

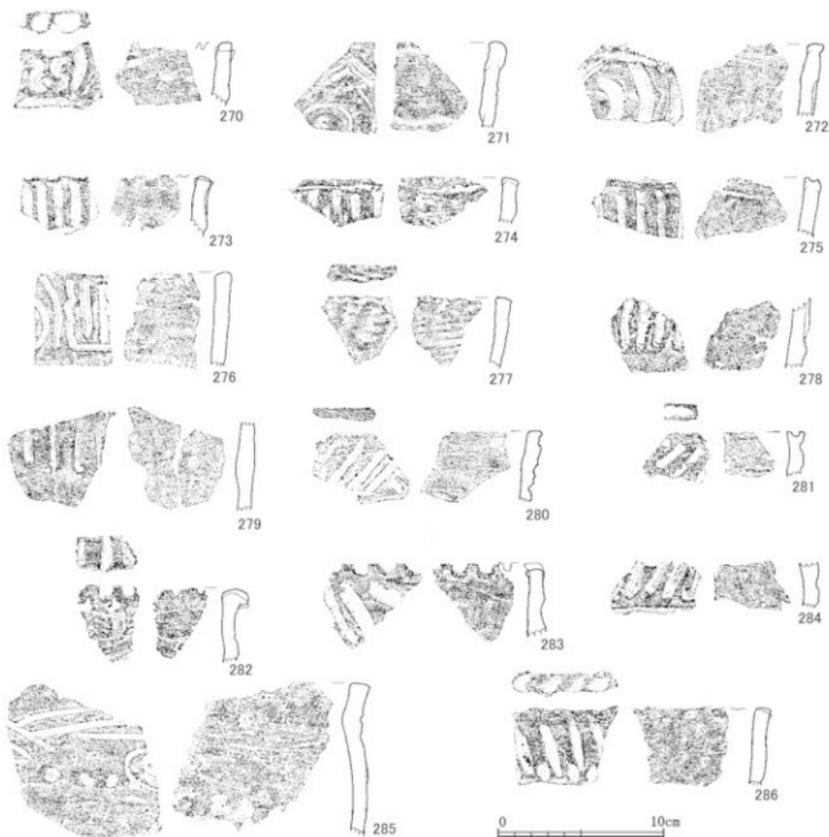
343 ~ 356 は底部底盤付近が張り出し踏ん張るような断面形態を呈し、底面に組織痕を残す資料である。

343 ~ 346 は模様編みの網代底、350 は大形の木葉痕が残される。その他については何らかの組織痕が残存すると思われるが、ナデ調整等で消失しており、肉眼観察での判別はできなかった。

357 は底径が 4 cm 程度と小さく上げ底を呈する。



第43図 VI類土器(20)



第44図 VII類土器

円盤状土製品

総数7点出土し7点を図化した。358～364は土器片周縁部を打ち欠き円盤状に仕上げた製品である。358はVI類土器の再生品で器面に沈線文、竹管状工具先端による刺突文が確認できる。359はIV類土器口縁部の再生品と考えられる。粘土紐を渦巻き状に貼り付け、そこに棒状工具による連続刺突が施される。360～364は底部片の再生品である。いずれも組織痕を伴う底部片と思われるが、362が網代底である以外は判然としない。

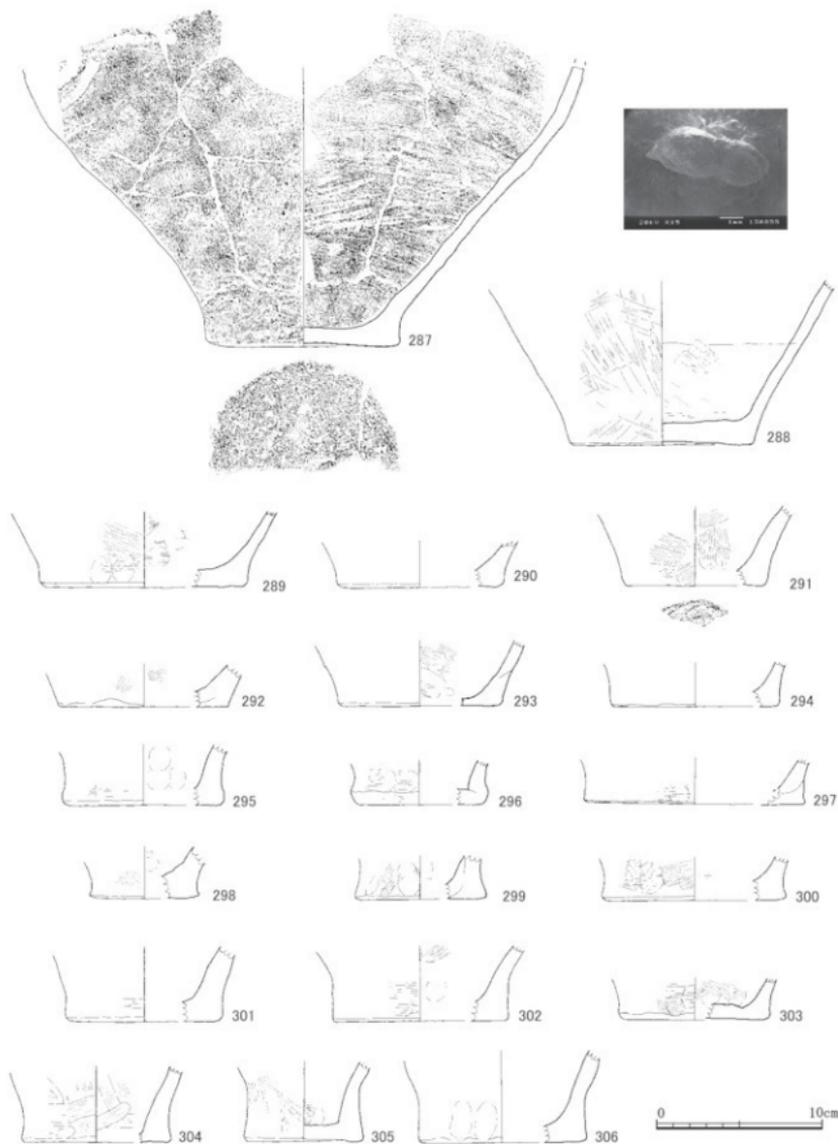
VII類

総点数1点を出土し1点を図化した。365は胴部片で

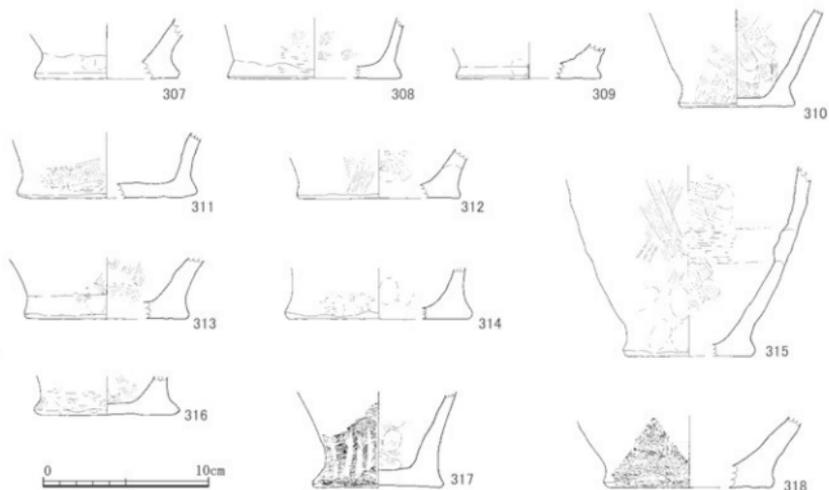
胴部でくの字に屈曲し、屈曲部上位は内傾し、外反ししながら立ち上がる器形を呈する外面は丁寧なナデ調整を行い、一部にミガキ痕も観察できる。内面も丁寧なナデ調整が行われるがミガキは行われない。

IX類

IX類は2点のみの出土であった。366は口唇部がやや長めの玉縁状で器壁は薄く鉢形を呈すると思われる口縁部片である。内・外面ともに丁寧なナデ調整が行われ、内面には横位のミガキ痕が残される。367は精製の浅鉢の口縁で、内・外面ともに入念なミガキ調整が施される。口縁部は大きく外反し、口唇部直下を沈線で締め、口唇



第45图 底部(1)



第46図 底部(2)

は玉縁状となる。

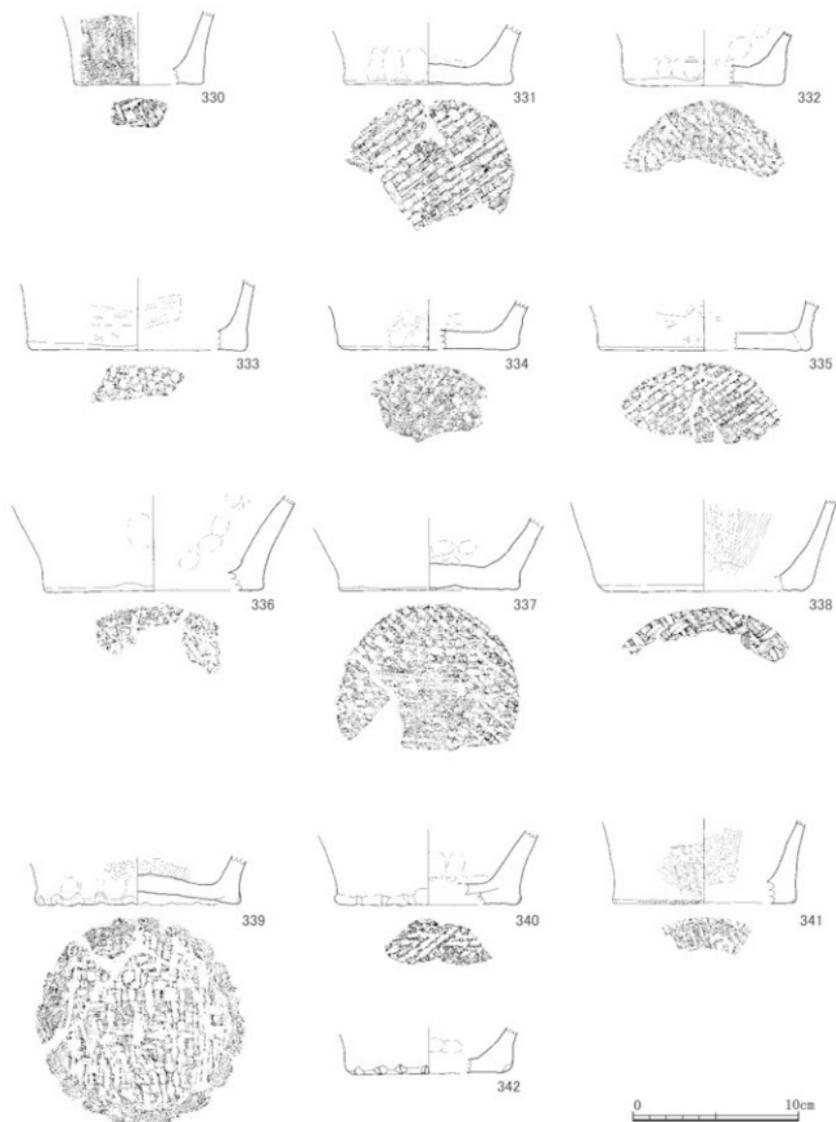
X類

総点数26点出土し、内6点を図化した。368～370は外傾する口縁で、外面は荒いナデ調整を施す。368は内面を入念なミガキ調整で仕上げる。369は外面と比較すると丁寧なナデ調整が行われる。370内面にはわずかにミガキ痕跡が確認できる。371～373は組織痕を伴う浅鉢土器で、371は内湾気味に緩やかに立ち上がる胴部から口縁部でくの字に屈曲し直口する。口縁端部がわずかに肥厚する。屈曲下位外面には網代底平編みの痕跡が明瞭に残され、内面はミガキ調整により仕上げている。372は371同様の圧痕をもつ胴部片で内面は入念なミガ

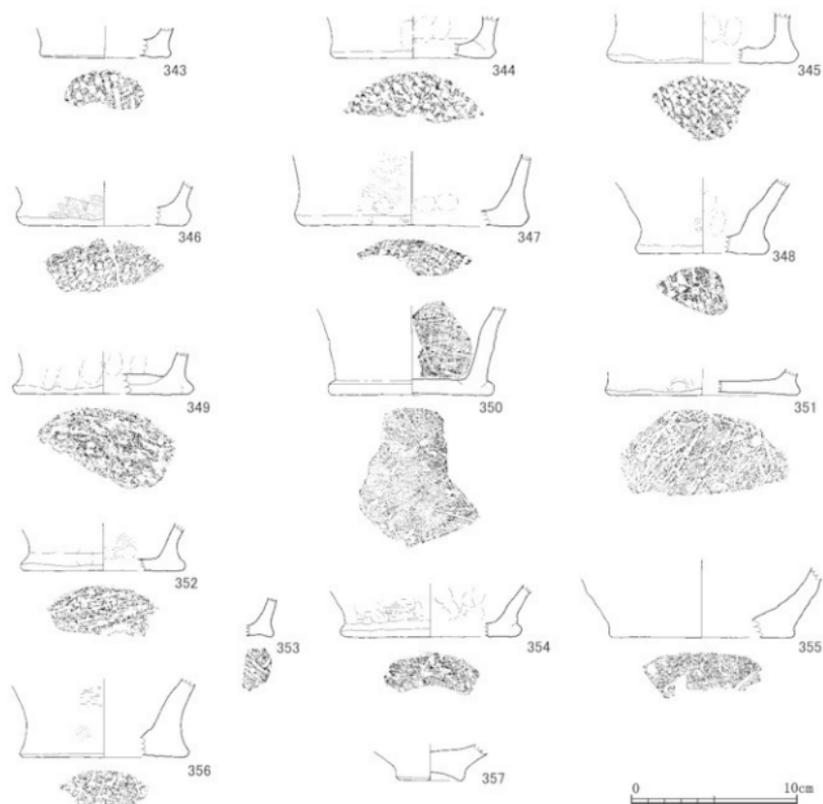
キ調整がほどこされる。373は外面にもじり網み圧痕が残る胴部片である。

XI類

2点のみの出土である。374、375は胴部下半と思われ、外傾し、わずかに外反しながら立ち上がる。器壁は薄く内・外面ともに入念なナデ調整が施される。



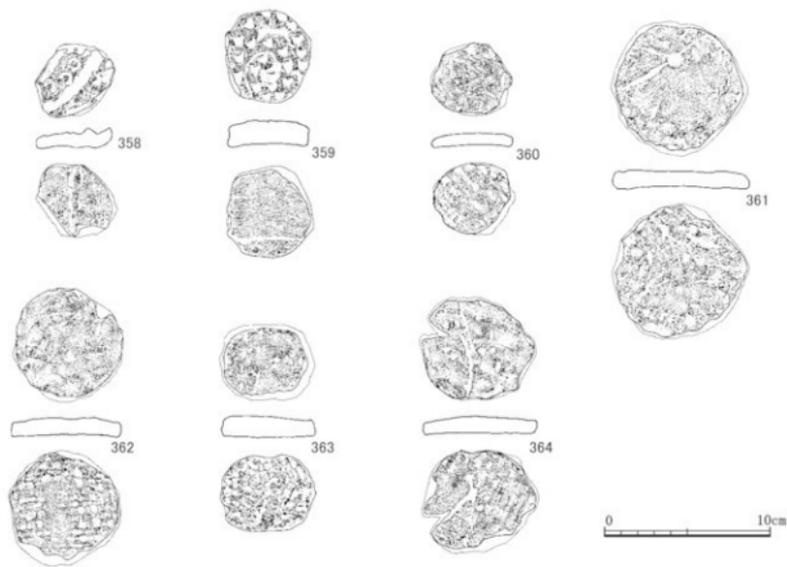
第48图 底部(4)



第49図 底部(5)

表4 縄文時代遺構内石器観察表

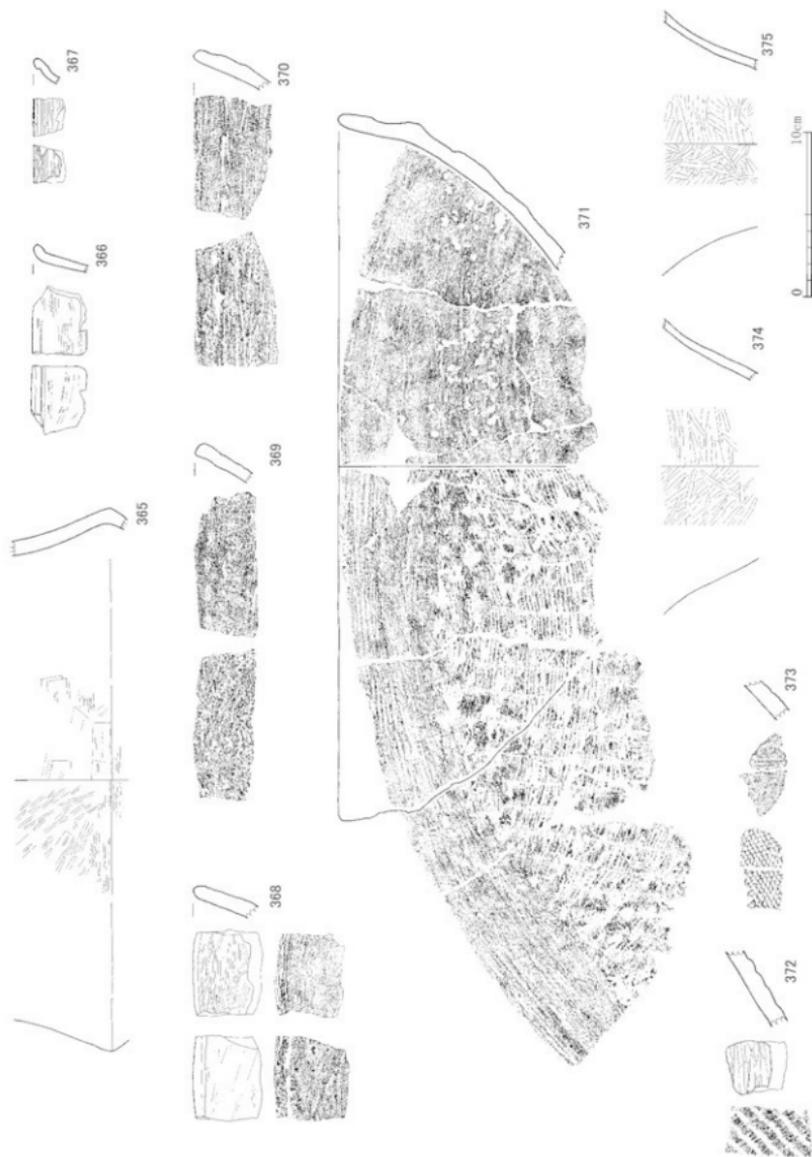
検出 番号	掲載 番号	取上 番号	グリッド	層位	器種	石材	計測値				備考
							長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	
17	33	土坑3-2	B-34	V層上面検出	磨・鍛石	砂岩	123.0	108.5	49.0	1065.00	-
	34	土坑3-4	B-34	V層上面検出	輝石製品	輝石	254.0	216.5	65.5	1665.00	-
18	35	土坑3-3	B-34	V層上面検出	石皿	凝灰岩	236.0	289.0	108.0	10400.00	-



第50図 円盤状土製品

表5 縄文時代土器観察表(1)

器種	器名	フナゴロ	器位	器種	器位	口径・直径	器高	文様・図案(外・内)		色澤		胎土	その他	備考		
								文様	図案	外面	内面					
14	358	1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05	
	359	1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05	
	360	1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05	
	361	1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05	
	362	1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05	
	363	1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05	
	364	1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05	
	15	358	1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05
		359	1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05
		360	1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05
		361	1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05
		362	1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05
363		1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05	
364		1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05	
358		1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05	
359		1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05	
360		1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05	
361		1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05	
362		1.5-2.5	18	300	100	100-120	100	縄文時代前期後半	外: 土器文様 内: 土器文様	2.000	2.000	15	15	赤褐色	0.05	



第51図 VIII, IX, X, XI類土器

表7 縄文時代土器観察表(3)

調査 番号	発見 位置	グリッド	層位	層種	断面	形状	口径・直径	高さ	文様・図案(内・外)		色相		胎土		備考				
									文様	図案	外面	内面	石質	長径		その他			
34	16	500	4	27	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	17	500	4	28	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	18	500	4	29	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	19	500	4	30	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	20	500	4	31	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	21	500	4	32	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	22	500	4	33	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	23	500	4	34	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	24	500	4	35	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	25	500	4	36	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35	16	500	4	37	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	17	500	4	38	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	18	500	4	39	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	19	500	4	40	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	20	500	4	41	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	21	500	4	42	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	22	500	4	43	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	23	500	4	44	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	24	500	4	45	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	25	500	4	46	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
36	16	500	4	47	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	17	500	4	48	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	18	500	4	49	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	19	500	4	50	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	20	500	4	51	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	21	500	4	52	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	22	500	4	53	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	23	500	4	54	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	24	500	4	55	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	25	500	4	56	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
37	16	500	4	57	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	17	500	4	58	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	18	500	4	59	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	19	500	4	60	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	20	500	4	61	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	21	500	4	62	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	22	500	4	63	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	23	500	4	64	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	24	500	4	65	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	25	500	4	66	0.1	500	130	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—		

表8 縄文時代土器観察表(4)

観測番号	器名	フナグ	器種	形状	口径・高さ	容量	文様・模様(内)		色調		期表		備考
							文様	模様	内面	外面	行高	底径	
90	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
91	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
92	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
93	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
94	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
95	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
96	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
97	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
98	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
99	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
100	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
101	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
102	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
103	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
104	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
105	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
106	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
107	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
108	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
109	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
110	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
111	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
112	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
113	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
114	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
115	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
116	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
117	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
118	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
119	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
120	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
121	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
122	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
123	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
124	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
125	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
126	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
127	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
128	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
129	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
130	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
131	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
132	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
133	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
134	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
135	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
136	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
137	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
138	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
139	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
140	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
141	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
142	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
143	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
144	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
145	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
146	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
147	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
148	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
149	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
150	150	150	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90

表11 縄文時代土器観察表(7)

器名	器種	器高	口径	底径	器容	口径・底径	器底	文様・装飾(色・肉)		色相		胎土		備考	
								文様	装飾	内面	外面	右肩(裏)	左肩(表)		
365	365	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	365	365
366	366	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	366	366
367	367	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	367	367
368	368	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	368	368
369	369	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	369	369
370	370	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	370	370
371	371	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	371	371
372	372	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	372	372
373	373	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	373	373
374	374	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	374	374
375	375	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	375	375
376	376	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	376	376
377	377	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	377	377
378	378	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	378	378
379	379	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	379	379
380	380	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	380	380
381	381	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	381	381
382	382	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	382	382
383	383	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	383	383
384	384	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	384	384
385	385	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	385	385
386	386	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	386	386
387	387	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	387	387
388	388	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	388	388
389	389	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	389	389
390	390	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	390	390
391	391	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	391	391
392	392	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	392	392
393	393	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	393	393
394	394	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	394	394
395	395	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	395	395
396	396	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	396	396
397	397	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	397	397
398	398	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	398	398
399	399	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	399	399
400	400	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	400	400
401	401	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	401	401
402	402	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	402	402
403	403	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	403	403
404	404	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	404	404
405	405	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	405	405
406	406	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	406	406
407	407	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	407	407
408	408	3.0	10.0	3.0	300	10.0	3.0	-	-	黒	黒	○	○	408	408

石器

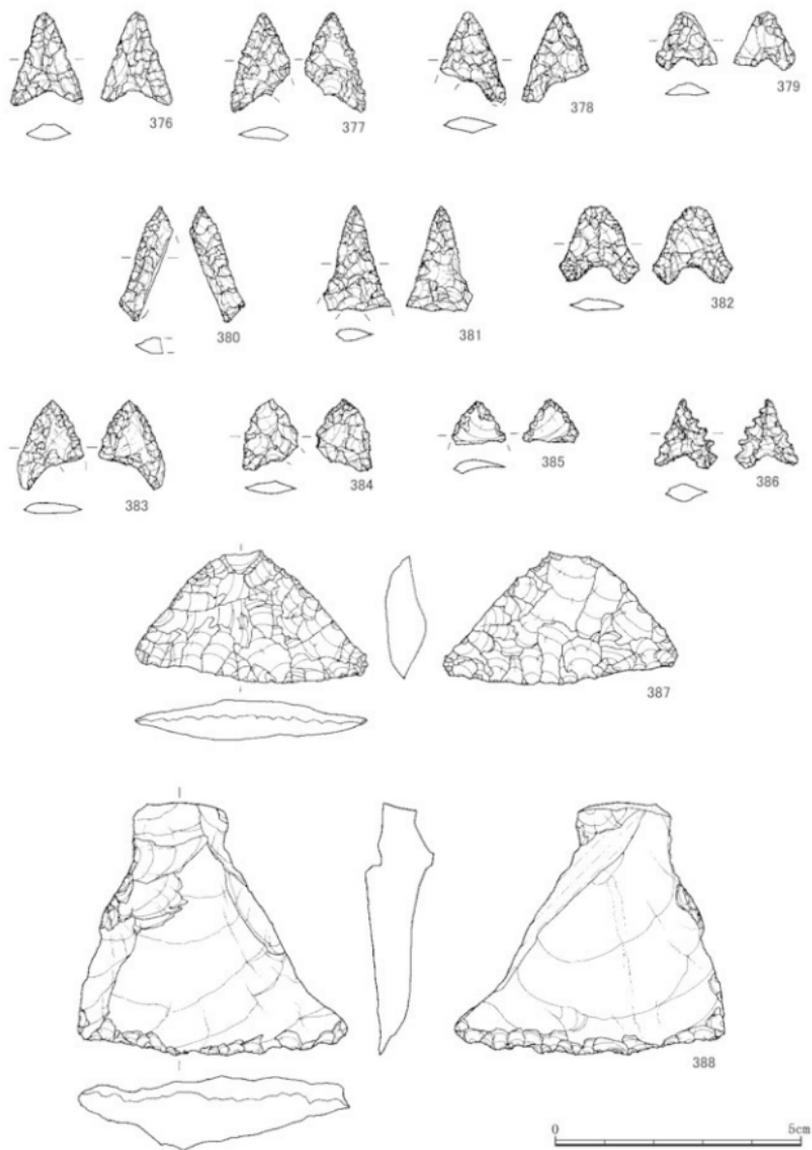
376 ~ 386 は石鏃である。376 は安山岩を用いた二等辺三角形の石鏃で、袈刈が浅い。377 は黒色を基調とするガラス光沢の強い半透明の黒曜石で、主要剥離面が残る比較的袈刈の浅い石鏃である。378 は赤みがかかった灰色のチャートで、扁平で袈刈が深い。379 は灰白色の珪質の強い砂岩で、正三角形のものである。380 は灰色のチャートで節理で破断したものである。381 は白色を基調に黒色の斑文が入るもので、先端部から基部にかけての部分がかぶらむ、袈刈の深い石鏃と思われる。382 は白色のチャートで、扁平で先端が鈍い。383 は灰色の節理の多いチャートで、扁平で袈刈が深い。384 は安山岩で袈刈の浅いものである。385 は黒曜石の石鏃の先端部で未製品の可能性がある。386 は、黒色を基調とするガラス光沢の強い半透明の黒曜石で、鋸歯状の刃部をもつ。

387, 388 は石匙である。387 は白色のチャートで、つまみ部を欠損している。388 は灰白色の節理の多いチャートを用い、節理でわずかに破断したが、その節理面をそのまま再利用したものと考えられる。389, 390 は節理の多い灰色チャートの使用痕剥片である。391 は黒色を基調とする半透明で不純物が多い黒曜石の二次加工剥片である。392, 393 はガラス光沢のない漆黒の黒曜石の剥片である。394 はガラス光沢のある不透明な若干の不純物を含む黒曜石の石核である。打面転移を繰り返し

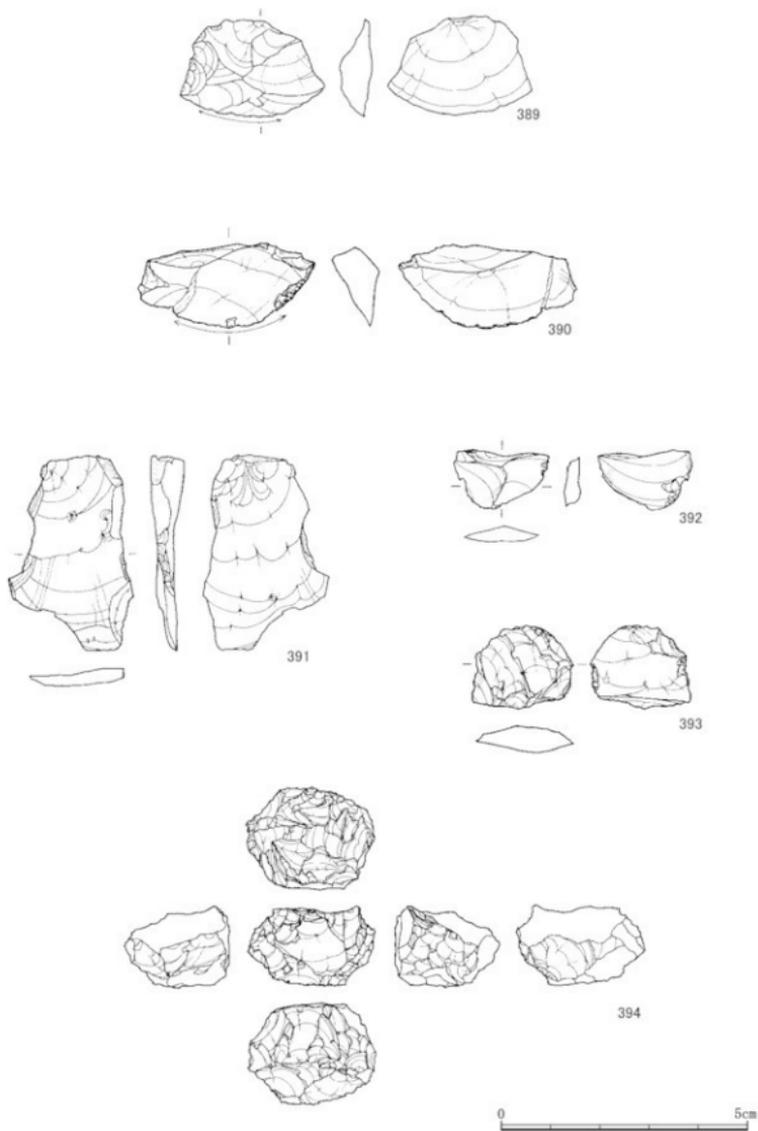
ながら、小剥片を繰り返し剥出している。

395 は硬質頁岩の磨製石斧、396, 397 は同じく硬質頁岩の磨製石斧の基部にあたる。398 は頁岩のノミ形の石斧で、剥離により整形後に研磨し、刃部を研ぎ出している。399 は凝灰岩の磨・敲石である。400 は砂岩の磨・敲石であり、片面が繰り返しの強い打撃によるものか、貝殻状の剥離が見られる。401~403 は凝灰岩を用いており、401 は、周縁部分は敲打され、平坦面は磨られている。402 は平坦面が磨られ、403 は先端部に敲打痕が顕著である。

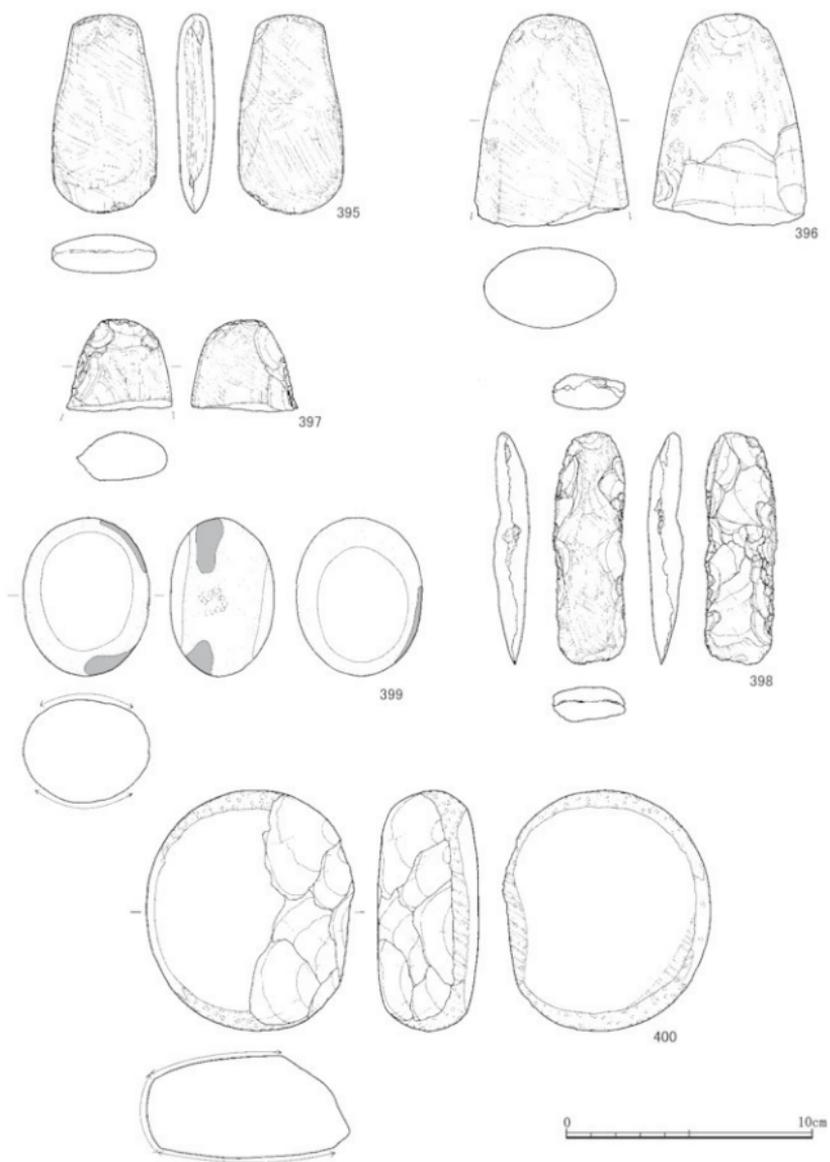
404 ~ 407 の石皿はすべて凝灰岩のものである。404 は石皿の半欠品で、中央部に凹みがある。405 は表裏面に凹みがある石皿の破片である。406 は片面に顕著な凹面の平滑面を有す。407は大きな敲打痕を中央部にもつ。408 は軽石の面取りされたもので、用途は不明である。



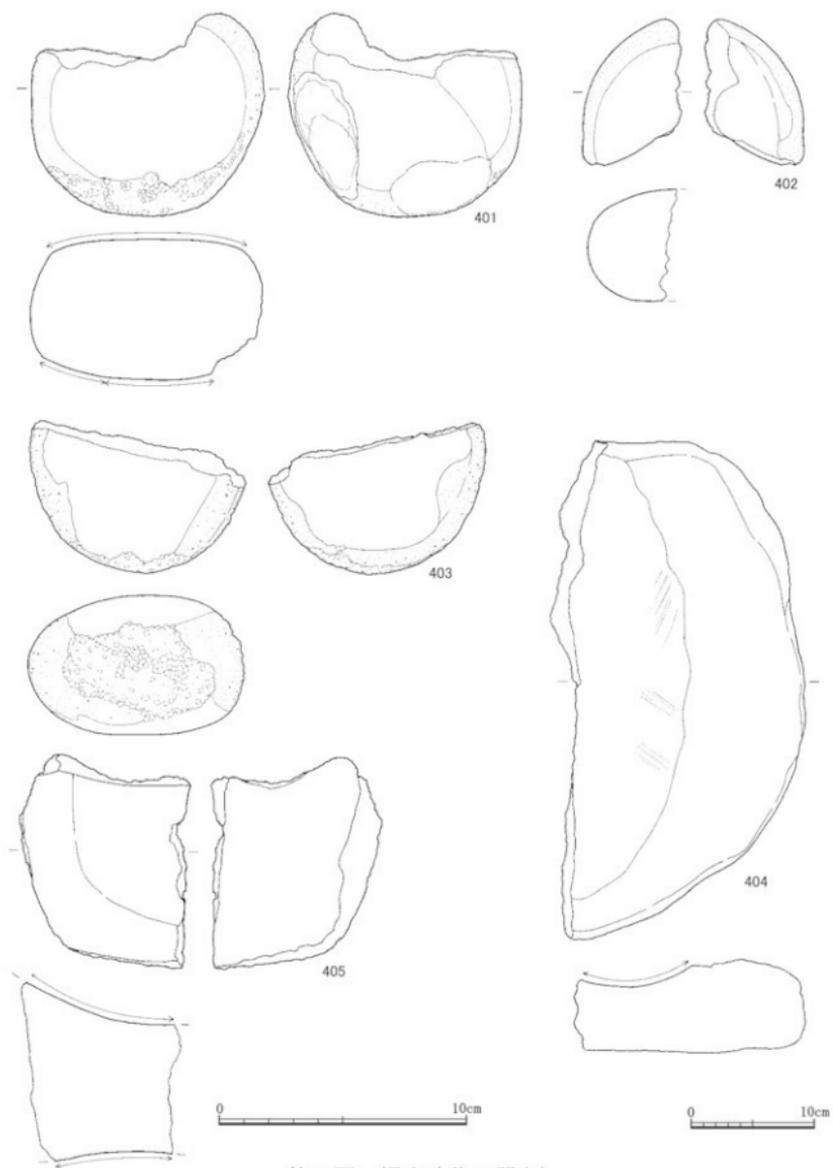
第52図 縄文時代石器(1)



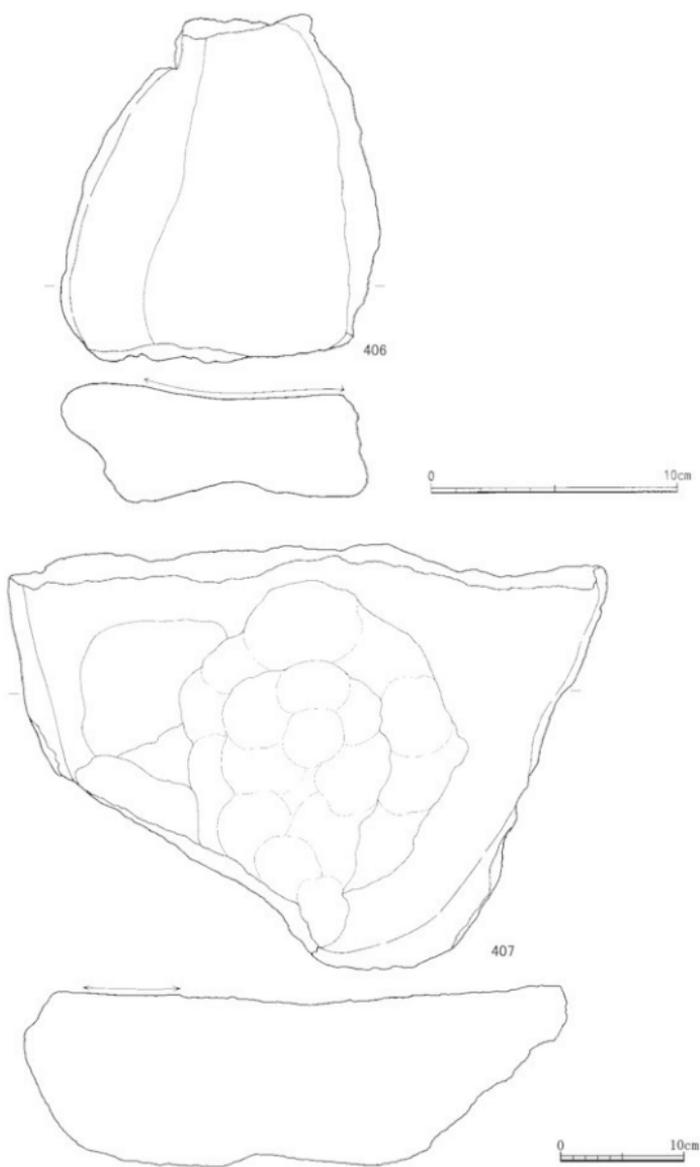
第53図 縄文時代石器(2)



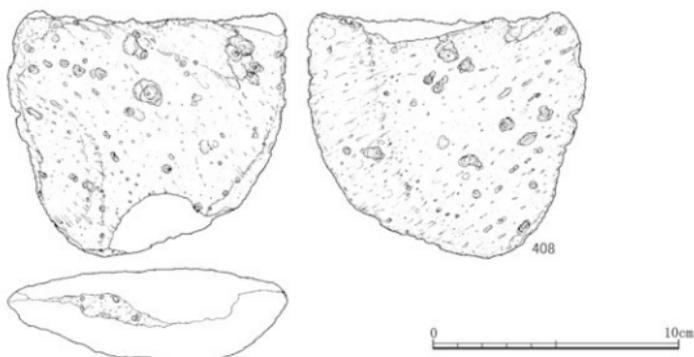
第54図 縄文時代石器(3)



第55図 縄文時代石器(4)



第56図 縄文時代石器(5)



第57図 縄文時代石器(6)

表12 縄文時代石器観察表

標本 番号	掲載 番号	取上 番号	グリッド	層位	器種	石材	計測値				備考
							長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	
52	376	1718	B-27	IVb	石鏃	安山岩	19.5	15.0	3.0	0.72	-
	377	SH3-29	B-30	-	石鏃	黒曜石	20.5	12.5	3.0	0.53	-
	378	2811	B-27	IVb	石鏃	チャート	18.5	13.5	3.5	0.52	-
	379	2006	B-33	Va	石鏃	チャート	12.0	12.5	2.5	0.22	-
	380	1729	B-27	IVb	石鏃	チャート	24.0	11.5	3.0	0.42	-
	381	2818	B-27	IVb	石鏃	チャート	22.0	14.0	3.0	0.65	-
	382	1691	B-28	IVb	石鏃	チャート	16.0	16.5	2.5	0.59	-
	383	1618	B-28	IVb	石鏃	チャート	18.5	14.0	2.5	0.46	-
	384	106	C-25	IVa	石鏃	安山岩	14.5	11.5	2.5	0.36	-
	385	1547	B-33	IVb	石鏃	黒曜石	9.0	11.5	3.0	0.20	-
	386	205	A-33	III	石鏃	黒曜石	14.5	13.0	3.5	0.35	-
	387	828	B-34	IVb	石鏃	チャート	(25.5)	47.5	8.5	8.47	-
	388	2479	B-27	IVa	石鏃	チャート	52.0	55.5	15.0	27.24	-
	389	789	B-27	IVa	使用痕剥片	チャート	20.0	29.5	6.5	3.24	-
53	390	78	B-28	IVa	使用痕剥片	チャート	17.5	36.0	10.0	4.54	-
	391	2309	B-32	IVb	二次加工剥片	黒曜石	40.0	26.0	7.0	4.34	-
	392	1496	B-33	IVb	剥片	黒曜石	12.5	19.5	4.0	0.78	-
	393	3058	B-28	IVb	剥片	黒曜石	17.5	20.5	6.0	2.27	-
	394	3057	B-28	IVb	石核	黒曜石	16.5	26.0	22.0	9.37	-
	395	2513	B-27	IVa	磨製石斧	硬質頁岩	81.5	43.0	16.0	84.65	-
54	396	369	B-26	IVa	磨製石斧	硬質頁岩	86.5	63.0	33.0	240.00	基部
	397	124	B-26	IVa	磨製石斧	硬質頁岩	38.0	43.5	20.5	44.02	基部
	398	1082	B-26	IVa	ノミ形石斧	頁岩	95.0	29.5	14.5	48.96	-
	399	2295	A-32	IVb	磨・敲石	凝灰岩	65.0	51.5	42.5	209.00	-
	400	983	B-26	IVa	磨・敲石	砂岩	98.0	85.0	41.5	515.00	-
	401	2093	B-25	Va	磨・敲石	凝灰岩	83.5	95.0	57.5	590.00	-
55	402	989	B-26	IVa	磨・敲石	凝灰岩	60.0	41.0	46.0	137.20	-
	403	2234	A-31	IVa	磨・敲石	凝灰岩	63.0	88.5	57.5	355.00	-
	404	1000	C-26	IVa	石皿	凝灰岩	408.0	197.0	77.0	8660.00	-
	405	2207	A-31	IVa	石皿	凝灰岩	87.5	69.5	72.5	585.00	-
56	406	226	B-34	IVa	石皿	凝灰岩	142.5	130.5	50.5	1065.00	-
	407	367	B-26	IVa	石皿	凝灰岩	348.0	487.0	150.0	28800.00	-
57	408	1010	B-26	IVa	軽石製品	軽石	101.5	113.5	38.5	95.90	-

3 古墳時代の調査

古墳時代の遺構及び、遺物はIV層上面で検出された。III層は黒色土で、ボラ抜きや耕作等で一部削平されている箇所もあった。

I層の表土、II層の文明ボラは重機で除去した後、III層上面から掘り下げを開始した。遺構は竪穴住居跡が3基とその中から成川式土器と磨石や石皿などが出土した。

竪穴住居跡1号

C・D-22区においてIVb層上面で住居2号と並んで検出された。西側部分は、調査区外であったため未調査である。検出時のプランは、一辺が4m、調査区外に広がる部分を含めると、住居の形状は長方形を呈すると考えられる。

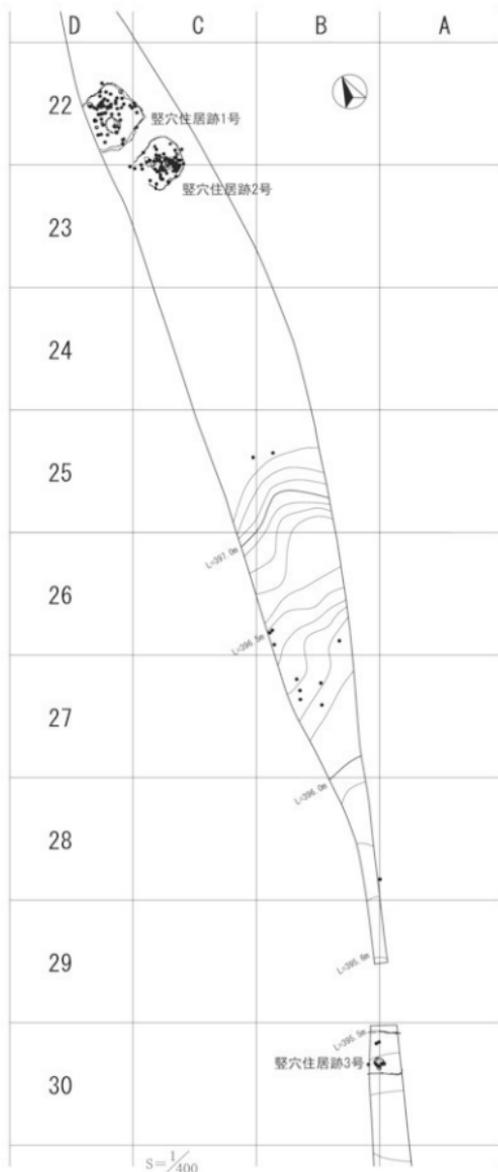
調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。中央部分は深さ25cm程度であった。床面には張り床と考えられる硬化面が検出され、それを除去した後、柱穴と考えられるピットが7基検出された。検出されたピットのうち、P4-P6は深く、いずれも50cm程度であった。住居のほぼ中央部分に炉跡と考えられる掘り込みと、焼土及び炭化物が広がっている部分が確認された。掘り込みの深さは、床面から15cm程度であった。埋土からは土器片54点、磨石と考えられる石器3点の計57点が出土した。

その内、古墳時代のものと判断される土器片のうち、壺2点、甕6点の計8点、石器3点を図化した。

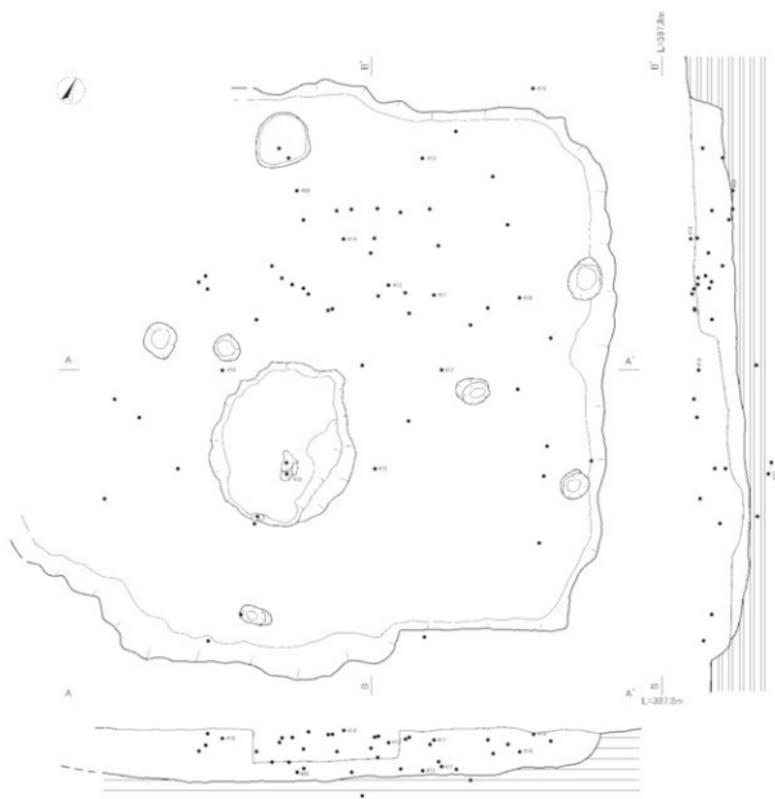
409は壺の底部である。底部から胴部に向かって緩やかに開く器形である。外面は横方向のナゲ調整が施されているが、表面は凹凸が見られる。

410は底部の欠損した甕で炉の掘り込み内から出土した。外面の頸部にススの付着が見られることから煮炊きに使用した可能性が考えられる。

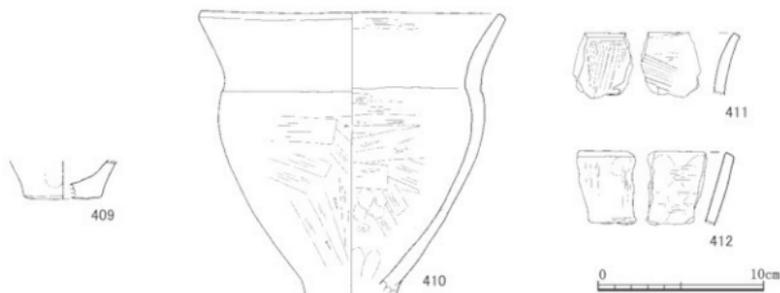
器形は底部から胴部にかけて開き、



第58図 古墳時代遺構配置図及び遺物出土状況



第60図 古墳時代堅穴住居跡1号遺物出土状況



第61図 古墳時代堅穴住居跡1号内出土遺物(1)

頸部が窄まり、口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。

調整の特徴として、口縁部内面と胴部内面との境界付近は、ナデ調整により稜が形成されている。これは中津野式土器の一つの指標でもある調整方法である。外面に着目してみると、口縁部外面と胴部の境界付近はヘラナデ調整が施され、稜線が不明瞭である。また、胴部下半はヘラ状工具により調整が施されているが、粗雑でケズリ痕が残る上に調整を施す際、胎土に含まれていた小石が移動した時についた痕跡が明瞭に残る。

411, 412 は甕の口縁部で、いずれも口唇部には、ナ

デ調整により平坦面が形成される。411 は口縁部がわずかに外反する器形である。口唇部の平坦面に浅い刺突痕と浅い溝が観察される。

412 は口縁部が直行する器形である。外面にはススが附着している。413～416の4点は甕で、その内 413と414は胴部である。

413 は器壁の厚みが0.8～1cmとばらつきが見られる。外面にはわずかにススが附着する。内面外面ともハケメ調整痕が残る。414 は幅1cm程の突帯が付く。

415, 416の2点は甕の脚部である。415は外面に調整の



第62図 古墳時代堅穴住居跡1号内出土遺物(2)

際に胎土中の小石の移動によってついた線が明瞭に残る。底部があまり広がらない。416は、上部の厚みが11mmと厚い。底部から脚部にかけてわずかに開く。

417は安山岩製の平型の石皿である。半分が欠損し、両面の中央に擦り面がある。

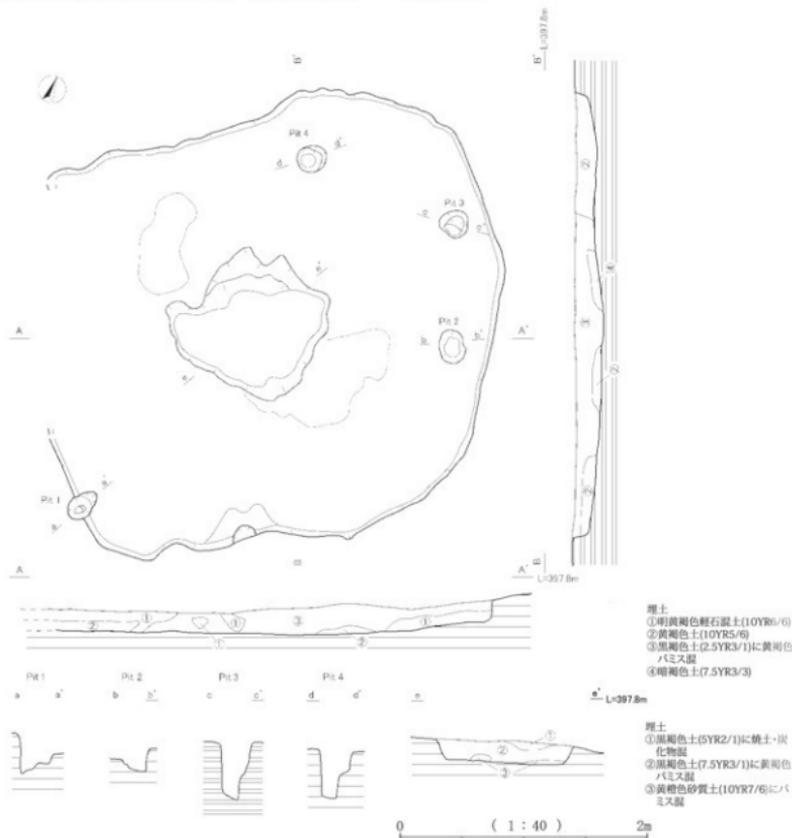
418,419はいずれも安山岩製の磨石で片面に擦り面がある。側面には敲打痕が残る。

竪穴住居跡2号

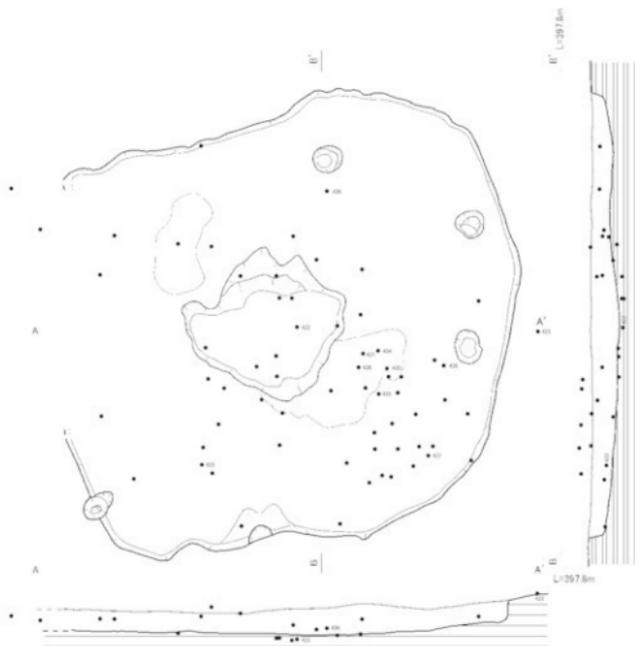
C-22・23区において、竪穴住居跡1号と並んでIVb層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.3m、短辺3.2mのほぼ方形を呈する。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げた。中央部分は深さ

35cm程度である。中央部分に炉跡と考えられる掘り込みと、焼土及び炭化物が広がっている部分が確認された。掘り込みの深さは床面から12cm程度であった。炉をはさんで、東西両方向に炭化物が広がっており、その東側部分には、浅い掘り込みが確認された。床面には硬化面が検出され、それを除去したところ、柱穴と考えられるピットが4基検出された。そのうち、P3とP4は深く掘り込まれ、いずれも45cm程であった。

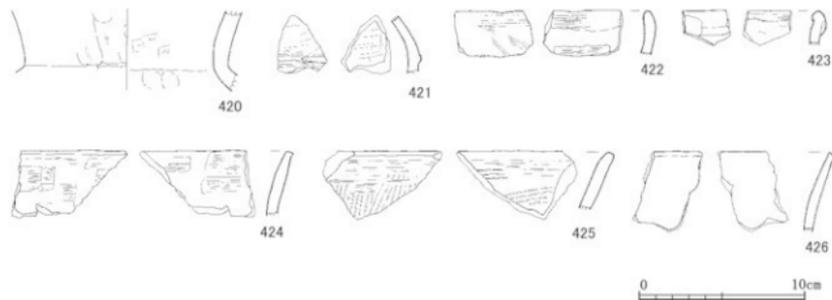
住居内から、土器片110点、石器1点、計111点の遺物が出土した。その内、突帯を持つ成川式土器片が床着で出土したため、住居は古墳時代のもものと判断した。古墳時代の土器片の内、壺2点、鉢1点、甕14点の計17点を図化した。



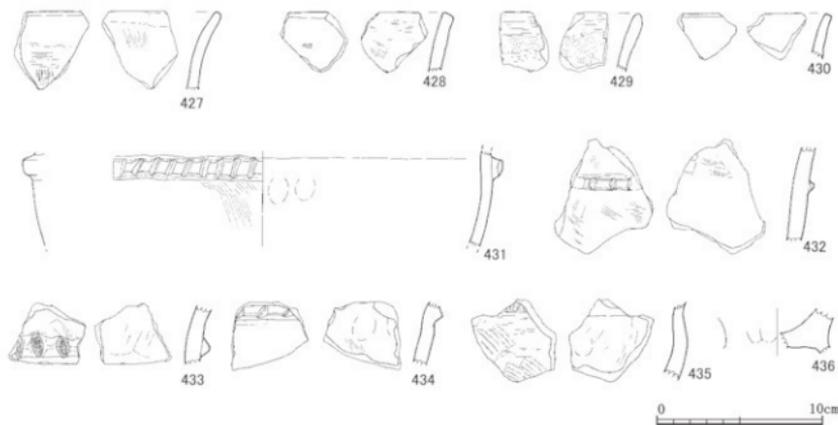
第63図 古墳時代竪穴住居跡2号検出状況



第64図 古墳時代堅穴住居跡2号遺物出土状況



第65図 古墳時代堅穴住居跡2号内出土遺物(1)



第266図 古墳時代堅穴住居跡2号内出土遺物(2)

420, 421 は、壺の一部であり、420 は頸部である。頸部から口縁部に向かって緩やかに開く。頸部付近は器壁が0.8cmと薄いが、口縁部に向かって厚くなる。421 は胴部で胴部から口縁部にかけて内湾する器型である。幅の細い突帯が付く。

422, 423 は鉢の口縁部である。422 は口縁部付近がわずかに内湾する器形である。外面の稜線は不明瞭である。口唇部は丸みを帯びる。423 は、口縁部外面に突帯が付く。424 ~ 430 は甕の口縁部である。424 は胴部から口縁部にかけてわずかに外反する。口唇部には、平坦面が作られる。425 は胴部から口縁部にかけて直線的に開く。外面は胴部から口縁部にかけて縦方向のハケメ調整が施されるが、口縁部付近はその上から横方向にナデられる。

426 は胴部から口縁部にわずかに開く器形である。427 は胴部からやや直線的に立ち上がり、口縁部にかけてわずかに外反する。

428 は直線的に立ち上がる器形で、口唇部には平坦面が作られる。429 は胴部から緩やかに立ち上がり、口縁部付近がわずかに直立する。外面に不明瞭ながら稜を形成する。430 は口縁部がわずかに外反し、口唇部には平坦面が作られる。

431 ~ 436 は甕の胴部である。431 は脚部から胴部に向かって開き、突帯付近から口縁部に向かってわずかに内湾する。突帯の幅は1.3cm程である。外面の一部に被熱痕が残る。

432 は幅0.5cm程度の細めの突帯が付く。突帯下にススが付着する。胴部から口縁部にかけてわずかに開く。

433 は幅1.3cm程の突帯が付く。突帯から口縁部にか

けて開く器形で布目痕が残る突帯が付く。434は幅1cm程の突帯が付く。突帯下が溝状に凹んでいる。

435 は甕の胴部で、突帯の一部が残る。脚部から突帯の下部にかけてわずかに開き、口縁部にかけて直線的に立ち上がる器型である。

436 は甕の胴部から脚部に至る部分である。脚部がわずかに開く器型である。

堅穴住居跡3号

A・B-30区においてIVb層上面で検出された。南東部分と北西部は調査区外に伸びていると考えられる。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げた。中央部分は深さ25cm程度であった。床面には硬化面が検出され、それを除去したがビット等は確認されなかった。南側部分に灰跡と考えられる掘り込みが確認された。深さは、検出面から深い所で25cm、中央付近は15cmであった。隣には炭化物の広がる区域があり、そこから成川式土器の底部が出土した。埋土から土器片が54点、石器が2点が出土した。その内、土器4点、石器2点を図化した。

437 は甕の底部である。底の部分にヘラ状工具で表面を削り取った痕が残る。外面は底部中央から放射状に調整痕が残る。

438 は甕の口縁部で、胴部から口縁部にかけてわずかに外反する。口唇部には平坦面が形成され、中央部分に溝が入れられる。439, 440 は甕の脚部である。

439 は全体が赤褐色を呈する。内面、外面とも表面が粗く、調整痕が不明瞭である。底部から胴部にかけて直

線的に開く。440 は脚部が一部残る。器形は底部からわずかに開く脚部を持ち、底部から胴部にかけてやや開く形状が想定される。

441 は軽石製の石皿である。一部が欠損している。表裏両面に凹みが見られる。442 は頁岩製の砥石である。半分が欠損し、表裏及び側面に平滑面がある。側面に敲打痕が観察される。

古墳時代の遺物

443～450 は、住居跡以外から出土した古墳時代の遺物である。すべて、成川式土器片である。443 は壺で、口縁部から頸部に該当し、口縁部にかけて直線的に開く。

444 は壺の頸部で、胴部から頸部にかけてすぼまる器形

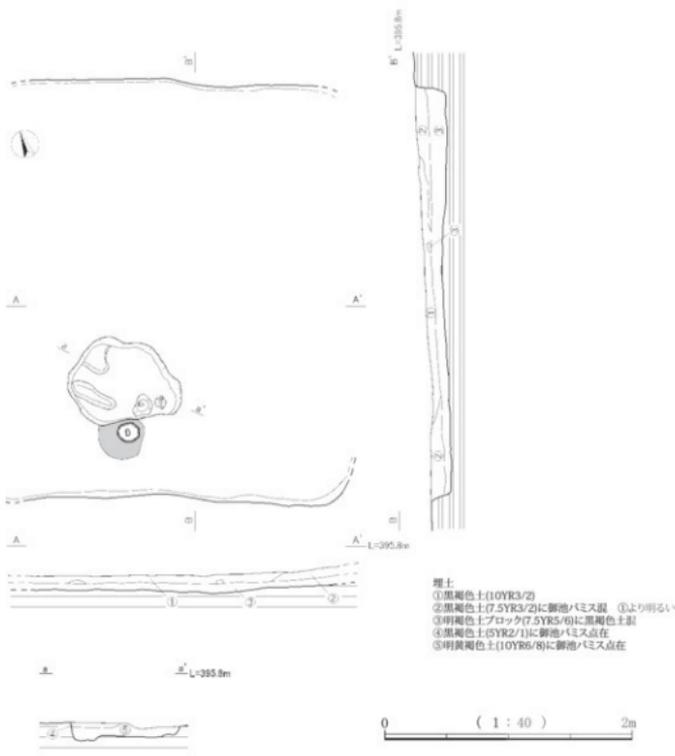
である。445 は壺の底部で、底にはわずかに平坦面が形成される。

446 は甕の口縁部で、口縁部が大きく外反する器形で口唇部に平坦面が形成される。

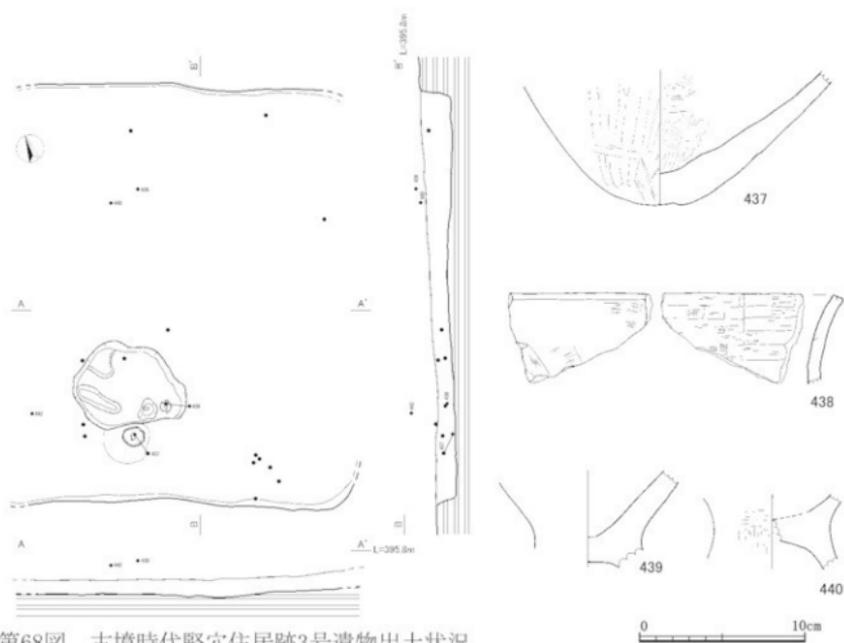
447 は甕の口縁部である。口縁部がわずかに外反する。口唇部は内面、外面両側からナデられ、平坦部がない。

448, 449 はいずれも甕の胴部であり、1cm 幅の突帯が貼付される。448 は刻目に布目痕が明瞭に残る。449 は全体が赤褐色を呈し、器壁が 6mm とやや薄い。

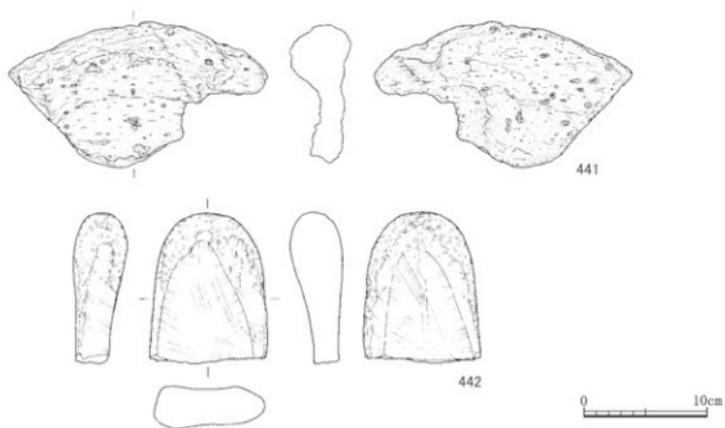
450 は、甕の脚部から胴部にかけての部分で、器面に胎土に含まれていた砂粒が露出する。底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる器形である。



第67図 古墳時代堅穴住居跡3号検出状況



第68図 古墳時代堅穴住居跡3号遺物出土状況



第69図 古墳時代堅穴住居跡3号内出土遺物



第70図 古墳時代出土遺物

表 13 古墳時代遺構内土器観察表

墳号	遺構名	種類	調査	口径 (cm)	器高 (cm)	調整		色 調		文様	胎土				焼法	備考	
						外面	内面	内面	外面		赤	灰	黄	黒			
61	439 祭祀土器1号	甕	調査	—	46.0	48.0	調整済、ナツ	ナツ	シロ・黄緑 (0.7)30	シロ・黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県
	440 祭祀土器1号	甕	調査	38.5	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	441 祭祀土器1号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	○	○	○	○	良好	大分県
62	442 祭祀土器1号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	443 祭祀土器1号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	444 祭祀土器1号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	445 祭祀土器1号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	446 祭祀土器1号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
65	447 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	448 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	449 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	450 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	451 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	452 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	453 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	454 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	455 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	456 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
66	427 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	428 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	429 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	430 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	431 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	432 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	433 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	434 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	435 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	436 祭祀土器2号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
69	437 祭祀土器3号	甕	調査	—	25.0	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	438 祭祀土器3号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	439 祭祀土器3号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	
	440 祭祀土器3号	甕	調査	—	—	調整済、ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県	

表 14 古墳時代遺構内土器観察表

墳号	遺構名	種類	材質	最大径(cm)	最大径(cm)	最大径(cm)	重量(g)	備考
62	417 祭祀土器1号	甕	調査	36.9	15.5	7.9	5,000	胎土混
	418 祭祀土器1号	甕	調査	10.5	9.0	7.9	1,200	胎土混
	419 祭祀土器1号	甕	調査	10.4	8.9	5.4	200	胎土混
69	441 祭祀土器3号	甕	調査	12.0	21.0	8.45	300	
	442 祭祀土器3号	甕	調査	12.35	9.6	4.5	685	胎土混

表 15 古墳時代土器観察表

墳号	区	種類	調査	口径 (cm)	器高 (cm)	調整		色 調		文様	胎土				焼法	備考	
						外面	内面	内面	外面		赤	灰	黄	黒			
70	443 甕	C-26	調査	49.9	—	0.0	調整済、ナツ	調整済、ナツ	シロ・黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	
	444 甕	B-32	調査	—	—	—	ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	○	○	○	○	良好	
	445 甕	A-28	調査	—	—	0.0	調整済、ナツ	調整済、ナツ	シロ・黄緑 (0.7)30	シロ・黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	○	○	○	○	良好	
	446 甕	B-31	調査	—	—	—	ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	
	447 甕	B-34	調査	—	—	—	ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好	大分県
448 甕	C-25	調査	—	—	—	調整済、ナツ	調整済、ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	○	○	○	○	良好		
449 甕	B-32	調査	—	—	—	ナツ	調整済、ナツ	調整済、ナツ	シロ・黄緑 (0.7)30	シロ・黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	○	○	○	○	良好	大分県
450 甕	B-25	調査	—	—	—	ナツ	ナツ	黄緑 (0.7)30	黄緑 (0.7)30	—	○	○	○	○	良好		

4 中世以降の調査

中世以降の調査は、重機でⅠ層の表土、Ⅱ層の文明ボラと呼ばれる軽石層を取り除き、Ⅲ層上面を検出することから開始した。

耕作が行われていた場所などでは、すでにⅢ層までが削平を受けていたが、それ以外の場所では比較的安定した堆積状況であった。

削平を受けていない場所では、Ⅲ層上面からⅡ層の軽石が帯状に検出され、それを畝の畝状遺構であると判断した。なお、いずれの畝状遺構内及び畝間の軽石層内からは遺物の出土は見られなかった。

調査は、畝間の軽石層を丁寧に取り除いた後、実測・写真撮影を行った。

なお、今回の調査において、畝状遺構と同時期と考えられる他の遺構は確認されなかった。

畝状遺構

A・B-28・29区及びA・B-31・33区において、Ⅲ層上面から検出された帯状の軽石帯を慎重に除去しながら畝状遺構を調査した。

畝間に積もった軽石の厚さは、深い所で約11cm、浅い所では軽石の堆積が見られない箇所もあった。そのような軽石の堆積が見られなかった畝は、土圧等の二次的な影響を受けて形状が崩れたものと考えられる。

なお、畝間の軽石を取り除いた後、掘り込みの深さを観察してみると、その深さはⅢ層までに留まり、Ⅳ層まで掘り込まれたものは見られなかった。

畝状遺構1 (A・B-28・29区)

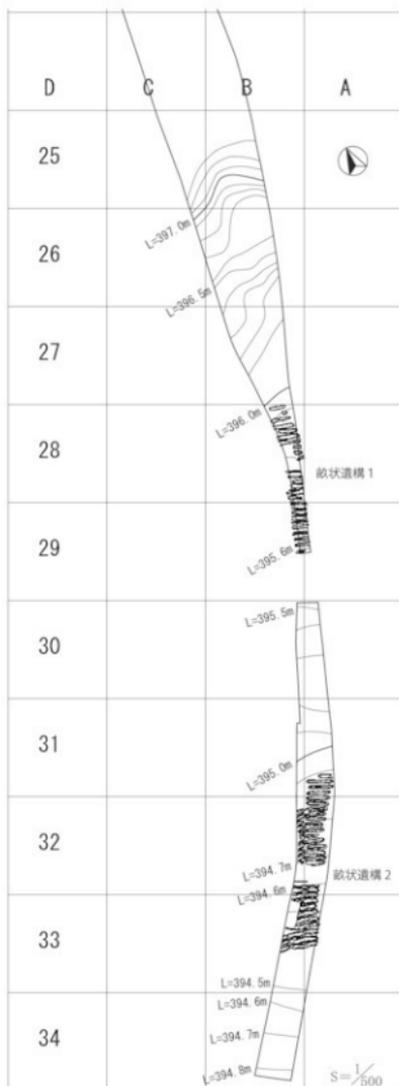
A・B-28・29区でほぼ東西方向に並ぶ27条の畝間が確認された。両端は途切れているが、調査区外に伸びていると考えられる。

形状が不明瞭な畝も見受けられるが、土圧等の二次的な影響により本来の形状が崩れたことによるものと考えられる。

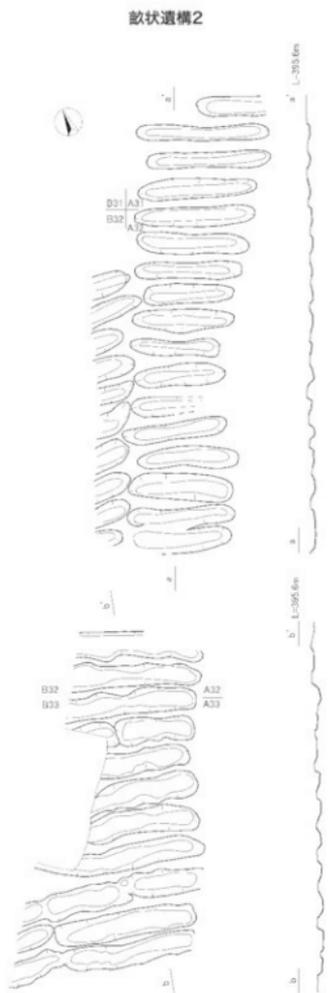
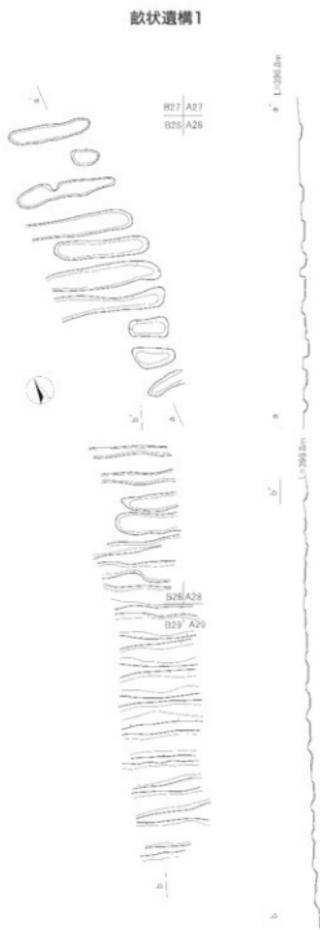
畝状遺構2 (A・B-31～33区)

ほぼ東西方向に並ぶ42条の畝間が確認された。西側は途切れているが調査区外に伸びていると考えられる。

比較的保存状態が良く、ほぼ一定の間隔で並んでいる様子が復元できた。A-32区とB-32区の境界付近は畝が途切れているが、畝境を示す盛土等の目印は確認されなかった。



第71図 畝状遺構配置図



0 (1 : 100) 5m

第72図 款状遺構検出状況

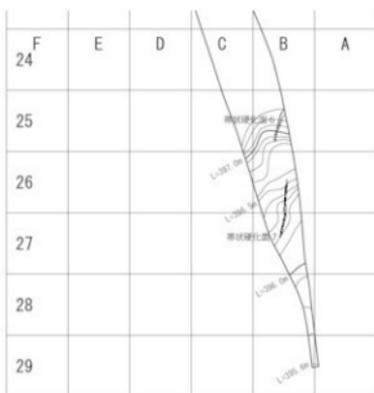
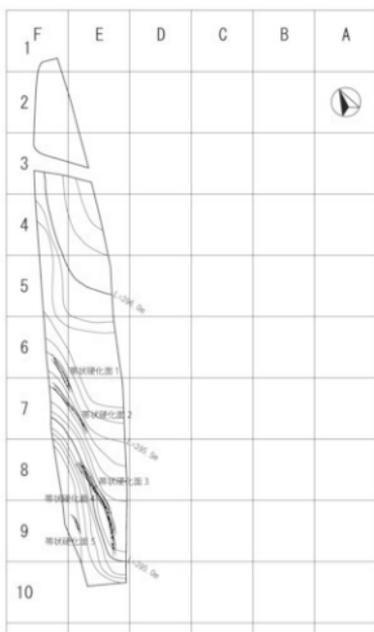
帯状硬化面

E-F-6～9区のⅢ層上面から5条の硬化面が、B-C-25～27区のⅣa層上面から2条の硬化面が検出された。いずれも、その形状から古道であると判断した。

調査は検出後、写真撮影をした後、一部にベルトを設定して掘り下げた後、実測・写真撮影を行った。

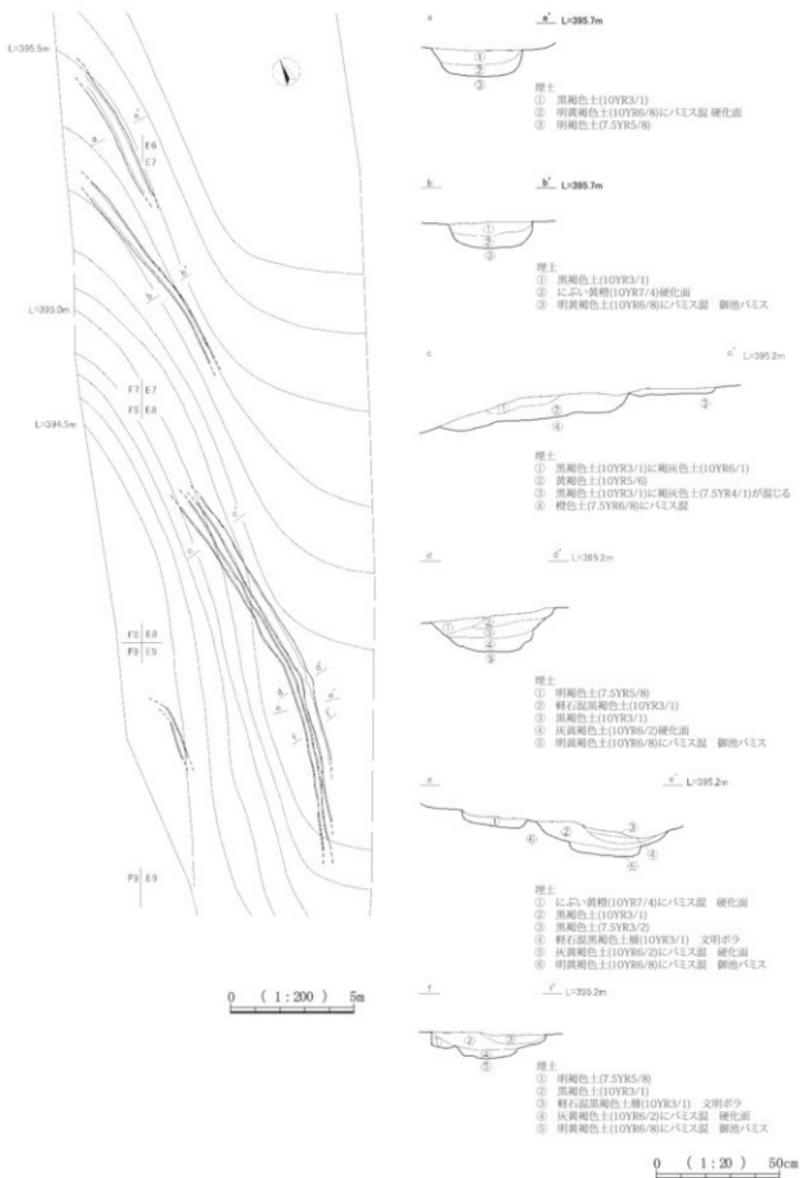
2か所の硬化面は検出層が異なるが、いずれもほぼ果道に沿って南北に走っており、一連の古道であった可能性が考えられる。

いずれの硬化面も、周辺からは時期を特定できる遺物は出土しなかった。



S=1/800

第73図 帯状硬化面配置図



第74図 III層上面検出帯状硬化面検出状況・断面